

早稲田大学審査学位論文  
博士（人間科学）

注意の範囲モデルに基づく反すうの持続過程  
The sustaining process of rumination based on  
the attentional scope model

2020年7月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

佐藤 秀樹

SATO, Hideki

研究指導担当教員： 鈴木 伸一 教授

## 目 次

第 1 章	反すうと注意の範囲に関する研究動向と課題 .....	1
第 1 節	うつ病と抑うつの概観 .....	1
第 2 節	抑うつと反すうの関連性 .....	5
第 3 節	従来の反すうモデルの概観とその問題点 .....	6
第 4 節	注意の範囲モデルの概観 .....	10
第 5 節	反すうと注意の範囲に関する先行研究の問題点 .....	13
第 2 章	先行研究の問題点と本研究の目的 .....	19
第 1 節	先行研究の問題点の整理と本研究の目的 .....	19
第 2 節	本研究の意義 .....	19
第 3 節	本研究の構成 .....	20
第 4 節	本研究で扱う概念の整理 .....	20
第 3 章	Rumination about an Interpersonal Offense Scale (RIO) 日本語 版の作成と信頼性・妥当性の検討 (研究 1) .....	24
第 1 節	問題と目的 .....	24
第 2 節	本研究の仮説 .....	25
第 3 節	方法 .....	27

第 4 節	結果	31
第 5 節	考察	37
第 4 章	反すうによる注意の範囲の差異——思考内容の感情価と思考時間からの検討——（研究 2）	41
第 1 節	問題と目的	41
第 2 節	方法	42
第 3 節	結果	48
第 4 節	考察	53
第 5 章	ネガティブ気分下の注意の範囲が反すうに及ぼす影響（研究 3）	59
第 1 節	問題と目的	59
第 2 節	方法	59
第 3 節	結果	64
第 4 節	考察	75
第 6 章	総合考察	83
第 1 節	本研究結果のまとめ	83
第 2 節	反すうと注意の範囲の関連性	85
第 3 節	反すうと注意の範囲に関連する処理段階	90

第 4 章	注意の範囲モデルに基づく反すうの先行研究の説明 .....	91
第 5 節	本研究による臨床応用可能性 .....	92
第 6 節	本研究の限界点と今後の課題 .....	94
第 7 節	本研究による人間科学への寄与 .....	97
引用文献	.....	99
付 録	.....	116

## 第 1 章 反すうと注意の範囲に関する研究動向と課題

### 第 1 節 うつ病と抑うつの概観

#### 第 1 項 うつ病の概要

精神疾患の診断・統計マニュアルである *Diagnostic and Statistical Manual-5* (*DSM-5: American Psychiatric Association*; APA, 2013 高橋・大野監訳, 2014) によると, うつ病とは, 2 週間にわたり, ほとんど 1 日中, ほとんど毎日の抑うつ気分と興味・喜びの喪失を中核症状とした精神疾患である。DSM-5 のうつ病の診断基準を Table 1-1 に示す。

うつ病は, 日本を含む世界で主要な精神疾患の 1 つであり, 深刻な社会問題となっている。世界保健機関 (*World Health Organization*, 2017) は, うつ病の人は世界で推計 3 億 2200 万人に上ると指摘している。また, 日本でのうつ病の生涯有病率は 6.3% であり, 12 か月有病率は 2.1% であることが報告されている (立森・長沼・小山・小山・川上, 2007)。さらに, 日本におけるうつ病の経済的損失は, 2008 年で約 1 兆 2870 億円と推計されている (Okumura & Higuchi, 2011)。この損失は, うつ病による労働生産性の低下に伴う罹病費用と, 自殺による死亡費用が大半を占めており, うつ病患者は健常者よりも自殺念慮, 自殺計画, 自殺未遂の相対危険度が有意に高いことが報告されている (Okumura & Higuchi, 2011)。

うつ病の治療法としては, 認知行動療法の単独または薬物療法との併用での有効性が実証されている (Cuijpers, Karyotaki, Weitz, Andersson, Hollon & van Straten, 2014)。たとえば, 急性期および維持期のうつ病に対する認知行動療法の有効性が証明されており,

Table 1-1

うつ病の診断基準(APA, 2013 高橋・大野監訳, 2014)

- 
- A. 以下の症状のうち5つ(またはそれ以上)が同じ2週間の間に存在し、病前の機能からの変化を起こしている。これらの症状のうち少なくとも1つは(1)抑うつ気分、または(2)興味または喜びの喪失である。
- 注: 明らかに他の医学的疾患に起因する症状は含まない。
- (1) その人自身の言葉(例: 悲しみ, 空虚感, または絶望を感じる)か, 他者の観察(例: 涙を流しているように見える)によって示される, ほとんど1日中, ほとんど毎日の抑うつ気分。  
注: 子どもや青年では易怒的な気分もありうる。
  - (2) ほとんど1日中, ほとんど毎日の, すべて, またはほとんどすべての活動における興味または喜びの著しい減退(その人の説明, または他者の観察によって示される)。
  - (3) 食事療法をしていないのに, 有意の体重減少, または体重増加(例: 1ヵ月で体重の5%以上の変化)。またはほとんど毎日の食欲の減退または増加。  
注: 子どもの場合, 期待される体重増加が見られないことも考慮せよ。
  - (4) ほとんど毎日の不眠または過眠。
  - (5) ほとんど毎日の精神運動焦燥または制止(他者によって観察可能で, ただ単に落ち着きがないとか, のろくなったという主観的感覚ではないもの)。
  - (6) ほとんど毎日の疲労感, または気力の減退。
  - (7) ほとんど毎日の無価値感, または過剰であるか不適切な罪責感(妄想的であることもある。単に自分をとがめること, または病気になったことに対する罪悪感ではない)。
  - (8) 思考力や集中力の減退, または決断困難がほとんど毎日認められる(その人自身の言明による, または他者によって観察される)。
  - (9) 死についての反復思考(死の恐怖だけではない)。特別な計画はないが反復的な自殺念慮, または自殺企図, または自殺するためのはっきりした計画。
- 
- B. その症状は、臨床的に意味のある苦痛、または社会的、職業的、または他の重要な領域における機能の障害を引き起こしている。
- 
- C. そのエピソードは物質の生理学的作用、または他の医学的疾患によるものではない。
- 注: 基準A～Cにより抑うつエピソードが構成される。
- 注: 重大な喪失(例: 親しい者との死別, 経済的破綻, 災害による損失, 重篤な医学的疾患・障害)への反応は、基準Aに記載したような強い悲しみ、喪失の反芻、不眠、食欲不振、体重減少を含むことがあり、抑うつエピソードに類似している場合がある。これらの症状は、喪失に際し生じることは理解可能で、適切なものであるかもしれないが、重大な喪失に対する正常な反応に加えて、抑うつエピソードの存在も入念に検討すべきである。その決定には、喪失についてどのように苦痛を表現するかという点に関して、各個人の生活史や文化的規範に基づいて、臨床的な判断を実行することが不可欠である。
- 
- D. 抑うつエピソードは統合失調感情障害、統合失調症、統合失調様障害、妄想性障害、または他の特定および特定不能の統合失調症スペクトラム障害および他の精神病性障害群によってうまく説明されない。
- 
- E. 躁病エピソード、または軽躁病エピソードが存在したことがない。
- 注: 躁病様または軽躁病様のエピソードのすべてが物質誘発性のものである場合、または他の医学的疾患の生理学的作用に起因するものである場合は、この除外は適応されない。
-

認知療法は薬物療法と同等またはそれ以上の有効性が示されている (Driessen & Hollon, 2010; Hollon et al., 2005; Ravindran et al., 1999)。また、認知行動療法は薬物療法よりもうつ病の再発予防にも有効であることが示されている (Hollon, Stewart, & Strunk, 2006; Vittengl, Clark, Dunn, & Jarrett, 2007)。さらに、うつ病に対する認知行動療法の有効性は国内でも報告されている (伊藤ら, 2012)。

しかしながら、うつ病患者全体に対して十分な治療効果が得られているとは言い難い。たとえば、うつ病の治療に関する大規模臨床試験として *Sequenced Treatment Alternatives to Relieve Depression (STAR\*D)* 試験がある。STAR\*D 試験は、「抗うつ薬の1つを使用してよくなる場合の最善の治療法は何か」という臨床疑問を解決するために実施された臨床試験である。具体的には、選択的セロトニン再取り込み阻害薬の1つである *citalopram* の非盲検単独治療から開始し、その他の抗うつ薬治療や認知療法による寛解率を転機として段階的に実施した。その結果、*citalopram* からの薬物変更か増強療法として *bupropion*, *bupirone*, 認知療法のいずれかを導入した第2段階での累積寛解率は48%で、最終的な第4段階までの実際の累積寛解率は51%にすぎなかった (Figure 1-1; Rush, Trivedi, Wisniewski, Nierenberg, Stewart, Warden, & Fava, 2006)。これらのことから、うつ病の認知行動的特徴の解明やそれに基づくさらなる治療法の模索が必要である。

## 第2項 うつ病と抑うつの連続性

うつ病の主要な症状である抑うつは、健常群と臨床群で連続性が仮定

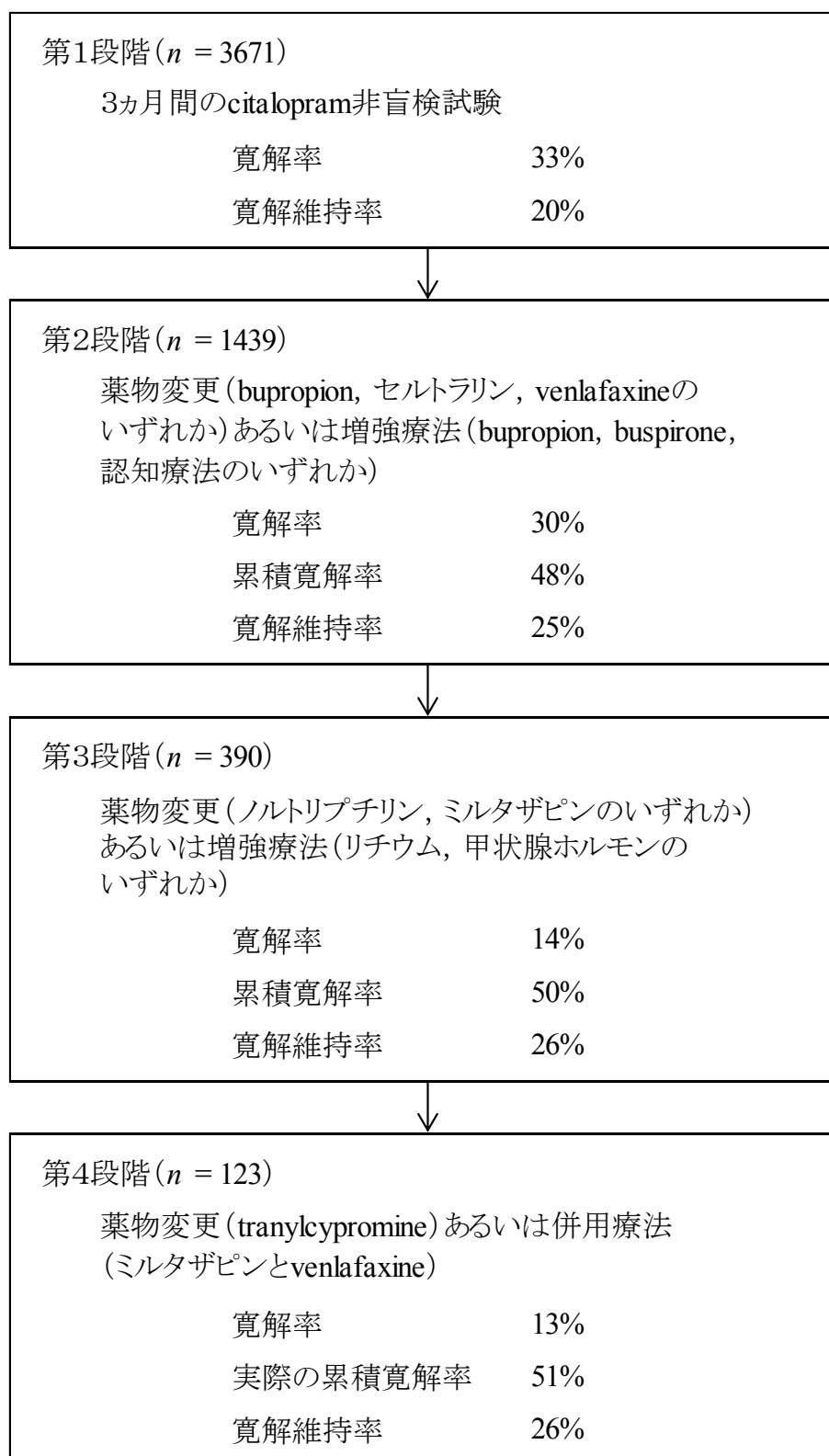


Figure 1-1. STAR\*D 試験の結果概要

(Ghaemi, 2008 松崎監訳, 2013; Rush et al., 2006 を参考に作成)



されている。健常群と臨床群の連続性や非連続性を検討する方法として Taxometric 分析がある。Taxometric 分析とは、健常群と臨床群を含む大規模サンプルをもとに症状の分布の連続性や非連続性を検討する方法であり（杉浦，2009），この分析を用いた多くの研究で抑うつ分布の連続性が示されている（Franklin, Strong, & Greene, 2002; Hankin, Fraley, Lahey, & Waldman, 2005; Prisciandaro & Roberts, 2005; Ruscio & Ruscio, 2000; Ruscio & Ruscio, 2002; Slade & Andrews, 2005）。たとえば，Prisciandaro & Roberts（2005）は，大規模コミュニティサンプルを対象に構造化診断面接の Composite International Diagnostic Interview を用いて抑うつ重症度評定を行ったところ，抑うつは次元（連続的）構造によって特徴づけられることを明らかにした。加えて，健常者を対象とすることで抑うつを維持・悪化させる要因の検討が可能になるため，本研究では抑うつ分布の連続性を仮定したうえで，大学生と大学院生を対象とすることとした。

## 第2節 抑うつと反すうの関連性

抑うつの維持や悪化と関連する認知行動的反応の1つに反すう（rumination）がある。反すうとは、「抑うつの症状や原因，意味，結果に繰り返し焦点づけられている反応様式」と定義される（Nolen-Hoeksema, 1991）。これまでの研究から，抑うつと反すうの関連性が明らかにされている。たとえば，縦断研究において，反すうは抑うつ持続や悪化，うつ病の発症や再発を予測することが報告されている（Just & Alloy, 1997; Nolen-Hoeksema, 2000; Spasojevic & Alloy, 2001）。加えて，反すうは薬物療法と認知療法に対する治療反応の低さと関連がある（Aldao, Nolen-Hoeksema, & Schweizer, 2010; Ciesla & Roberts, 2002;

Jones, Siegle, & Thase, 2008; Schmaling, Dimidjian, Katon, & Sullivan, 2002) ことや, 現在または過去にうつ病の診断を受けた者はそうでない者よりも反すう傾向が高い (Robert, Gilboa, & Gotlib, 1998) ことが示されている。これらのことから, 認知行動療法による抑うつ治療効果を高めるためには, 反すうの認知行動的特徴に焦点を当てた研究が必要である。

### 第3節 従来の反すうモデルの概観とその問題点

#### 第1項 個人差に焦点を当てた反すうモデルの概観

これまでの研究から, 反すうの維持や悪化を説明するモデルが数多く提唱されている。そのなかで, 反すうを比較的安定した特性や個人差ととらえるモデルが存在する。第1に, Nolen-Hoeksema (1991) の反応スタイル理論がある。この理論における反応スタイルとは, 抑うつに対する認知行動的反応を指し, 反すうと気そらし (distraction) に分類される。そのなかで, 反すうは抑うつ維持や悪化に影響を及ぼすことが明らかにされている (Nolen-Hoeksema, Wisco, & Lyubomirsky, 2008)。反応スタイル理論では, 抑うつ発症要因ではなく, 維持・悪化要因として反すうに焦点を当てている点の特徴である。

第2に, Martin & Tesser (1989) の反すうの目標進捗理論がある。この理論において, 反すうは現状に対する目標が達成できなかったときに生じる意識的思考であると説明される。つまり, 現状と目標の乖離が大きくなるほど反すうは持続し, それによって苦痛度や制御困難性が高まると説明される (Carver & Scheier, 1990; Martin & Tesser, 1996)。また, この理論では, 反すうの思考内容は抑うつに関連したもの限定していない点の特徴である。

第3に、反応スタイル理論と反すうの目標進捗理論を包括し発展させたモデルとして習慣目標モデルがある（Watkins & Nolen-Hoeksema, 2014）。このモデルにおいて、反すうは現状と目標の乖離によって引き起こされ、抑うつ状態下などの反すうが繰り返して生じる文脈との自動的な連合プロセスを通じて習慣化されたものと仮定される。そのうえで、反すうと文脈の随伴性が形成されることで、ネガティブな内容や抽象的・受動的な自己注目が促進され、反すうの習慣が形成される。そして、反すうの習慣が形成されることで、現状と目標の乖離の程度に関わらず文脈を手がかりに反すうが生じてしまうために、反すうを制御することが困難になると説明される。

ほかにも、自己調整実行機能モデル（Wells & Matthews, 1994）や反すうのメタ認知モデル（Papageorgiou & Wells, 2003）など、メタ認知的信念の観点から反すうの特徴を説明したモデルがある。このモデルにおけるメタ認知的信念とは、ある思考の機能や性質に関するとらえ方や思考の制御に関する信念を表す。そのうえで、「反すうによって自分自身の問題を解決することができる」などのポジティブなメタ認知的信念と、「反すうはやめたくてもやめることができない」などのネガティブなメタ認知的信念が反すうを動機づけることで反すうが維持されると説明される（Raes, Hermans, Williams, Bijttebier, & Eelen, 2008）。

## 第2項 認知的情報処理に焦点を当てた反すうモデルの概観

反すうの維持や悪化を説明するモデルは、特性や個人差としての反すうだけでなく、状態反すうを含む認知的情報処理モデルも提唱されている。これまでの研究から、状態反すうは気分や思考プロセス、問題解決行動、精神病理に悪影響を及ぼす（Lyubomirsky, Layous,

Chancellor, & Nelson, 2015) ことや, 反すうの日内変動として朝と夜の時間帯に状態反すうが悪化する (Moberly & Watkins, 2008; Takano & Tanno, 2011) ことが指摘されている。加えて, 反すうなどの精神症状を状態として扱うことで, 反すうと関連があるほかの変数との因果関係を強く主張することができる (杉浦, 2009) ことから, 認知的情報処理の焦点を当てた反すうモデルの理解が重要である。

第1に, 反すうの気分一致効果バイアスがある (Joormann, 2010; Koster, Lissnyder, Derakshan, & De Raedt, 2011)。気分一致効果バイアスは, 感情ネットワークモデル (Bower, 1981) をもとに説明される。感情ネットワークモデルとは, 外的なネガティブ刺激に対する注意の向きやすさや偏りを説明するモデルである。このモデルでは, 知識構造のネットワークに感情のノードが存在し, それらの感情を経験した過去の出来事の記憶, それらの感情に伴う表出行動や自律神経反応などのノードが連結されていることを仮定する。たとえば, 抑うつが喚起されると当該感情ノードが活性化することで, 抑うつと感情価が一致する情報を選択的に処理するという気分一致効果バイアスが生じると説明される

(Bower, 1981)。この場合, 反すうによって思考内容の感情価と一致する情報に対して気分一致効果バイアスが生じることが想定される。実際に, 反すうはネガティブ刺激に対する注意の捕捉を促進する (Koster, De Lissnyder, & De Raedt, 2013) ことや, ネガティブ情報の更新や切り替えが困難になることと関連する (De Lissnyder, Koster, Goubert, Onraedt, Vanderhasselt, & De Raedt, 2012) ことが報告されている。したがって, 気分一致効果バイアスは, ネガティブ刺激の選択的処理や, ネガティブ刺激の処理からの切り替えの困難さという反すうの認知的情報

処理の特徴を説明するモデルといえる。

第2に、資源分配モデル (Ellis & Ashbrook, 1988) と資源消耗モデル (Levens, Muhtadie, & Gotlib, 2009) がある。これらのモデルでは、反すうをすることで一定の認知資源が枯渇してしまい、反すうの制御や目標志向的な処理が阻害されることを仮定する。ここでの認知資源の枯渇とは、ある対象からほかの対象に注意を切り替えることの困難さを説明する概念である。そのため、いったんある刺激に注意が向けられると、その情報の処理に多くの認知資源が消費されてしまい、その刺激から別の刺激に注意を切り替えることが困難になると説明される。実際に、反すうを誘導するとワーキングメモリや実行機能に関連する認知課題の成績が低下することが報告されている (Philippot & Brutoux, 2008; Watkins & Brown, 2002)。たとえば、Watkins & Brown (2002) は、抑うつ群と非抑うつ群を対象に反すうか気そらしを誘導したうえで、実行機能を測定する課題である乱数生成課題を行った。その結果、抑うつ群で反すうを誘導すると乱数生成課題の成績が低下することが示された。このことから、反すうをすることで認知資源が枯渇し、問題解決に向けた認知資源の配分が妨げられることで実行機能に関する課題の成績が低下すると説明することができる。したがって、認知資源の枯渇という概念は、実行機能やワーキングメモリの観点から、反すうによってほかに取り組むべき思考や問題解決行動のプランニングに意識を注ぐことができなくなるという状態像を説明する概念といえる。なお、本研究では、資源分配モデルと資源消耗モデルを包括して認知資源の枯渇モデルと操作的に定義する。

### 第3項 従来の反すうモデルの問題点

これまで述べてきたように、反すうの維持や悪化を説明するために複数のモデルが提唱されているが、これらのモデルでは説明することができない知見も報告されている。認知的情報処理に基づく反すうモデルのうち、感情ネットワークモデルでは、反すうによってネガティブ刺激に対して気分一致効果バイアスが生じることを仮定する。また、認知資源の枯渇モデルでは、反すうによって一定量の認知資源が消費されてしまい、実行機能を必要とする認知的処理が困難になることを仮定する。しかしながら、感情ネットワークモデルに基づく先行研究では、不安と比べて抑うつや反すうの気分一致効果バイアスは知見が一貫していないことが指摘されている（Donaldson, Lam, & Mathews, 2007; Gotlib & Joormann, 2010; Mathews & MacLeod, 2005; Mogg & Bradley, 2005）。また、認知資源の枯渇モデルに基づく先行研究では、反すう傾向が高いほど課題に関連した情報の保持が容易である（Altamirano, Miyake, & Whitmer, 2010）ことや、注意を捕捉するような外的情報からの干渉を受けにくい（Altamirano et al., 2010; Zetsche, D'Avanzato, & Joormann, 2012）ことが報告されている。必要とされる情報を干渉から保護し保持することは、実行機能による認知的情報処理であると考えられるため、これらの結果は認知資源の枯渇モデルに基づく予測と一致しない。これらのことから、反すうの維持や悪化を説明する新たなモデルを検討する必要がある。

## 第4節 注意の範囲モデルの概観

### 第1項 注意の範囲モデルの概要

従来の反すうモデルの問題点を克服しうるモデルとして、注意の範囲

モデル (attentional scope model; Whitmer & Gotlib, 2013) がある。気分の拡張—形成理論 (Fredrickson, 2001) では、感情状態が注意の範囲を調整して情報の選択や取り入れを変化させることを仮定する。この理論をふまえて、注意の範囲モデルでは、ネガティブな話題を繰り返し考えると注意の範囲が狭くなり、思考のコントロールに必要な情報の取り込みが制限される。そのことで、特定の話題に限定された思考が繰り返し生じ、反すうが持続すると説明される (Whitmer & Gotlib, 2013)。

本研究における注意の範囲とは、先行研究 (Fang, Sanchez-Lopes, & Koster, 2017) に基づき、「環境から直接知覚される情報の総量」と定義する。すなわち、視空間上の注意の範囲が狭い場合には知覚される情報の総量が少ないと理解することができる。注意の範囲を情報の総量から定義することで、注意の範囲という構成概念を客観的に測定や操作をすることが可能になる。そのため、本研究では Fang et al. (2017) の定義を採用することとした。

注意の範囲モデルを支持する知見として、Grol, Hertel, Koster, & De Raedt (2015) は、Attentional Breadth Task を用いて反すうが自己関連刺激に対する注意の範囲に及ぼす影響を検討した。Attentional Breadth Task は、基準となる刺激からターゲットとなる刺激までの物理的な距離をもって注意の範囲を測定する課題である。その結果、反すうのネガティブな下位因子である考え込み (brooding) は、自己関連刺激に対する注意の範囲の狭さに正の影響を与えることが示された。また、Fang et al. (2017; 2018b) は、Moving Window Task を用いて Grol et al.

(2015) と同様の検討を行った。Moving Window Task は、視線追跡装置と同期させて視線対象の可視範囲を変動させることで注意の範囲を実験的に操作する課題である。その結果、注意の範囲が狭い条件におい

て、特性反すう高群は低群よりも総読み取り時間が短く、視線固定回数が少なかった。この結果は刺激の種類による違いはなく、感情状態や抑うつを統制しても同様の結果が示された。これらのことから、反すうは注意の範囲を狭くすると考えられる。

注意の範囲モデルの特徴として、反すうの持続や制御に関わる情報選択のプロセスを注意の範囲という自動的な認知的情報処理で説明する点が挙げられる。実際に、注意の範囲はセルフコントロールや感情制御に重要な役割を果たすことが指摘されている (Hanif, Ferrey, Frischen, Pozzobon, Eastwood, Smilek, & Fenske, 2012; Lutz, Slagter, Dunne, & Davidson, 2008)。また、注意という認知的情報処理は感覚処理から情報選択や反応出力など複数の処理段階で構成され (Lavie & Tsai, 1994; Vogel, McCollough, & Machizawa, 2005), なかでも注意の範囲は初期の感覚段階で処理されると考えられている (守谷・河西・入戸野, 2011)。これは、注意の範囲は初期段階の感覚処理を表す事象関連電位 (ERP) の N1 成分や P1 成分と関連があるという知見 (Hanif et al., 2012; Luck, Woodman, & Vogel, 2000) からも推察される。

## 第 2 項 注意の範囲モデルの利点と従来の知見の説明

注意の範囲モデルは、本モデルを直接的に検討した研究はいまだ少ないという問題点はあるものの、従来の反すうモデルで説明できなかった知見を含め、多くの知見を説明することができると考えられる。すなわち、反すうによって注意の範囲が狭くなれば、無関連な外的情報からの干渉は生じにくくなり (Altamirano et al., 2010; Zetsche et al., 2012), 注意を向けた情報の保持は容易になる (Altamirano et al., 2010)。その一方で、取り組むべき課題が変更された場合には、それまで利用してい



た情報から注意を切り替え，新たな情報に更新するという認知的処理が困難になる（Roberts, Watkins, & Wills, 2017; Whitmer & Banich, 2007）と説明することができる。

また，注意の範囲をいう概念を用いることで，これまで説明できなかった知見だけでなく，感情ネットワークモデルや認知資源の枯渇モデルで説明されてきた知見も包括的に説明することができると考えられる。すなわち，感情ネットワークモデルでは，思考内容の感情価と一致する情報に対して気分一致効果バイアスが生じることで反すうが持続することを想定する。これは，まず，反すう状態では自動的な処理として注意の範囲が狭くなる。そして，反すうによってネガティブ情報への注意の偏り（すなわち気分一致効果バイアス）が生じることで，注意の範囲内に占めるネガティブ情報の割合が多くなり，反すうが持続すると説明することができる。また，認知資源の枯渇モデルでは，ネガティブな思考を制御するのに必要な認知資源が枯渇することで反すうが持続することを想定する。これは，反すうが注意の範囲を狭めることで，広い範囲から多くの情報を取り込む必要のある認知的処理（例：更新や切り換え）は妨害されるが（Ellis & Ashbrook, 1988; Levens et al., 2009），狭い範囲で情報を保持するような認知的処理は容易になる（Altamirano et al., 2010; Zetsche et al., 2012）と説明することができる。

## **第5節 反すうと注意の範囲に関する先行研究の問題点**

### **第1項 横断研究による内的妥当性に関する課題**

これまで述べてきたように，注意の範囲モデルは反すうに関する多くの知見を説明することができると考えられるが，以下の問題点が存在する。第1の問題点として，注意の範囲モデルを支持する先行研究は，主

に横断研究デザインで反すうとワーキングメモリの関連を検討しているため（Whitmer & Gotlib, 2013）、変数間の因果関係は限定的である。また、縦断研究デザインを用いた場合でも、抑うつや感情状態が剰余変数として反すうと注意の範囲に影響する可能性を排除することができない。一方で、精神症状に関する実験を用いた研究の利点として、(a)実験によって時間の前後関係が保証される点で変数間の因果関係を強く主張できること、(b)操作可能・管理可能な原因を明らかにすることができること、(c)健常者であってもある条件が加われば症状と類似した状態を示すことができることが指摘されている（杉浦, 2009）。そのため、反すうと注意の範囲に関する内的妥当性の高い知見を示すためには、反すうや注意の範囲を実験的に操作する必要があるが、そうした研究はほとんどない。

## 第2項 本邦で標準化された状態反すう尺度に関する課題

第2の問題点として、反すうを状態ととらえ、実験的に操作するうえで、本邦で標準化された状態反すう尺度が作成されていない。たとえば、佐藤・伊藤・鈴木（2017）では、反すうを実験的に操作したうえで長期記憶の抑制を表す検索誘導性忘却に及ぼす影響を検討している。この研究では、操作チェック質問紙（Ehring, Fuchs, & Kläsener, 2009）を実験操作に合わせて修正したものを用いて状態反すうを測定しており、(a)課題への集中度、(b)自己に関する嫌な経験の想起、(c)苦痛度、(d)嫌な経験を考え込む程度の4項目で構成されている。その結果、状態反すう群では統制群よりも実験操作の前後で操作チェック質問紙の得点が高くなり、刺激の感情価に関わらず長期記憶の抑制が困難になることが示唆された（佐藤ら, 2017）。その一方で、佐藤ら（2017）が用いた操作

チェック質問紙の信頼性と妥当性は検討されていない。反すうを実験的に操作した場合、操作チェックとして状態反すうを定量的に測定する必要があるが、本邦ではそうした尺度は作成されていない。

これまで開発されている状態反すうを測定する尺度としては、Rumination about an Interpersonal Offense Scale (RIO; Wade, Vogel, Liao, & Goldman, 2008) がある。RIO は今現在の対人関係で生じるネガティブな気持ちの反応としての状態反すうを測定する尺度であり、反すうに関する定義や文献から反すうを測定する尺度をレビューして項目が作成された。この尺度は、尺度開発のために大学生 514 名、信頼性と妥当性の検討のために大学生 340 名、臨床群として対人関係上の悩みで治療を受けている大学生 113 名の 3 つのサンプルを対象にして開発された。RIO の構造的妥当性は、全てのサンプルで 6 項目 1 因子構造であることが確認されている。信頼性として RIO の内的整合性は、全てのサンプルで Cronbach の  $\alpha$  係数が .91~.92 であった。また、検査—再検査の間隔を 10 週間以上と設定したうえで 40 名のデータで再検査信頼性を検討したところ、RIO の再検査信頼性係数は  $r = .51$  であった。そして、RIO の構成概念妥当性は、怒り反すうの各下位尺度（怒り体験想起、報復思考、怒り記憶）、対人関係上の傷つきに対する反応の各下位尺度（報復、回避）、抑うつなどで検討されている。その結果、RIO は怒り体験想起と  $r = .46$ 、報復思考と  $r = .35$ 、怒り記憶と  $r = .51$ 、報復と  $r = .32$ 、回避と  $r = .14$ 、抑うつと  $r = .28$  の相関がそれぞれ示された ( $ps < .001$ )。これらのことから、RIO は状態反すうを測定するのに有用な尺度であると考えられるが、RIO の日本語版は作成されていない。

### 第3項 反すう操作における思考時間に関する課題

第3の問題点として、反すうが注意の範囲に及ぼす影響を検討するうえで、従来の反すう操作では思考内容の感情価のみを操作しており、思考時間が操作されていない。反すうを実験的に操作する手続きとして、Nolen-Hoeksema & Morrow (1993) の反応課題がある。この課題では、自身のネガティブな気持ち、考え、身体感覚などに注意を向ける反すう条件と、ニュートラルな対象に注意を向ける気そらし条件を設定して、いずれかの条件を8分間経験させることで状態反すうを操作している。その一方で、反すうはネガティブな思考内容だけでなく、思考の持続性もその特徴であることが指摘されている (Olatunji, Naragon-Gainey, & Wolitzky-Taylor, 2013; Smith & Alloy, 2009)。また、気分の拡張—形成理論では、ポジティブ感情が注意焦点を拡張させることは繰り返し報告されているが (Garland, Fredrickson, Kring, Johnson, Meyer, & Penn, 2010)、ネガティブ感情が注意焦点を狭くすることは知見が一貫していない (Fredrickson & Branigan, 2005; Rowe, Hirsh, & Anderson, 2007)。その一方で、反すうが注意の範囲を狭くする可能性は複数の先行研究で指摘されていることから (Grol et al., 2015; Fang et al., 2017; 2018b)、思考内容の感情価と思考時間が注意の範囲を狭める要因である可能性があるが、この点については検討されていない。

### 第4項 反すうと注意の範囲が抑うつを維持・悪化させるプロセスに関する課題

第4の問題点として、反すうと注意の範囲が抑うつを維持・悪化させるプロセスは明らかにされていない。これまでの研究では、反すうと注意の範囲の関連については検討されているが (Grol et al., 2015; Fang

et al., 2017; 2018b), 反すうが注意の範囲を狭くすることで抑うつが悪化するプロセスまでは検討されていない。

Teasdale (1985) の抑うつの処理活性仮説では、抑うつとネガティブな認知情報処理の相互影響性を仮定している。具体的にこのモデルでは、抑うつが高い者や大うつ病エピソードを経験した者は、ネガティブなライフイベントを経験するとネガティブな記憶を想起しやすくなり、普段はネガティブに感じない体験でさえもネガティブに感じやすくなるといった抑うつの情報処理が活性化する。そのことで、もともとの体験がさらに嫌悪的で制御することが困難であると感じるようになり、抑うつがさらに悪化してしまうという悪循環が形成されると説明される。実際に、抑うつの情報処理が活性化した状態である反すうが抑うつを高めるだけでなく、抑うつが反すうを高めることが報告されている (Nolen-Hoeksema, Stice, Wade & Bohon, 2007; 高野・丹野, 2008a)。

反すうが注意の範囲に及ぼす影響だけでなく、注意の範囲が反すうに及ぼす影響も検討することは、認知バイアス修正法における基礎的知見の提供にもつながると考えられる。認知バイアス修正法とは、ネガティブな認知的情報処理を改善させるための認知訓練を行うことで抑うつ、不安、反すうといった臨床症状の低減を目指す治療法である (Koster, Hoorelbeke, Onraedt, Owens, & Derakshan, 2017)。認知バイアス修正法の利点として、ネガティブな認知的情報処理と臨床症状の因果関係を明らかにすることができることが挙げられる。その一方で、抑うつや反すうに対する認知バイアス修正法の治療有効性は知見が一貫していないため (Fang, Hoorelbeke, Bruyneel, Notebaert, MacLeod, De Raedt, & Koster, 2018; Koster et al., 2017), この介入法の基盤となる基礎的知見の蓄積が必要である。

これらの知見をふまえると、注意の範囲モデルでは、反すうが注意の範囲が狭めることで情報の取り込みが制限されると仮定する。そのため、ネガティブ気分下で注意の範囲が狭くなることで、特定の話題に限定された思考が繰り返し生じ、反すうが持続すると考えられるが、この点については検討されていない。

## 第 2 章 先行研究の問題点と本研究の目的

### 第 1 節 先行研究の問題点の整理と本研究の目的

第 1 章 5 節で反すうと注意の範囲に関する先行研究の問題点を概観した。そのうえで、今後の検討課題は以下のように整理することができる。

- (1) 反すうと注意の範囲に関する内的妥当性の高い知見を示すために、反すうや注意の範囲を実験的に操作する必要がある。
- (2) 状態反すうを定量的に測定することができる状態反すう尺度を作成する必要がある。
- (3) 思考内容の感情価と思考時間の観点から、反すうを実験的に操作する必要がある。
- (4) 反すうと注意の範囲が抑うつを維持・悪化させるプロセスを検討する必要がある。

これらの検討課題を解決するために、本研究では注意の範囲モデルに基づく反すうの持続過程を検討することを目的とした。

### 第 2 節 本研究の意義

認知的情報処理の観点から反すうの維持や悪化を説明するモデルとして、感情ネットワークモデルと認知資源の枯渇モデルがあることが整理された。これらは先行研究の知見を広く説明することができるモデルとして広く用いられている。その一方で、感情ネットワークモデルや認知資源の枯渇モデルでは説明な困難な知見も報告されている。そのなかで、注意の範囲モデルは、これらのモデルや概念では説明できなかった知見だけでなく、これらで説明がされてきた知見もあわせて説明することが

できるため、反すうの維持や悪化を説明するモデルとして有用であると  
考えられる。そのため、これまでほとんど検討されてこなかった注意の  
範囲という認知的情報処理の観点から反すうの維持や悪化を説明し、注  
意の範囲モデルの妥当性を明らかにすることができる点で意義があると  
考えられる。

### 第 3 節 本研究の構成

本研究は全 6 章で構成される (Figure 2-1)。第 1 章では、反すうと注  
意の範囲に関する研究動向と課題を整理し、本章で本研究の目的と意義  
を提示した。第 3 章 (研究 1) では、状態反すうを測定する尺度である  
Rumination about an Interpersonal Offense Scale (RIO) 日本語版を作成  
し、その信頼性と妥当性を検討した。第 4 章 (研究 2) では、反すうと  
注意の範囲に関する内的妥当性の高い知見を示すために、反すうを思考  
内容の感情価と思考時間の観点から操作したうえで注意の範囲に及ぼす  
影響を検討した。第 5 章 (研究 3) では、注意の範囲の観点から反すう  
の持続過程を明らかにするために、ネガティブ気分下の注意の範囲が反  
すうに及ぼす影響を検討した。これらをふまえ、第 6 章では、反すうと  
注意の範囲が双方向的に影響しあうという反すうの持続過程について考  
察したうえで、本研究による臨床応用可能性と人間科学への寄与につい  
て論じた。

### 第 4 節 本研究で扱う概念の整理

#### 第 1 項 うつ病と抑うつ概念の整理と本研究における「抑うつ」の定義

本邦では、うつ病に関連する用語が数多く用いられているため、本研  
究が対象とする臨床像や構成概念を明確にするために、これらの用語を



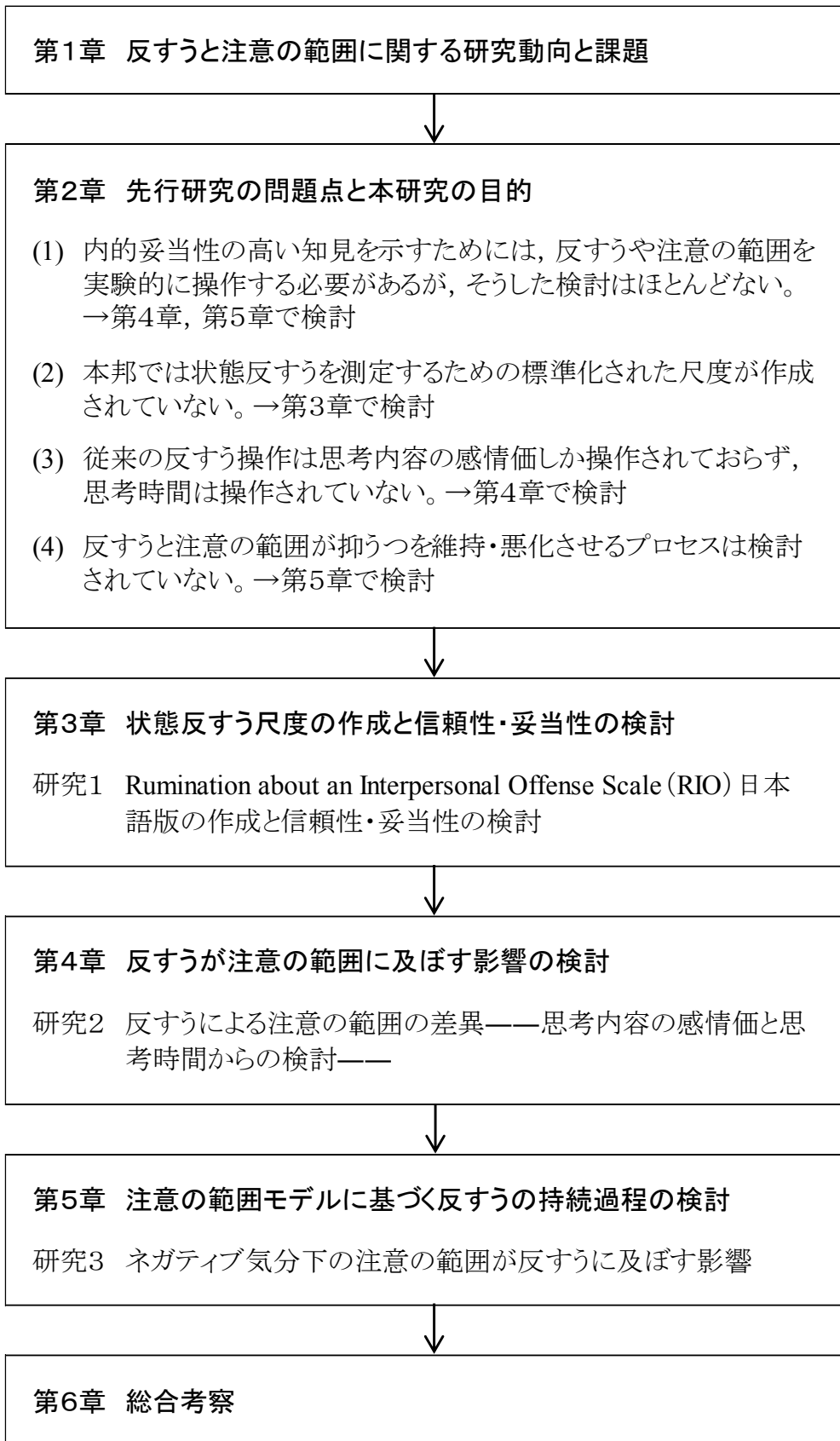


Figure 2-1. 本研究の構成

操作的に定義する必要がある。まず、本研究におけるうつ病とは、DSM-5 (Table 1-1; APA, 2013 高橋・大野監訳, 2014) の診断基準を満たした状態像と定義する。また、坂本 (1998) は、うつ病に関連する状態像として、抑うつ気分、抑うつ症状、抑うつ症候群に分類している。具体的に、抑うつ気分とは「一時的な落ち込み気分状態」、抑うつ症候群とは「診断基準に該当する症状」、抑うつ症候群とは「複数の抑うつ症状がまとまったもの」とそれぞれ定義されている (坂本, 1998)。その一方で、これらの状態像は重複した要素も含まれており、DSM-5 におけるうつ病の診断基準でも分類されていない。そのため、本研究では抑うつを「憂うつ感や気分の落ち込んだ状態」と定義する。

## 第 2 項 特性反すうと状態反すうの概念整理と本研究における「反すう」の定義

第 1 章 3 節において、特性や個人差に基づく反すうモデルと認知的情報処理に基づく反すうモデルの観点から、既存の反すうモデルを概観した。そのうえで、これらのモデルで対象とする反すうの状態像を明確にするためにも、特性と状態の観点から反すうを定義する必要がある。そこで本研究では、特性反すうを「安定的にネガティブな話題を長く考える傾向」、状態反すうを「ある時点でネガティブな話題を長く考えている状態」とそれぞれ定義する。そのうえで、本研究では反すうの認知的情報処理の特徴と反すうと注意の範囲の因果関係を検討するために、状態反すうに焦点を当てた研究を行う。

その一方で、特性反すうと状態反すうは互いに相反する状態像を指すわけではない。実際に、多くの先行研究で、状態反すうを行う頻度が高いことを特性反すうが高いことと想定している (Nolen-Hoeksema et al.,

2008; Olatunji et al., 2013; Smith & Alloy, 2009)。そのため、本研究の知見は状態反すうに限らず、反すうの認知行動的特徴を理解することにつながると考えられる。

### 第 3 章 Rumination about an Interpersonal Offense Scale (RIO) 日本語版の作成と信頼性・妥当性の検討 (研究 1)

#### 第 1 節 問題と目的

先行研究の問題点として、本邦では標準化された状態反すう尺度が作成されていないことが指摘された。内的妥当性の高い知見を示すためには、反すうを実験的に操作したうえで注意の範囲モデルを検討する必要がある。しかしながら、反すう操作の妥当性を確認するための尺度が存在しないため、実際には抑うつや感情状態が剰余変数となる可能性を排除することができない。

そこで、研究 1 では RIO 日本語版の作成とその信頼性と妥当性を検討することを目的とした。その際、尺度作成研究の質向上のためのガイドラインである ISPOR (International Society for Pharmacoeconomics and Outcomes Research) タスクフォースと COSMIN (Consensus-based Standards for Selection of Health Measurement Instruments) に従った。また、COSMIN において、妥当性は内容的妥当性、基準関連妥当性、構成概念妥当性に分類され、このうち構成概念妥当性は、構造的妥当性、異文化間妥当性、仮説検証の下位項目で構成される。RIO の原版は反すうに関する定義や文献から反すうを測定する尺度をレビューして項目が作成されたため (Wade et al., 2008)、RIO の内容的妥当性は確認されていると判断した。また、基準関連妥当性の検討は構成概念妥当性の仮説検証の手続きと重複するため、本研究では構成概念妥当性を検討することとした。

## 第 2 節 本研究の仮説

RIO 日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を検討するうえで、以下の基準と仮説を設定した。構造的妥当性の検討として、RIO の原版では 6 項目 1 因子構造であることが報告されているため (Wade et al., 2008), 確証的因子分析を行った。確証的因子分析のモデル適合度の基準は、GFI と AGFI と CFI が .95 以上、RMSEA が .08 以下としたうえで (Hooper, Coughlan, & Mullen, 2008), 「RIO 日本語版は原版と同様に 6 項目 1 因子構造である」という仮説を立てた。

信頼性として内的整合性の検討では、Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した。内的整合性の基準は、Cronbach の  $\alpha$  係数が .70 以上を採用基準とし、.80～.90 を十分な値とした (DeVellis, 2016)。また、再検査信頼性の検討では、1 回目調査と 2 回目調査の間で級内相関係数 (Intraclass Correlation Coefficient: ICC) を算出した。ICC の基準は、.40～.59 を fair, .60～.74 を good, .75 以上を excellent とした (Cicchetti, 1994)。RIO 日本語版は状態反すうを測定する尺度であるため、回答時の抑うつやストレスの程度などによって得点は変動することが想定された。そのため、RIO 日本語版は特性である特性反すうや私的自己意識よりも再検査信頼性が低いと考えられた。また、RIO の原版の再検査信頼性係数は  $r = .51$  であったことから (Wade et al., 2008), 「RIO 日本語版は特性反すうや私的自己意識よりも再検査信頼性係数が低いものの、.60 以上の値が示される」という仮説を立てた。なお、RIO 日本語版は特性ではなく状態としての反すうを測定する尺度であることから、検査—再検査の間隔を 2 週間に設定した。

構成概念妥当性の検討として、RIO の原版では怒りや対人関係上の傷つきに対する反応などとの関連を検討している (Wade et al., 2008)。そ

の一方で、反すうは抑うつ維持・悪化要因であるため (Nolen-Hoeksema et al., 2008), 本研究では抑うつに関連する要因として、特性反すう、私的自己意識 (反芻, 省察), 感情調節 (抑制, 再評価), 感情状態 (ネガティブ感情, ポジティブ感情) との関連を検討した。関連の強さは、先行研究 (Cohen, 1988) に従い、 $|r| < .10$  を相関なし、 $.10 \leq |r| < .30$  を弱い、 $.30 \leq |r| < .50$  を中程度、 $|r| \geq .50$  を強いとした。第 1 に、状態反すうと特性反すうは、状態と特性の違い以外ではネガティブ思考の反復性という点で共通した特徴をもち (Martin & Tesser, 1996), RIO の原版と特性反すうは  $r = .61 \sim .62$  の相関が示されている (Smart, Peters, & Baer, 2016)。このことから、「RIO 日本語版と特性反すうは .50 以上の正の相関が示されることで収束的妥当性が確認される」という仮説を立てた。第 2 に、状態反すうと私的自己意識において、反芻は「自己への脅威, 喪失, 不正によって動機づけられた自己へ注意を向けやすい特性」と定義され、省察は「知的好奇心によって動機づけられた自己へ注意を向けやすい特性」と定義される (高野・丹野, 2008b)。そのうえで、状態反すうと私的自己意識はいずれも自己に関する思考への注意の持続という点で状態反すうと共通した特徴をもつが (Nolen-Hoeksema et al., 2008), 私的自己意識の反芻は抑うつを悪化させ、省察は抑うつを低減させることが報告されている (Takano & Tanno, 2009)。また、状態反すうは抑うつと正の相関が示されていることから (Marchetti, Mor, Chiorri, & Koster, 2018; Nepon et al., 2011; Wade et al., 2008), 「RIO 日本語版と私的自己意識の反芻は .50 以上の正の相関が示されることで収束的妥当性が確認される」, 「RIO 日本語版と私的自己意識の省察は .30 未満の負の相関が示されることで弁別的妥当性が確認される」という仮説を立てた。第 3 に、状態反すうと感情調節において、状態反すうはネ

ガティブ思考の反復性を特徴とするのに対し、感情調節は感情に対する意図的・非意図的な対処を特徴とする点で異なる。その一方で、感情調節の抑制は「感情生起後に感情の表出を抑える方略」と定義され（吉津・関口・雨宮，2013），先行研究では特性反すうと  $r = .37$  の相関が示されている（Zawadzki, 2015）。また、感情調節の再評価は「感情の原因となる出来事を再解釈して感情の生起そのものを調節する方略」と定義され（吉津ら，2013），先行研究では特性反すうと  $r = -.26$  の相関が示されている（Zawadzki, 2015）。これらのことから、「RIO 日本語版と感情調節の抑制は.30以上.50未満の正の相関が示されることで収束的妥当性が確認される」，「RIO 日本語版と感情調節の再評価は.30未満の負の相関が示されることで弁別的妥当性が確認される」という仮説を立てた。第4に、状態反すうと抑うつにおいて、先行研究では  $r = .28$  ～.54の相関が示されている（Marchetti et al., 2018; Nepon et al., 2011; Wade et al., 2008）。このことから、「RIO 日本語版と抑うつは.50以上の正の相関が示されることで収束的妥当性が確認される」という仮説を立てた。最後に、状態反すうと感情状態において、反すうは精神的健康を悪化させることが指摘されているため（Nolen-Hoeksema et al., 2008），「RIO 日本語版とネガティブ感情は.50以上の正の相関が示されることで収束的妥当性が確認される」，「RIO 日本語版とポジティブ感情は.50以上の負の相関が示されることで収束的妥当性が確認される」という仮説を立てた。

### 第3節 方法

#### 調査対象者

本研究では、首都圏の私立大学3校に在籍する大学生と大学院生を対

象に質問紙を配布し，そのうち欠損値があった 19 名分のデータを除外した 208 名（男性 71 名，女性 137 名；平均年齢 20.46 歳 $\pm$ 2.24 歳）を分析対象とした。同様に，再検査信頼性の検討でも欠損値があった 1 名分のデータを除外した 55 名（男性 14 名，女性 41 名；平均年齢 20.35 $\pm$ 2.63 歳）を分析対象とした。その際，調査への参加に伴い，心理的な部分への質問に回答することでネガティブな感情が持続するリスクが想定された。このため，精神科や心療内科に通院中または通院歴があることと，向精神薬を服用中であることを除外基準とした。

なお，COSMIN における事前のサンプルサイズ設計として，構造的妥当性の検討では作成する尺度の項目数の 7 倍かつ 100 名以上がすぐれたサンプルサイズとされる（Terwee, Mokkink, Knol, Ostelo, Bouter, & de Vet, 2012）。また，再検査信頼性の検討では少なくとも 50 名が推奨される（Terwee et al., 2012）。そのため，本研究でもこれらのサンプルサイズを目標とし，いずれの基準も満たすことができた。

## RIO 日本語版の作成手続き

RIO 日本語版を作成するにあたり，ISPOR タスクフォース（稲田，2015；Wild, Grove, Martin, Eremenco, McElroy, Verjee-Lorenz, & Erikson, 2005）の尺度翻訳の手続きに従った。RIO の邦訳は，原版著者の Nathaniel G. Wade から承諾を得たうえで行われた。第 1 に，臨床心理学を専門とする博士後期課程の大学院生 1 名と，英語と日本語に堪能で本研究の目的を知らない 1 名が別々に RIO 原版の邦訳を行った。なお，邦訳を行う前に，前者は後者に対して RIO が測定する構成概念について説明を行った。第 2 に，2 名の翻訳者は各邦訳版を統合し，各項目の合意を図った。第 3 に，邦訳された RIO は元の英語版を知らない翻訳の専門企業の英語話者



1名によって逆邦訳された。第4に、日本語と英語のバイリンガルであるクロスチェッカーが邦訳版 RIO と逆邦訳版 RIO を比較し、両者の項目表現の等価性を確認した。そのうえで、項目表現の等価性について再検討の必要がある項目については、翻訳の専門企業から邦訳の修正が提案された。第5に、邦訳者2名が協議し邦訳の再検討を行ったうえで、修正された邦訳版 RIO を作成した。そのうえで、再度、翻訳の専門企業による逆邦訳ならびにクロスチェッカーによる項目表現の等価性の確認を行い、逆邦訳版 RIO を作成した。最後に、原版著者と協議しながら原版と日本語版の項目の等価性を確認したうえで、RIO 日本語版を完成させた。

## 調査材料

**デモグラフィックデータ** 性別と年齢の記入を求めた。

**健康アンケート** (1)病気やケガの有無、(2)服薬の有無、(3)睡眠不足と疲労の有無、(4)心理療法やカウンセリングを受けているか、(5)トラウマティックな経験の有無のうち、1つでも当てはまる項目があれば研究を中止するために使用した。

**状態反すう** 本研究で作成した RIO 日本語版を用いた。この尺度は6項目5件法で構成されており、「以下の項目は、対人関係で生じるネガティブな気持ちの反応を表しています。今現在、以下の文章がどの程度当てはまるか当てはまらないかを答えてください」という教示が用いられた。得点が高いほど状態反すうが高いことを表す。

**特性反すう** 日本語版 Ruminative Responses Scale (RRS; Hasegawa, 2013) を用いた。この尺度は22項目4件法で構成されており、得点が高いほど特性反すうが高いことを表す。

**私的自己意識** Rumination-Reflection Questionnaire 日本語版 (RRQ ; 高野・丹野, 2008b) を用いた。この尺度は 24 項目 5 件法からなり, 反芻と省察の下位因子で構成される。各下位因子の得点が高いほどそれぞれの私的自己意識が高いことを表す。

**感情調節** Emotion Regulation Questionnaire 日本語版 (ERQ ; 吉津ら, 2013) を用いた。この尺度は 10 項目 7 件法からなり, 抑制と再評価の下位因子で構成される。各下位尺度の得点が高いほどそれぞれの感情調節が高いことを表す。

**抑うつ** 日本語版 Center for Epidemiologic Studies Depression (CES-D ; 島・鹿野・北村・浅井, 1985) を用いた。この尺度は 20 項目 4 件法から構成されており, 得点が高いほど抑うつが高いことを表す。

**感情状態** 日本語版 Positive and Negative Affect Schedule (PANAS ; 佐藤・安田, 2001) を用いた。この尺度は 16 項目 6 件法からなり, ネガティブ感情とポジティブ感情の下位因子で構成される。各下位尺度の得点が高いほどそれぞれの感情状態が高いことを表す。

## 調査手続き

本調査は講義終了後の時間を使って一斉に無記名方式で実施された。まず, 調査の趣旨説明とあわせて, (1)調査協力は任意であり, いつでも中止することができること, (2)回答の有無および内容は学業成績に影響しないこと, (3)得られたデータは研究目的以外に使用しないことを説明した。そのうえで, 調査協力に同意が得られた者に対して質問紙への回答を求めた。そして, 再検査信頼性の検討として 1 回目調査の 2 週間後に同様の手続きで 2 回目の回答を求めた。なお, 確証的因子分析には SPSS Amos 25.0 (IBM, Japan), 探索的因子分析には HAD16.0 (清

水, 2016), それ以外の分析には SPSS Statistics 25.0 (IBM, Japan) をそれぞれ用いた。

#### 倫理的配慮

本研究は, 早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を得て実施された(承認番号: 2018-024)。

## 第4節 結果

### 項目分析

項目分析の結果を Table 3-1 に示す。まず, RIO 日本語版の天井効果と床効果の有無を確認するために, 平均値 $\pm$ 1 標準偏差の値が 1 以上または 5 未満を示す項目の有無を確認したところ, 全ての項目で外れ値はなかった。次に, RIO 日本語版の平均値 $\pm$ 1 標準偏差によって上位群と下位群に分けたうえで G-P 分析を行ったところ, 全ての項目で上位群は下位群よりも有意に得点が高かった。そして, I-R 相関を行ったところ, 全ての項目で有意な相関係数が示された。これらのことから, RIO 日本語版の項目は適切であると判断された。

### 構造的妥当性の検討

RIO の原版は 6 項目 1 因子構造であることが確認されているため (Wade et al., 2008), RIO 日本語版でも 1 因子構造を仮定した確証的因子分析を行った。その結果, モデルの適合度は,  $\chi^2(9) = 97.58 (p < .001)$ , CMIN = 99.26, GFI = .85, AGFI = .65, CFI = .87, TLI = .78, RMSEA = .22 であった。これらの値は Hooper et al. (2008) の基準に満たなかったことから, 最尤推定法, プロマックス回転による探索的因子分析を行った。

Table 3-1  
RIO 日本語版の記述統計量と項目分析結果

項目	<i>M</i>	<i>SD</i>	上位群 <i>M</i> ( <i>n</i> = 41)	下位群 <i>M</i> ( <i>n</i> = 37)	<i>t</i> -value	I-R相関
1. 今現在, 自分がいかに不当に扱われたかを考えずには いられない	2.34	1.10	3.54	1.08	18.90 ***	.77**
2. 今現在, 対人関係の嫌な出来事を思い出してしまうため, 私は自分の人生を思いきり楽しむことができない	2.45	1.17	3.88	1.27	15.91 ***	.79**
3. 今現在, 自分が受けた不当な扱いを考えないようにする ことは難しい	2.32	1.13	3.83	1.11	17.59 ***	.83**
4. 今現在, なぜ気分が落ち込むのか, その理由を分かろう と努めている	3.00	1.23	4.24	1.54	16.28 ***	.70**
5. 今現在, 私の気持ちを落ち込ませるあの時の出来事が, 私の頭から離れることはない	2.60	1.24	4.02	1.11	19.65 ***	.83**
6. 今現在, 私は気がつけば, 頭の中であの時の事を何度も 繰り返し思い出している	2.54	1.31	4.27	1.05	26.38 ***	.84**
合計	15.25	5.70	23.78	7.16	40.08 ***	—

Note. 上位群*M*は*M*+1*SD*以上の群, 下位群*M*は*M*-1*SD*以下の群を表す。

\*\*\**p* < .01; \*\**p* < .001

スクリープロットと平行分析の結果 (Figure 3-1), 1 因子構造が妥当であると判断された。固有値は 3.80 であり, この因子の分散説明率は 63.25%であった。また, 各項目の因子負荷量は .60~.82 であり, 高い値が示された (Figure 3-2)。これらのことから, 「RIO 日本語版は原版と同様に 6 項目 1 因子構造である」という仮説は部分的に支持された。

### RIO 日本語版の記述統計量と正規性の確認

RIO 日本語版の平均値は 15.25 であり, 標準偏差は 5.70 であった。また, RIO 日本語版が正規分布であることを確認するために, ヒストグラムを作成し (Figure 3-3), Shapiro-Wilk 検定を行った。その結果, 正規性の仮定は棄却されたため ( $p < .001$ ), 構成概念妥当性の検討では Spearman の順位相関係数を用いることとした。

### 信頼性の検討

**内的整合性** RIO 日本語版の内的整合性を検討するために, Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した。その結果,  $\alpha = .80$  であり, 十分な値を示した。

**再検査信頼性** 再検査信頼性を検討するために, 1 回目と 2 回目の調査で RIO 日本語版, RRS, RRQ の ICC を算出した。その結果, RIO 日本語版では  $ICC = .81$  (95%CI [.67, .89]) であった。また, RRS では  $ICC = .88$  (95%CI [.79, .93]), RRQ の反芻では  $ICC = .87$  (95%CI [.77, .92]), 省察では  $ICC = .87$  (95%CI [.78, .93]) であった。そして, 相関係数の差の検定を行ったところ, RIO 日本語版の ICC は RRS および RRQ の反芻と省察の ICC の間に有意な差は認められなかった (順に,  $z = -1.27, p = .20$ ;  $z = -1.02, p = .31$ ;  $z = -1.02, p = .31$ )。これらのことから, 「RIO 日本語版は特性反すうや私的自己意識よりも再検査信頼性係数が低いもの

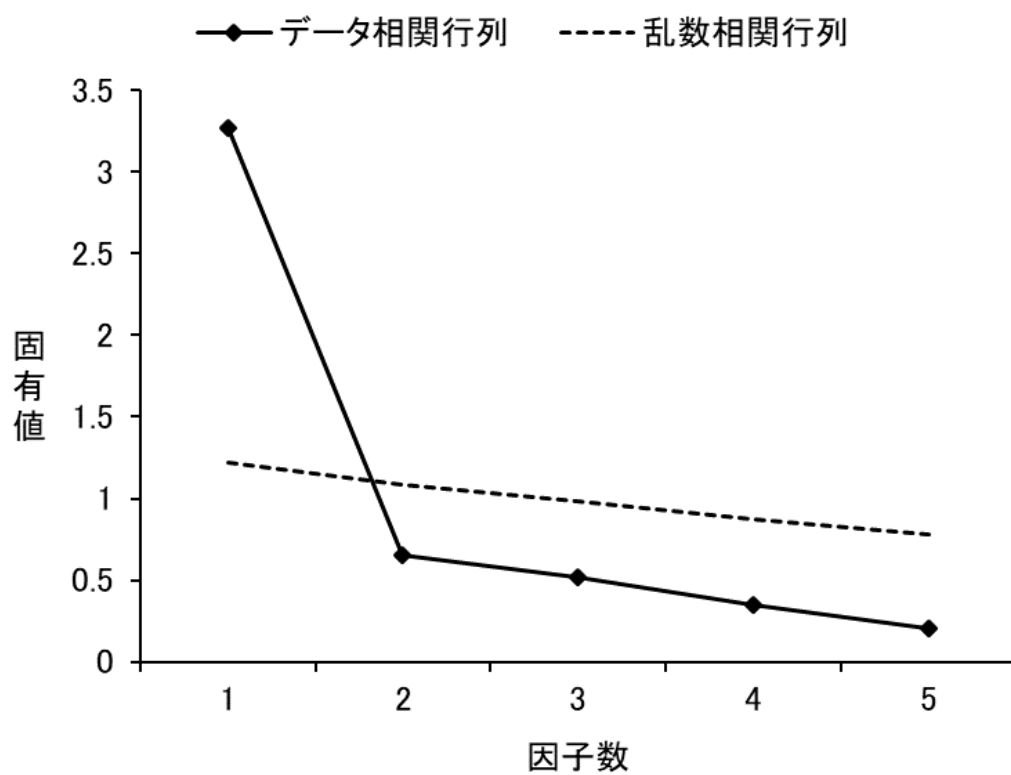
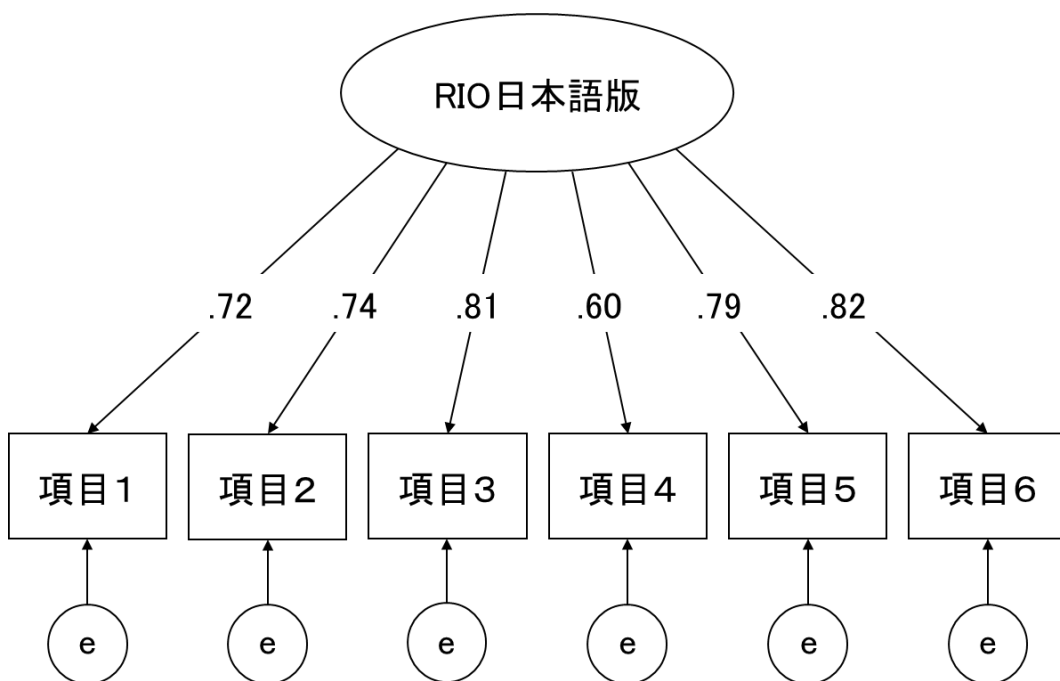


Figure 3-1. RIO 日本語版のスクリープロットと平行分析結果



$\chi^2(9) = 97.58 (p < .001)$ , CMIN = 99.26, GFI = .85,  
 AGFI = .65, CFI = .87, TLI = .78, RMSEA = .22

Figure 3-2. RIO 日本語版の各項目の因子負荷量

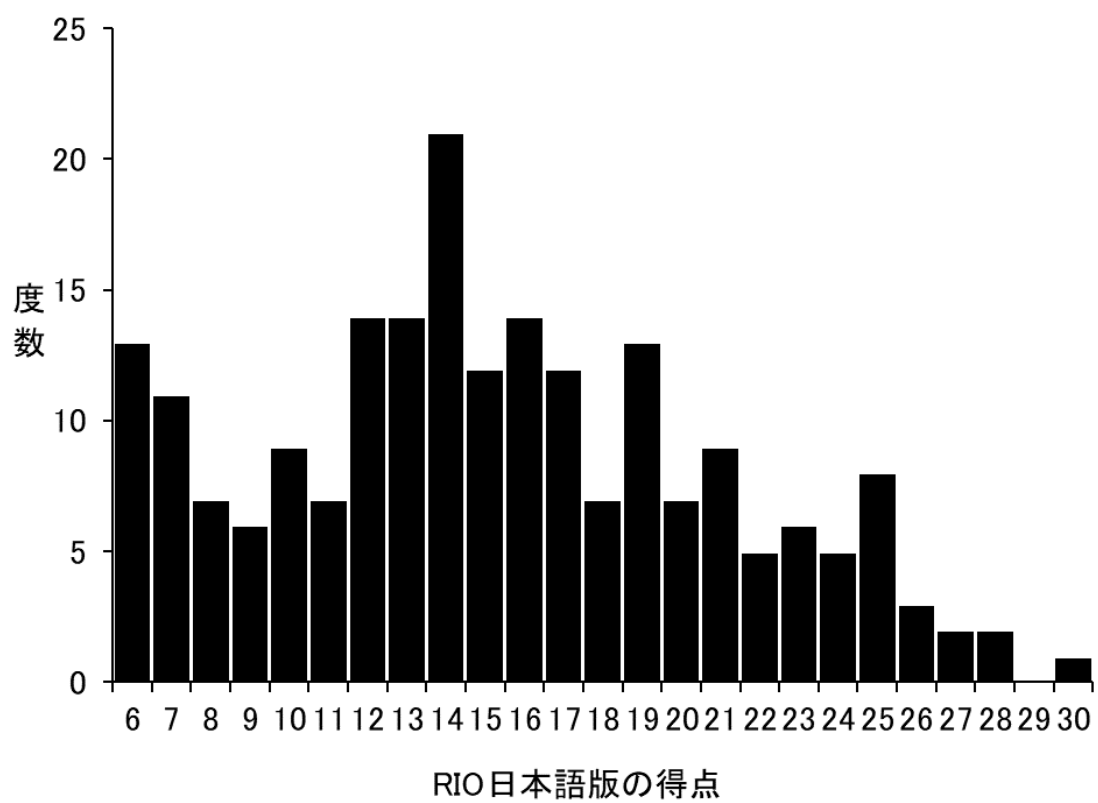


Figure 3-3. RIO 日本語版のヒストグラム



の、.60以上の値が示される」という仮説は部分的に支持された。

### 構成概念妥当性の検討

RIO日本語版の構成概念妥当性（収束的妥当性と弁別的妥当性）を検討するために、RIO日本語版と各尺度で相関分析を行った。記述統計量および本研究の仮説と各相関係数をTable 3-2に示した。その結果、ERQの抑制とPANASのポジティブ感情では仮説を支持しなかったが、それ以外の尺度（RRS、RRQの反芻・省察、ERQの再評価、CES-D、PANASのネガティブ感情）では仮説を支持する結果が示された。構成概念妥当性における仮説支持率は75%であった。

### 第5節 考察

本研究の目的は、状態反すうを測定する尺度であるRIO日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を検討することであった。本研究の結果から、RIO日本語版は原版と同じく6項目1因子構造であり、信頼性と妥当性を有することが示された。

まず、構造的妥当性の検討ではRIO日本語版は6項目1因子構造であることが確認され、仮説を部分的に支持する結果が示された。その一方で、RIOの原版では6項目1因子構造が示されているため、本研究では確証的因子分析によって因子構造を検討したが、事前に設定したモデル適合度の基準を満たさなかった。この要因として、RIOの原版（Wade et al., 2008）では健康な大学生と対人関係上の悩みで治療を受けている大学生を対象にしていたが、本研究では健康な大学生のみを対象にしたことが結果に影響した可能性がある。

また、構成概念妥当性の検討ではおおむね仮説と一致した結果が示さ

Table 3-2

記述統計量, RIO日本語版の仮説と各尺度との相関分析結果

	<i>M</i>	<i>SD</i>	RIO日本語版 との仮説	結果 ( <i>rs</i> )	95%信頼区間	仮説との対応
特性反すう(RRS)	26.67	14.39	$r > .50$	.60 **	[.50, .68]	支持
私的自己意識(RRQ)						
反芻	39.83	8.11	$r > .50$	.61 **	[.52, .69]	支持
省察	38.87	8.53	$r < -.30$	-.16 <i>n.s.</i>	[-.29, -.02]	支持
感情調節(ERQ)						
抑制	25.47	6.90	$.30 \leq r < .50$	.18 *	[.04, .30]	不支持
再評価	16.43	5.24	$r < -.30$	-.06 <i>n.s.</i>	[-.19, .07]	支持
抑うつ(CES-D)	21.00	11.30	$r > .50$	.58 **	[.48, .66]	支持
感情状態(PANAS)						
ネガティブ感情	20.31	9.19	$r > .50$	.62 **	[.52, .69]	支持
ポジティブ感情	22.30	8.20	$r > -.50$	-.04 <i>n.s.</i>	[-.17, .10]	不支持

Note. CES-D = 日本語版Center for Epidemiologic Studies Depression; ERQ = Emotion Regulation Questionnaire 日本語版; PANAS = 日本語版Positive and Negative Affect Schedule; RRS = 日本語版Ruminative Responses Scale; RRQ = Rumination-Reflection Questionnaire 日本語版

\*\* $p < .01$ ; \* $p < .05$ ; *n.s.* not significant

れた。ネガティブ思考の反復性は特性反すうと状態反すうで共通した特徴であり (Martin & Tesser, 1996), 反復的なネガティブ思考は抑うつやネガティブ感情といった不適応的結果と関連することが報告されている (Nolen-Hoeksema et al., 2008)。また, RIO 日本語版と抑うつは正の相関が示されているため (Nepon et al., 2011; Wade et al., 2008), 精神的健康の高さと関連がある私的自己意識の省察や感情調節の再評価とは関連が弱いことを想定し, 仮説を支持する結果が示された。これらのことから, RIO 日本語版は妥当性を有する尺度であるといえる。

その一方で, 本研究では妥当性に関する仮説を支持しない結果も示されたが, その要因として日本における感情調整の抑制やポジティブ感情の表出の機能の違いが考えられる。先行研究では, ネガティブ感情を抑制し, ポジティブ感情を表出しないことで他者や集団との協調が促進される可能性が指摘されている (Matsumoto, Yoo, & Nakagawa, 2008)。また, アジア文化圏の対象者の場合, 感情調節の抑制はネガティブ感情と関連がない (Butler, Lee, & Gross, 2007) ことや, 日本はアメリカよりもポジティブ感情が低いものの, ネガティブ感情には違いがない (Miyamoto & Ryff, 2011) ことが報告されている。加えて, PANAS のポジティブ感情とネガティブ感情では弱い相関しか見られないことが報告されている (Schmukle, Elgoff, & Burns, 2002)。これらのことから, 日本ではポジティブ感情の表出せず感情表出を抑制することが他者とのコミュニケーションを円滑に進めるという機能を有することで, RIO 日本語版の構成概念妥当性に関する仮説が支持されなかったと考えられる。

本研究の限界点として, 本研究の結果から RIO 日本語版は 6 項目 1 因子構造であることが確認されたが, 確証的因子分析による適合度指標は基準に満たさず, その要因として調査対象者の違いが影響したことが考

えられた。そのため、今後は高抑うつ者や臨床群なども対象としたうえで構造的妥当性を検討する必要がある。また、RIO 日本語版で測定される状態反すうでは、対象者が自身の状態反すうを意識的にモニタリングできていることが前提となる。その一方で、RIO 日本語版は 6 項目 1 因子構造と少ない項目数と 1 因子で構成されていることから、回答者の負担が少なく、回答行動が気そらしとなって得点に影響が生じる可能性も低いと考えられる。そのため、自記式尺度で状態反すうを測定する場合には RIO 日本語版は有用であるといえる。

## 第4章 反すうによる注意の範囲の差異

### ——思考内容の感情価と思考時間からの検討——（研究2）

#### 第1節 問題と目的

先行研究の問題点として、注意の範囲モデルを支持する先行研究は主に横断研究デザインで反すうとワーキングメモリの関連を検討しているため、変数間の因果関係は限定的であることが指摘された。注意の範囲モデルの内的妥当性を高めるためには、反すうを実験的に操作したうえで注意の範囲に及ぼす影響を検討する必要があるが、そうした研究はほとんど行われていない。加えて、従来の反すう操作（Nolen-Hoeksema & Morow, 1993）では思考内容の感情価だけを操作しており、思考時間は操作されていない。これまでの研究から、ネガティブ感情が注意の範囲を狭くすることは知見が一貫していないが（Rowe et al., 2007）、反すうが注意の範囲を狭くする可能性は繰り返し指摘されている（Fang et al., 2017; 2018b; Grol et al., 2015）。そのため、反すうの構成要素として思考内容の感情価と思考時間が注意の範囲を狭める要因であると考えられるが、従来の反すう操作ではこれら2つの要因の交互作用は検討されていない。

そこで研究2では、反すうによる注意の範囲の差異を検討することを目的とした。その際、思考内容の感情価と思考時間の2要因から反すうを実験的に操作したうえで、研究1で作成されたRIO日本語版を用いて操作チェックを行った。また、注意の範囲を検討するために、Attentional Breadth Task（Bosmans, Braet, Koster, & Raedt, 2009）を一部修正して用いた。この課題では、注視点からターゲットとなる刺激までの物理的な距離をもって注意の範囲を測定する課題であり、注意の範囲に関する複

数の先行研究（Bosmans et al., 2018; Dewitte & Koster, 2014; Fang et al., 2018a; Grol et al., 2015; Grol & Raedt, 2014; Van de Walle, Bijttebier, De Raedt, & Bosmans, 2017）でも用いられている。そのため、Attentional Breadth Task は注意の範囲を検討するうえで妥当な課題であると判断し、本研究では実験刺激を修正して用いることとした。そのうえで、本研究の仮説は「ネガティブな話題を長く考える操作を行うと注意の範囲は狭くなる」とした。

## 第 2 節 方法

### 実験対象者

本研究では、首都圏の私立大学に在籍する大学生と大学院生 68 名（男性 29 名，女性 39 名；平均年齢  $21.57 \pm 1.32$  歳）を分析対象とした。その際、本研究では認知課題の成績が従属変数となるため、(a)うつ病の診断の有無，(b)服薬の有無，(c)過度の眠気，(d)過度の疲労感が剰余変数として従属変数に影響する可能性が考えられた。このため、除外基準は、(1)精神科や心療内科に通院中または通院歴があること，(2)服薬中であること，(3)極度の眠気であること，(4)極度の疲労感を感じていることとした。

また、G\* Power 3.1（Faul, Erdfelder, Lang, & Buchner, 2007）を用いて事前のサンプルサイズ設計を行った。その際、先行研究（Grol et al., 2015; Fang et al., 2017; 2018b）では特性反すうと注意の範囲の関連が報告されていることと、本研究では反すうを実験的に操作することから、大きい効果量が想定された。そのため、大きい効果量（ $\eta_p^2 = .14$ ,  $\alpha = .05$ ,  $1 - \beta = .80$ ）と 20% の実験脱落率を想定し、61 名のサンプルサイズが必要であることが示された。

## 調査材料

**デモグラフィックデータ** フェイスシートに性別と年齢の記入を求めた。

**健康アンケート** (1)病気やケガの有無, (2)服薬の有無, (3)睡眠不足と疲労の有無, (4)心理療法やカウンセリングを受けているか, (5)トラウマティックな経験の有無のうち, 1つでも当てはまる項目があれば研究を中止するために使用した。

**特性反すう** 日本語版 RRS (Hasegawa, 2013) を用いた。この尺度は 22 項目 4 件法からなり, 得点が高いほど特性反すうが高いことを表す。

**抑うつ** 日本語版 CES-D (島ら, 1985) を用いた。この尺度は 20 項目 4 件法で構成されており, 得点が高いほど抑うつが高いことを表す。

**状態反すう** 研究 1 で作成した RIO 日本語版 (佐藤・国里・小関・鈴木, 2019) を用いた。この尺度は 6 項目 5 件法で構成されており, 得点が高いほど状態反すうが高いことを表す。

**感情状態** 日本語版 PANAS (佐藤・安田, 2001) を用いた。この尺度は 16 項目 6 件法からなり, ネガティブ感情とポジティブ感情の下位因子で構成される。得点が高いほどそれぞれの感情状態が高いことを表す。

## 反すうの操作

**思考内容の感情価** 反すうを実験的に操作するために, Nolen-Hoeksema & Morrow (1993) の反応課題を一部修正して用いた。ネガティブ思考群ではネガティブな話題 (例: 過去 2 週間の中で特に気分が落ち込んだ出来事, その出来事を経験することで気分が落ち込む理由など) を 1 項目 30 秒ずつ提示し, その話題について繰り返し考えるように教示した。一方, ニュートラル思考群ではニュートラルな話題 (例: モナ

リザの表情，川をゆっくりと下るボートなど）を1項目 30秒ずつ提示し，その話題について繰り返し考えるように教示した。

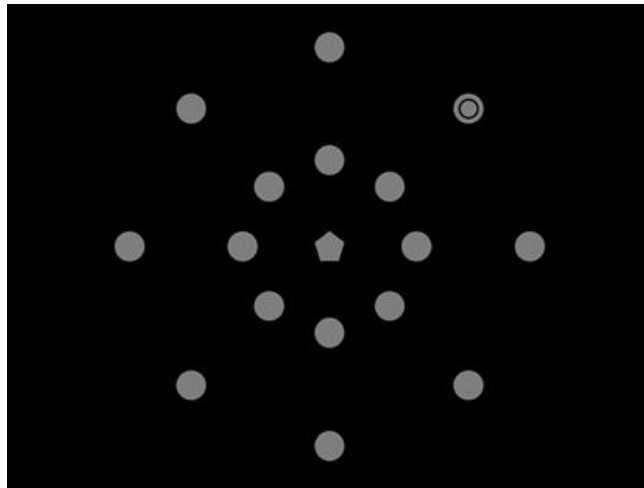
**思考時間** 反すうを行う時間として6分間と1分間の群を設定した。Nolen-Hoeksema & Morrow (1993)の反応課題では，反すう条件と気そらし条件をそれぞれ8分間実施している。一方で，本研究では予備実験の結果や実験操作による精神的疲労の影響を最小限にするために，思考時間を6分間と1分間に設定した。

### 修正版 Attentional Breadth Task

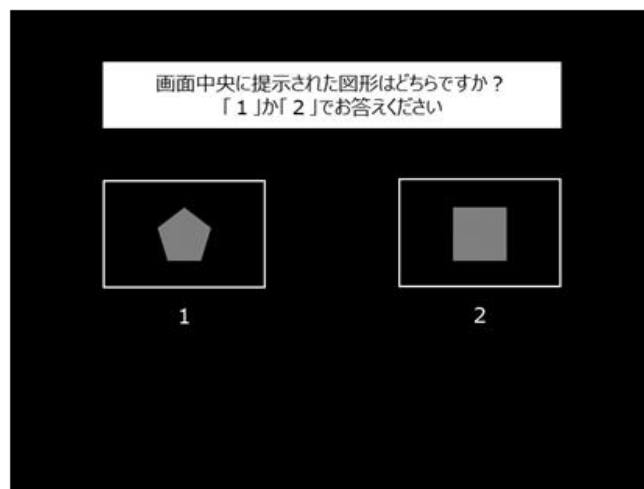
注意の範囲を検討するために，修正版 Attentional Breadth Task を用いた。原版の Attentional Breadth Task (Bosmans et al., 2009) では，実験刺激として感情価を含む表情画像が用いられている。一方で，本研究では感情価や表情によるバイアスを統制するために，実験刺激として図形刺激（正四角形と正五角形）を用いた。対象者の顔と課題提示用ディスプレイまでの距離を 27cm に設定し，対象者には画面の中央を見ながら画面上に出てくる指示に従うように教示した。なお，課題作成と刺激提示には Inquisit 5 (Millisecond, U.S.)，刺激提示用ディスプレイには EIZO FlexScan S1923，刺激出力と反応取得には DELL XPS13 をそれぞれ用いた。

修正版 Attentional Breadth Task の手続きを Figure 4-1 に示す。画面 1 では，注視点を 500ms 提示した後に画面の中央に図形刺激とその周囲に 16 個の丸を提示した。そのうち 8 個は画面中央の図形刺激から 4.5cm 離れており（以下，Close 条件とする），残りの 8 個は 11.2cm 離れていた（以下，Far 条件とする）。参加者には，画面中心の図形と印のある丸（ターゲット）を同定するように求め，練習試行 1 では 250ms，練習試行 2

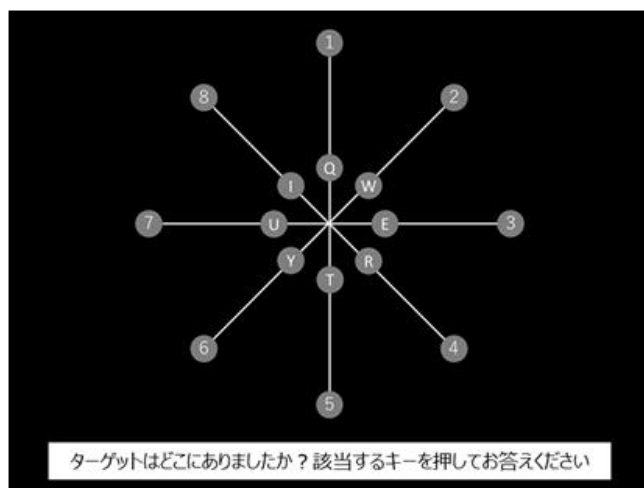




画面1 (Far条件の場合)



画面2



画面3

Figure 4-1. 修正版 Attentional Breadth Task 手続き

(Bosmans et al., 2009 を参考に作成)

と本試行では 68ms 提示した。画面 2 では、「画面中央に提示された図形はどちらですか？」という教示とともに図形刺激を提示し、2 肢強制選択形式で回答を求めた。画面 3 では、「ターゲットはどこにありましたか？」という教示とともに画面 1 で提示した 16 個の丸を提示し、パソコンのキーボードでターゲットの位置を判断させた。試行間のインターバルは 2,000ms とし、これら一連の流れを練習試行 1 と練習試行 2 で 8 試行ずつ実施した後に、本試行として 48 試行実施した。

本課題の従属変数は、画面 1 の中央の図形を正しく判断したうえでのターゲットの位置に対する正反応率である。そのため、Close 条件と Far 条件のターゲットの正反応率の差分値を  $\Delta$ Attentional Narrowing Index ( $\Delta$ ANI) とした。 $\Delta$ ANI の値が大きいほど注意の範囲が狭いことを表す。

## 実験手続き

実験協力希望者に対して研究の主旨説明を行い、承諾が得られた場合には研究参加の同意を得て実験日時を調整した。その際、研究の主旨説明とあわせて、(1)研究協力は任意であり、いつでも中止することができること、(2)回答の有無やその内容は学業成績に影響しないこと、(3)得られたデータは研究目的以外に使用しないことを説明した。各群への割り付けは 2 進法の乱数を生成させて無作為に行った。

実験の手続きを Figure 4-2 に示す。まず、フェイスシート、RRS、CES-D、RIO-T1、PANAS-T1 に回答を求めた。次に、反すうを操作した後に RIO-T2 と PANAS-T2 に回答を求めた。最後に、修正版 Attentional Breadth Task を実施した後にリラクセーションを行い、実験を終了した。分析には SPSS Statistics 25.0 (IBM, Japan) を用いた。



*Note.* CES-D = 日本語版Center for Epidemiologic Studies Depression; PANAS = 日本語版Positive and Negative Affect Schedule; RRS = 日本語版Ruminative Responses Scale; RIO = Rumination about an Interpersonal Offense Scale 日本語版

Figure 4-2. 実験手続き

## 倫理的配慮

本研究は、早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を得て実施された（承認番号：2018-119）。

## 第3節 結果

### 記述統計量と群間の等質性の検討

本研究の記述統計量を Table 4-1 に示す。また、反すう操作前の群間の等質性を検討するために、思考の感情価（ネガティブ思考，ニュートラル思考）と思考時間（6分間，1分間）を独立変数，年齢，RRS，CES-D，RIO，PANAS を従属変数とした2要因分散分析を行ったところ，群間でこれら全ての指標に違いは認められなかった（ $p_s > .12$ ; Table 4-1）。そのため，各指標で群間に違いが認められなかったことをもって，反すう操作前の群間は等質であったと判断した。

### 思考内容の感情価，思考時間，反すう操作の時期による状態反すうと感情状態の差異の検討

反すうの操作チェックをするために，思考の感情価（ネガティブ思考，ニュートラル思考），思考時間（6分間，1分間），反すう操作の時期（反すう操作前，反すう操作後）を独立変数，RIOとPANASを従属変数とした3要因分散分析を行った（Table 4-2; Figure 4-3）。第1に，RIOで2次の交互作用が有意であったため（ $F(1, 64) = 42.07, p < .001, \eta_p^2 = .40$ ），単純主効果検定を行った。その結果，ネガティブ思考を6分間と1分間考えた群において反すう操作後は反すう操作前よりもRIOが有意に高く（ $p_s < .01$ ），反すう操作後のネガティブ思考において6分間考えた群は1分間考えた群よりもRIOが有意に高かった（ $p < .01$ ）。また，ニュー

Table 4-1

## 記述統計量と群間の等質性の検討

	全対象者 ( <i>N</i> = 68)		ネガティブ思考				ニュートラル思考				<i>F</i> -value 交互作用	$\eta_p^2$	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	6分間 ( <i>n</i> = 17)		1分間 ( <i>n</i> = 17)		6分間 ( <i>n</i> = 17)		1分間 ( <i>n</i> = 17)				
			<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>			
年齢	21.57	1.32	21.65	1.22	21.35	1.00	21.47	1.28	21.82	1.74	.99	<i>n.s.</i>	.02
特性反すう(RRS)	30.40	8.98	30.71	8.89	29.00	9.37	32.82	8.10	29.06	9.76	.22	<i>n.s.</i>	.00
抑うつ(CES-D)	15.40	7.61	14.71	7.17	14.94	8.11	16.12	7.06	15.82	8.59	.02	<i>n.s.</i>	.00
状態反すう(RIO)-T1	11.66	3.67	11.12	2.98	12.06	4.13	12.59	4.14	10.88	3.37	2.19	<i>n.s.</i>	.03
感情状態(PANAS)-T1													
ネガティブ感情	17.16	4.24	16.18	3.66	17.94	4.64	18.00	5.15	16.53	3.34	2.45	<i>n.s.</i>	.04
ポジティブ感情	27.79	6.45	27.94	5.88	27.82	7.17	27.24	6.24	28.18	6.98	.11	<i>n.s.</i>	.00

Note. CES-D = 日本語版Center for Epidemiologic Studies Depression; PANAS = 日本語版Positive and Negative Affect Schedule; RIO = Rumination About an Interpersonal Offense Scale 日本語版; RRS = 日本語版Ruminative Responses Scale

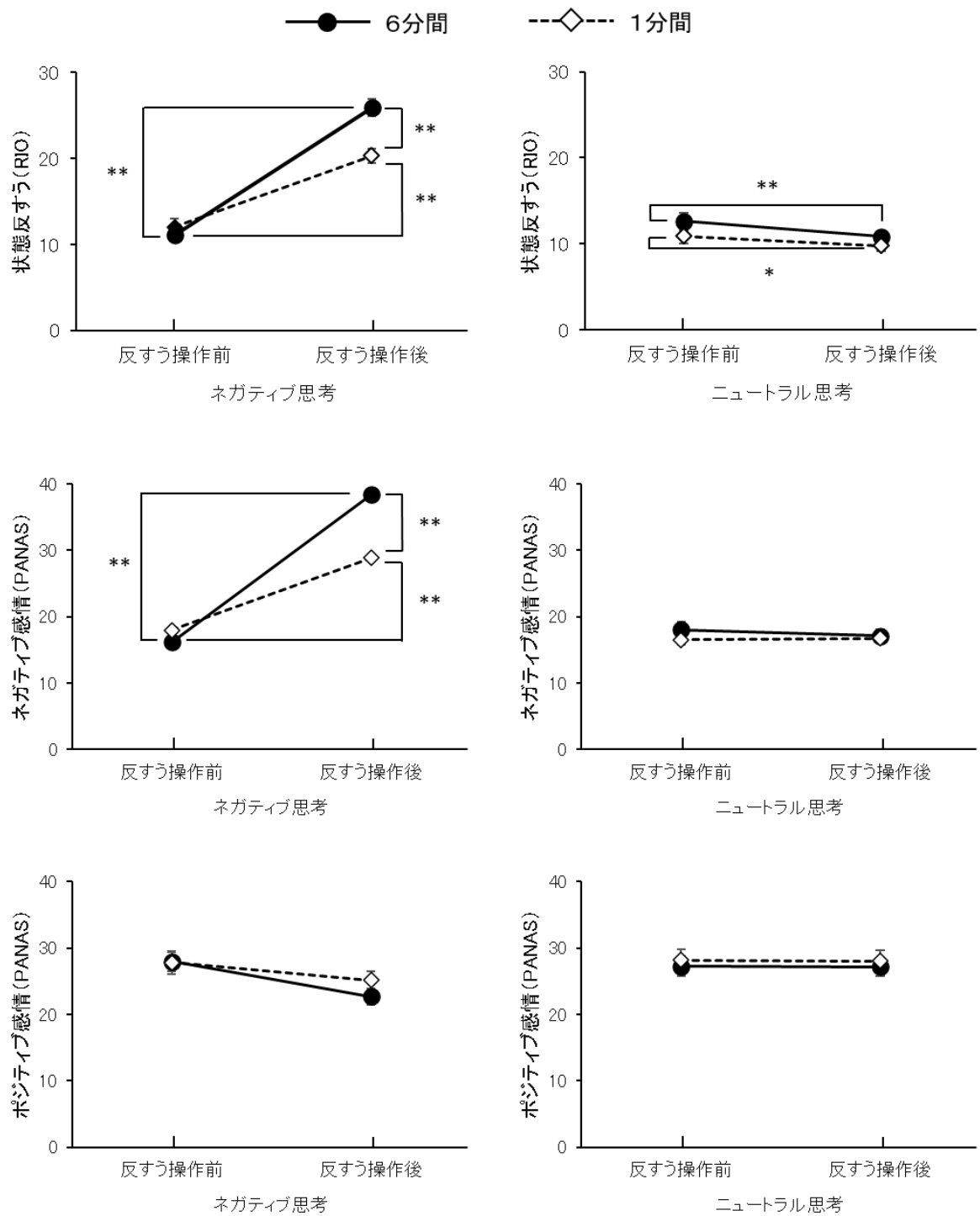
*n.s.* not significant

Table 4-2

思考内容の感情価, 思考時間, 反すう操作の時期による状態反すうと感情状態の差異

	ネガティブ思考				ニュートラル思考			
	反すう操作前		反すう操作後		反すう操作前		反すう操作後	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
状態反すう(RIO)								
6分間	11.12	2.98	25.88	1.58	12.59	4.14	10.82	2.77
1分間	12.06	4.13	20.29	3.64	10.88	3.37	9.76	2.77
感情状態(PANAS)								
ネガティブ感情								
6分間	16.18	3.66	38.41	2.53	18.00	5.15	17.06	4.26
1分間	17.94	4.64	28.82	5.51	16.53	3.34	16.71	2.95
ポジティブ感情								
6分間	27.94	5.88	22.71	5.06	27.24	6.24	27.18	5.59
1分間	27.82	7.17	25.18	5.34	28.18	6.98	28.12	6.37

Note . PANAS = 日本語版Positive and Negative Affect Schedule; RIO = Rumination About an Interpersonal Offense Scale 日本語版



**Note.** PANAS = 日本語版Positive and Negative Affect Schedule; RIO = Rumination about an Interpersonal Offense Scale日本語版, エラーバーは標準誤差を表す.  
 \*\*  $p < .01$ ; \*  $p < .05$

Figure 4-3. 反すうの操作チェック結果

トラル思考を6分間と1分間考えた群において反すう操作前は反すう操作後よりもRIOが有意に高かった ( $ps < .05$ )。

第2に、PANASのネガティブ感情で2次の交互作用が有意であったため ( $F(1, 64) = 51.95, p < .001, \eta_p^2 = .45$ )、単純主効果検定を行った。その結果、RIOを同様に、ネガティブ思考を6分間と1分間考えた群において反すう操作後は反すう操作前よりもPANASのネガティブ感情が有意に高く ( $ps < .01$ )、反すう操作後のネガティブ思考において6分間考えた群は1分間考えた群よりもPANASのネガティブ感情が有意に高かった ( $p < .01$ )。

第3に、PANASのポジティブ感情で2次の交互作用は有意でなかったため ( $F(1, 64) = 1.90, p = .17, \eta_p^2 = .03$ )、限定的ながら1次の交互作用を検討した。その結果、思考の感情価と反すう操作の時期の交互作用が有意であったため ( $F(1, 64) = 17.10, p < .01, \eta_p^2 = .21$ )、単純主効果検定を行ったところ、ネガティブ思考を考えた群で反すう操作前は反すう操作後よりもPANASのポジティブ感情が有意に低かった ( $ps < .01$ )。これらのことから、ネガティブな話題を長く考える操作を行うと、ネガティブな話題を短く考える操作やニュートラルな話題を考える操作を行うよりも、状態反すうやネガティブ感情が悪化することが示され、反すう操作の妥当性が確認された。

#### 注意の範囲条件の妥当性の確認

修正版 Attentional Breadth Task の全試行のうち、3%が画面中央の図形刺激を正しく判断できなかった。そのため、先行研究 (Bosmans et al., 2009) と同様に、これらのデータは「画面1の中央の図形刺激を正しく見ていなかったため、画像刺激からターゲットまでの距離の測定結果は



妥当性が低い」と判断し、分析から除外した。そのうえで、本課題で設定した注意の範囲条件（Close, Far）の妥当性を確認するために、思考の感情価（ネガティブ思考, ニュートラル思考）、思考時間（6分間, 1分間）、注意の範囲（Close, Far）を独立変数、ターゲットの正再生率を従属変数とした3要因分散分析を行った（Table 4-3; Figure 4-4）。その結果、注意の範囲の主効果のみが有意であり（ $F(1, 64) = 2094.31, p < .01, \eta_p^2 = .97$ ）、Close条件はFar条件よりもターゲットの正再生率が有意に高かった（ $p < .01$ ）。このことから、修正版 Attentional Breadth Taskでの注意の範囲の条件設定は妥当であったことが確認された。

#### 反すうによる注意の範囲の差異の検討

反すうによる注意の範囲の差異を検討するために、思考の感情価（ネガティブ思考, ニュートラル思考）と思考時間（6分間, 1分間）を独立変数、修正版 Attentional Breadth Taskで算出された $\Delta ANI$ を従属変数とした2要因分散分析を行った（Table 4-3; Figure 4-5）。その結果、交互作用が有意であったため（ $F(1, 64) = 6.40, p < .01, \eta_p^2 = .09$ ）、単純主効果検定を行ったところ、6分間考えた群でネガティブ思考はニュートラル思考よりも $\Delta ANI$ が有意に高く（ $p < .01$ ）、ネガティブ思考を6分間考えた群は1分間考えた群よりも $\Delta ANI$ が有意に高かった（ $p < .01$ ）。このことから、ネガティブな話題を6分間考えた群では注意の範囲が狭くなることが示された。

#### 第4節 考察

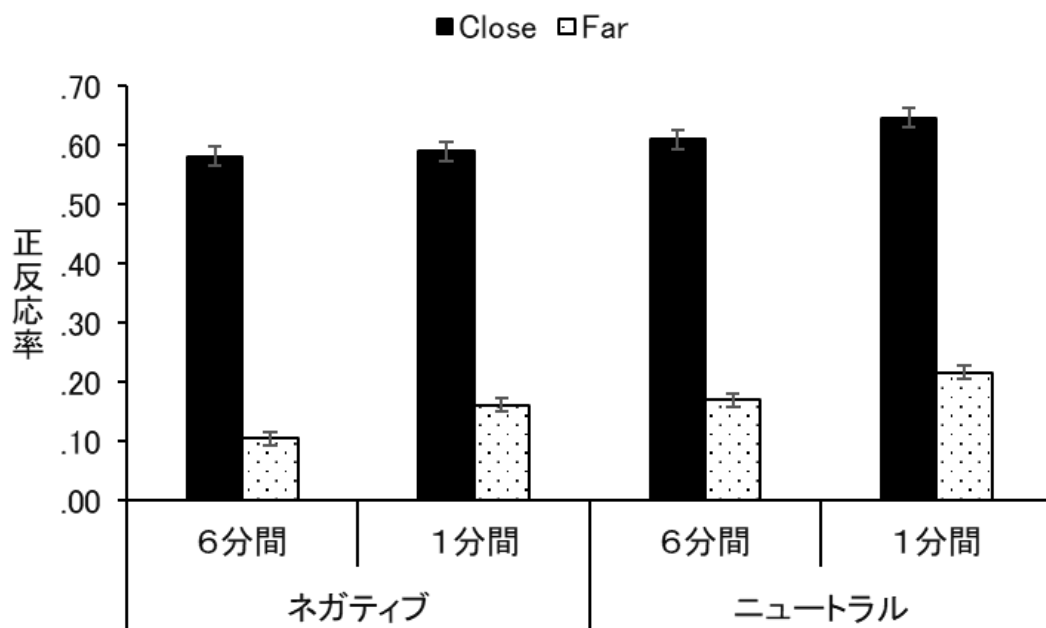
本研究の目的は、反すうの構成要素である思考内容の感情価と思考時間を実験的に操作したうえで、反すうによる注意の範囲の差異を検討す

Table 4-3

修正版Attentional Breadth Taskの記述統計量および  
思考内容の感情価と思考時間による注意の範囲の差異

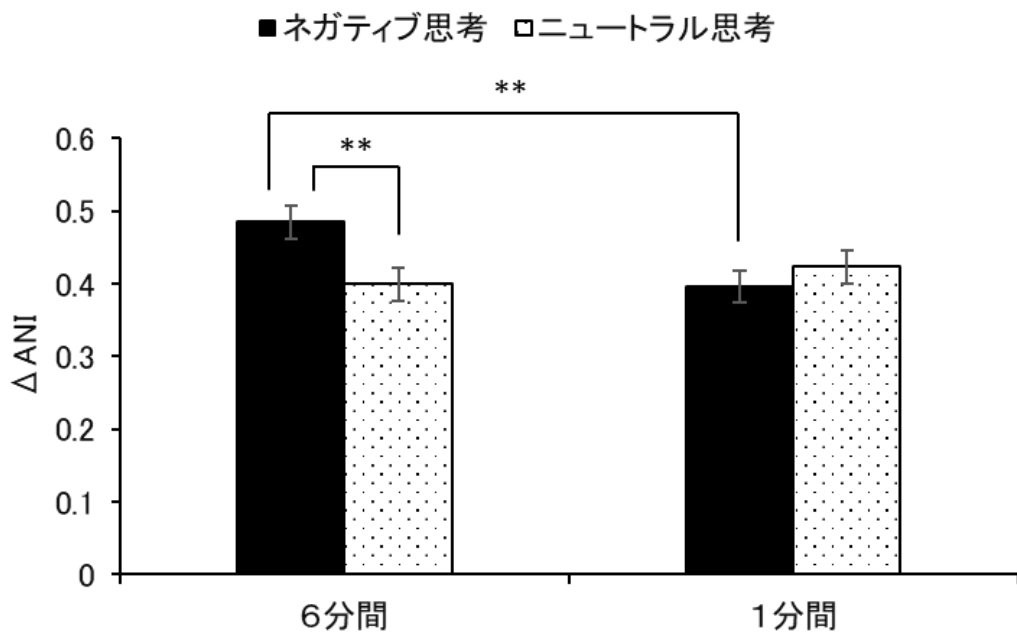
	ネガティブ思考				ニュートラル思考			
	6分間		1分間		6分間		1分間	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
Close	.58	.06	.59	.07	.61	.06	.65	.07
Far	.11	.03	.16	.04	.17	.06	.22	.05
$\Delta$ ANI	.48	.08	.40	.08	.40	.09	.42	.11

*Note.*  $\Delta$ ANI = Close条件の正反応率－Far条件の正反応率(値が大きいほど注意の範囲が狭いことを表す)



Note.  $\Delta ANI = \text{Close条件の正反応率} - \text{Far条件の正反応率}$  (値が大きいほど注意の範囲が狭いことを表す). エラーバーは標準誤差を表す.

Figure 4-4. 思考内容の感情価，思考時間，反すう操作の時期によるターゲットの正再生率の差異



Note.  $\Delta ANI$  = Close条件の正反応率 - Far条件の正反応率 (値が大きいほど注意の範囲が狭いことを表す). エラーバーは標準誤差を表す.  
 \*\*  $p < .01$

Figure 4-5. 思考内容の感情価と思考時間による注意の範囲の差異

ることであった。本研究の結果から、ネガティブな話題を長く考える操作を行うと、ネガティブな話題を短く考える操作やニュートラルな話題を考える操作を行うよりも、状態反すうとネガティブ感情が悪化することが示されたことから、本研究の反すう操作は妥当であったことが確認された。また、ネガティブな話題を長く考える操作を行うと注意の範囲が狭くなることが示され、「ネガティブな話題を長く考える操作を行うと注意の範囲は狭くなる」という仮説は支持された。

第1に、ネガティブな話題を長く考える操作を行うと、ネガティブな話題を短く考える操作やニュートラルな話題を考える操作を行うよりも、状態反すうやネガティブ感情は悪化することが示され、反すう操作の妥当性が確認された。Nolen-Hoeksema & Morrow (1993) の反すう操作の手続きは多くの先行研究で用いられているものの、この手続きでは思考内容の感情価しか操作されておらず、思考時間は操作されていない。これまでの研究では、反すうはネガティブな思考だけでなく、思考の持続性も構成要素であることが指摘されている (Olatunji et al., 2013; Smith & Alloy, 2009)。これは、反すうがネガティブな思考というよりも抑うつとネガティブな認知的処理のプロセスを表すという指摘 (Gotlib, & Joormann, 2010; Teasdale, 1985) からも推察される。その一方で、反すう操作によるポジティブ感情の悪化は十分に示されなかった。Schmukle et al. (2002) は、PANAS のポジティブ感情とネガティブ感情は弱い相関しか見られないことを報告している。そのため、ネガティブ感情とポジティブ感情は独立した概念であり、ネガティブな思考内容とその持続性はネガティブ感情にのみ悪影響を及ぼすことが示唆される。

第2に、ネガティブ思考を長く考える操作を行うと注意の範囲が狭くなることが示された。注意の範囲モデルを支持するこれまでの知見は、

反すうを特性ととらえた横断研究に基づく知見であったため (Fang et al., 2017; 2018b; Grol, et al., 2015), 反すうと注意の範囲の因果関係は限定的であった。また, 注意の範囲モデルの理論的根拠とされる気分の拡張—形成理論では, ポジティブ感情が注意の範囲を拡張することは繰り返し報告されているものの, ネガティブ感情が注意の範囲を狭くするという知見は一貫していない (Rowe et al., 2007)。そのため, ネガティブ感情やネガティブな思考内容に関する操作だけでは注意の範囲を狭くする条件として不十分である可能性がある。これらのことから, 反すうの構成要素として思考内容の感情価と思考時間が注意の範囲を狭くする要因であると考えられる。

また, 本研究の結果から, 注意の範囲は反すうの個人差というよりも, 反すうの認知的情報処理を説明する概念の可能性もある。注意の範囲モデルでは, 注意の範囲はネガティブ感情に対する反すう傾向の高さを特徴づける個人差として説明されている (Whitmer & Gotlib, 2013)。その一方で, 本研究では反すうを実験的に操作することで注意の範囲が狭くなることを示した。これは, 気分の拡張—形成理論に基づく研究では, 気分誘導や ERP の振幅から注意の範囲の拡張や狭小を示した知見が多い (Vanlessen, De Raedt, Koster, & Pourtois, 2016) ことから示唆される。これらのことから, 本研究では, 反すうが注意の範囲が反すうに及ぼす影響について内的妥当性の高い知見を提供した点で意義があると考えられる。

## 第 5 章 ネガティブ気分下の注意の範囲が反すうに及ぼす影響

### ( 研究 3 )

#### 第 1 節 問題と目的

先行研究の問題点として、反すうと注意の範囲が抑うつを維持・悪化させるプロセスは明らかにされていないことが指摘された。注意の範囲モデルでは、反すうによって注意の範囲が狭くなることで情報の取り込みが制限されることを想定する。また、抑うつの処理活性化説では、抑うつとネガティブな認知的情報処理の相互影響性を仮定している。そのため、ネガティブ気分下で注意の範囲が狭くなると情報の取り入れが制限されることで反すうが持続すると考えられるが、この点については検討されていない。そこで本研究では、ネガティブ気分下の注意の範囲が反すうに及ぼす影響を検討することを目的とした。本研究の仮説は「ネガティブ気分誘導後に注意の範囲を狭める操作を行うと反すうは悪化する」とした。

#### 第 2 節 方法

##### 実験対象者

本研究では、首都圏の私立大学に在籍する大学生と大学院生 42 名（男性 23 名，女性 19 名；平均年齢  $21.38 \pm 1.13$  歳）を分析対象とした。本研究の除外基準は、研究 2 と同じ理由から、(1)精神科や心療内科に通院中または通院歴があること、(2)服薬中であること、(3)極度の眠気であること、(4)極度の疲労感を感じていることとした。

また、G\* Power 3.1 (Faul et al., 2007) を用いて事前のサンプルサイズ設計を行った。その際、先行研究では注意の範囲の狭さが反すうの悪

化に及ぼす影響は検討されていないものの、注意の範囲モデルや抑うつ  
的処理活性仮説から、反すうと注意の範囲の相互影響性が成立すること  
が想定された。そのため、本研究では中程度から小さい効果量 ( $\eta_p^2$   
= .04,  $\alpha = .05$ ,  $1-\beta = .80$ ) と 20%の実験脱落率を想定し、50名のサン  
プルサイズが必要であることが示された。本研究の対象者数はこのサン  
プルサイズに到達しなかったが、実験から脱落した者は0名であった。事  
前のサンプルサイズ設計で20%の実験脱落率を含まない場合には42名  
のサンプルサイズが必要であることが示されたため、本研究の検定力は  
十分であったと考えられる。

## 調査材料

**デモグラフィックデータ** 性別と年齢の記入を求めた。

**健康アンケート** (1)病気やケガの有無, (2)服薬の有無, (3)睡眠不足  
と疲労の有無, (4)心理療法やカウンセリングを受けているか, (5)トラ  
ウマティックな経験の有無のうち、1つでも当てはまる項目があれば研  
究を中止するために使用した。

**特性反すう** 日本語版 RRS (Hasegawa, 2013) を用いた。この尺度は  
22項目4件法からなり、得点が高いほど特性反すうが高いことを表す。

**抑うつ** 日本語版 CES-D (島ら, 1985) を用いた。この尺度は20項  
目4件法からなり、得点が高いほど抑うつが高いことを表す。

**状態反すう** 研究1で作成した RIO 日本語版 (佐藤ら, 2019) を用  
いた。この尺度は6項目5件法からなり、得点が高いほど状態反すうが  
高いことを表す。

**感情状態** 日本語版 PANAS (佐藤・安田, 2001) を用いた。この尺  
度は16項目6件法からなり、下位尺度としてポジティブ感情とネガテ



イブ感情から構成される。この尺度は得点が高いほど各感情状態が高いことを表す。

### ネガティブ気分誘導

Jallais & Gilet (2010) を参考に、F. F. Chopin の Prelude in E minor Op.28 No.4 (A. Dvarionaite 演奏；2分44秒) と、J. S. Bach の Partita No. 2 in C Minor, BWV 826: IV. Sarabande (V. Ólafsson 演奏；4分45秒) を用いて、対象者にはこれらの音楽に意識を向けて聴くように求めた。なお、カウンターバランスを取るために曲の順番はランダムに提示した。

### 修正版 Attentional Breadth Task

注意の範囲を検討するために、研究2と同様に、修正版 Attentional Breadth Task を行った。その際、課題作成と刺激提示には Inquisit 5 (Millisecond, U.S.)、刺激提示用ディスプレイには EIZO FlexScan S1923、刺激出力と反応取得には DELL XPS13 をそれぞれ用いた。

### ネガティブ気分誘導後の注意の範囲の測定と操作

**ネガティブ気分誘導後の注意の範囲の測定** ネガティブ気分誘導後の注意の範囲を測定するために、研究2と同様に Close 条件と Far 条件で 50:50 の比率でターゲットを配置した。

**注意の範囲の操作** Fang et al. (2018a) を参考に、修正版 Attentional Breadth Task の画面1において、実験群（注意の範囲を狭める群）では Close 条件と Far 条件で 80:20 の比率でターゲットを配置した。一方、統制群（注意の範囲を操作しない群）ではネガティブ気分誘導後の注意の

範囲の測定と同様に，Close 条件と Far 条件で 50:50 の比率でターゲットを配置した。Fang et al. (2018a) は，注意の範囲の操作を行う際の刺激提示の比率や試行回数は研究間で一貫していないことを指摘している。そのうえで，課題に対する退屈感を軽減し，実験参加の集中度を維持させるために，ターゲットの位置を Close 条件と Far 条件で 80:20 の比率に設定し，ランダムに変動させることで注意の範囲が操作されている (Fang et al., 2018a)。また，認知バイアス修正法で用いられるドットプローブ課題 (Buodo, Patron, Messerotti Benvenuti, & Palomba, 2018; Ma, Kruijt, Nöjd, Zetterlund, Andersson, & Carlbring, 2019; Yang, Cui, Li, Xiao, Zhang, & Oei, 2017) やプローブ検出課題 (Amir, Weber, Beard, Bomyea, & Taylor, 2008) でも 80:20 の刺激提示比率で認知バイアス修正法の効果を検討している。加えて，Suway & Fox (2012) は，刺激提示比率を 80:20 などに变化させることで認知バイアス修正法の効果が高まる可能性を指摘している。これらのことから，80:20 の刺激提示比率で注意の範囲を操作することは一定の妥当性を有すると判断し，本研究でもこの比率を採用することとした。

## 実験手続き

実験協力希望者に対して研究の主旨説明を行い，承諾が得られた場合には研究参加の同意を得て実験日時を調整した。その際，研究の主旨説明とあわせて，(a)研究協力は任意であり，いつでも中止することができること，(b)回答の有無やその内容は学業成績に影響しないこと，(c)得られたデータは研究目的以外に使用しないことを説明した。各群への割り付けは 2 進法の乱数を生成させて無作為に行った。

実験の手続きを Figure 5-1 に示す。第 1 に，フェイスシートと健康ア



*Note.* CES-D = 日本語版Center for Epidemiologic Studies Depression;  
 PANAS = 日本語版Positive and Negative Affect Schedule; RRS = 日  
 本語版Ruminative Responses Scale; RIO = Ruminant about an  
 Interpersonal Offense Scale 日本語版

Figure 5-1. 実験手続き

ンケートに記入を求め、参加者が実験に参加できる状態であることを確認した。第2に、RRS、CES-D、RIO-T1、PANAS-T1に回答を求めた後に、ネガティブ気分誘導を実施した。第3に、修正版 Attentional Breadth Task-T1（ネガティブ気分誘導後の注意の範囲の測定）を実施した後に、RIO-T2とPANAS-T2に回答を求めた。第4に、修正版 Attentional Breadth Task-T2（注意の範囲の操作）を実施し、RIO-T3とPANAS-T3に回答を求めた。最後にリラクセーションを行い、実験を終了した。実験の所要時間は約70分であった。

### 倫理的配慮

本研究は、早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を得て実施された（承認番号：2019-022）。

## 第3節 結果

### 記述統計量と群間の等質性の検討

本研究の記述統計量を Table 5-1 に示す。まず、ネガティブ気分誘導前の群間の等質性を検討するために、注意の範囲（実験群、統制群）を独立変数、RRS、CES-D、RIO、PANAS を従属変数とした対応のない  $t$  検定を行ったところ、群間に違いは認められなかった ( $ps > .34$ ; Table 5-1)。そのため、各指標で群間に違いが認められなかったことをもって群間は等質であったと判断した。

### ネガティブ気分誘導後の注意の範囲の操作チェック

修正版 Attentional Breadth Task の全施行のうち、ネガティブ気分誘導後の注意の範囲の測定では5%、注意の範囲の操作後では6%が画面中

Table 5-1

## 記述統計量と群間の等質性の検討

	全体 (N = 42)		実験群 (n = 21)		統制群 (n = 21)		t-value	d
	M	SD	M	SD	M	SD		
年齢	21.38	1.13	21.33	1.20	21.43	1.08	.27 <i>n.s.</i>	.08
特性反すう (RRS)	29.14	8.88	28.86	8.06	29.43	9.83	.21 <i>n.s.</i>	.06
考え込み	7.55	2.96	7.62	3.12	7.48	2.87	.15 <i>n.s.</i>	.05
反省的熟考	5.50	2.38	5.14	2.26	5.86	2.50	.97 <i>n.s.</i>	.30
抑うつ (CES-D)	14.76	6.43	14.90	6.28	14.62	6.73	.14 <i>n.s.</i>	.04
状態反すう (RIO) -T1	11.48	4.06	11.43	4.26	11.52	3.94	.08 <i>n.s.</i>	.02
感情状態 (PANAS) -T1								
ネガティブ感情	15.71	4.64	15.19	5.08	16.24	4.23	.73 <i>n.s.</i>	.23
ポジティブ感情	24.86	4.21	25.05	4.04	24.67	4.46	.29 <i>n.s.</i>	.09

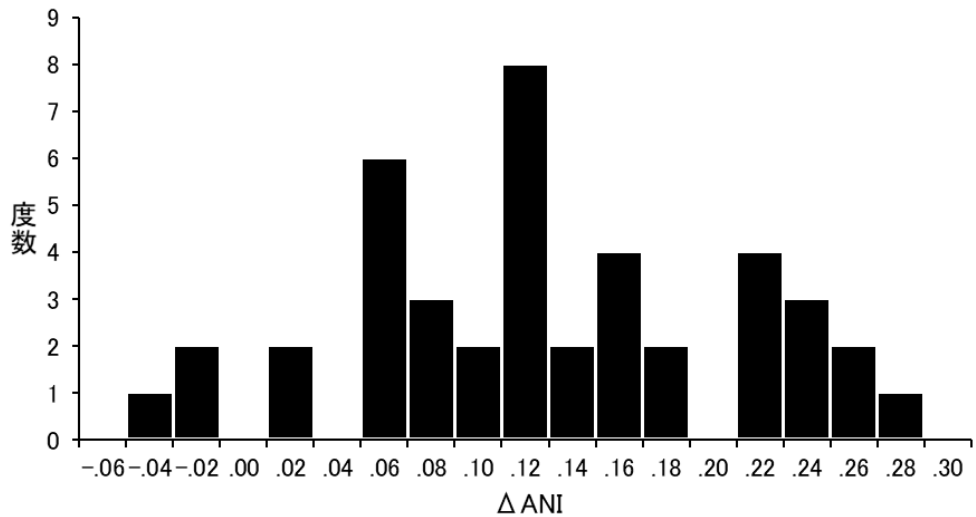
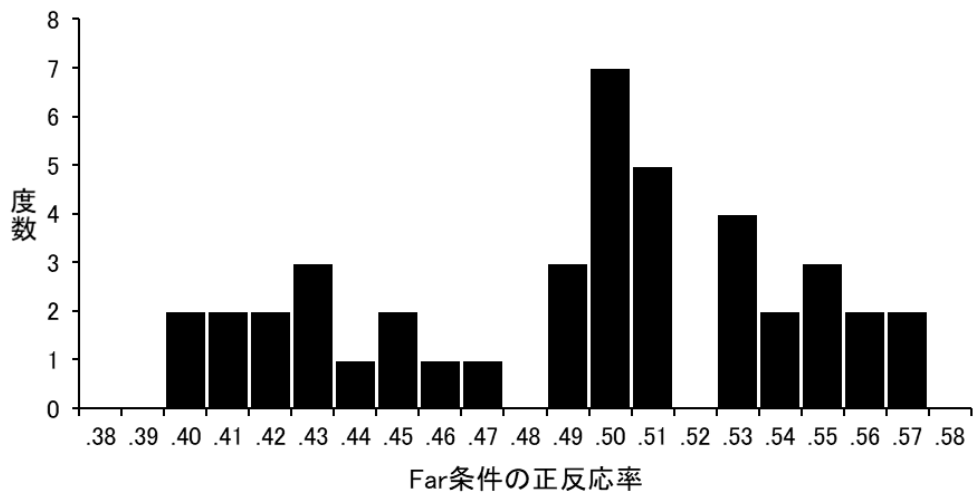
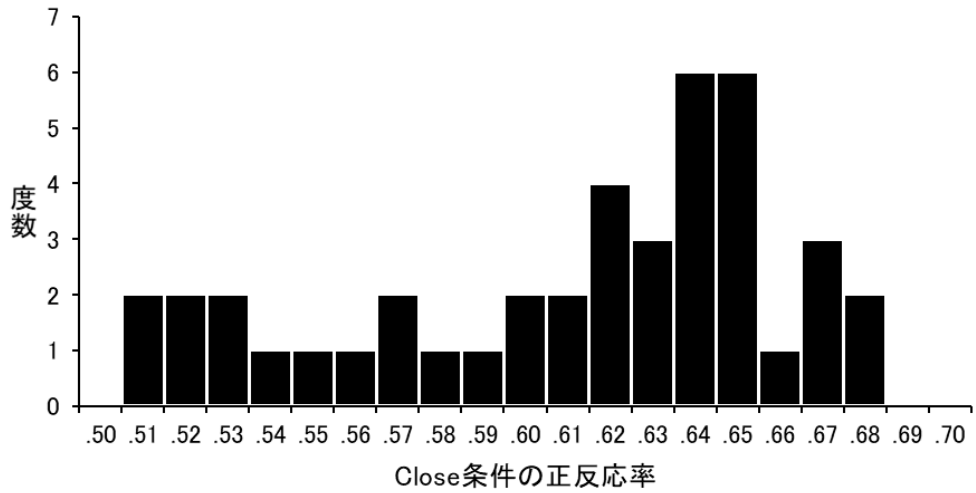
Note. CES-D = 日本語版Center for Epidemiologic Studies Depression; PANAS = 日本語版Positive and Negative Affect Schedule; RRS = 日本語版Ruminative Responses Scale; RIO = Ruminatioan about an Interpersonal Offense Scale 日本語版

央の図形刺激を正しく判断できなかった。そのため、先行研究

(Bosmans et al., 2009) や研究 2 と同様に、これらのデータは「画面 1 の中央の図形刺激を正しく見ていなかったため、画像刺激からターゲットまでの距離の測定結果は妥当性が低い」とものと判断し、分析から除外した。全実験対象者のネガティブ気分誘導後の修正版 Attentional Breadth Task のヒストグラムを Figure 5-2 に示す。そして、注意の範囲の操作チェックをするために、群（実験群，統制群）と注意の範囲の操作時期（ネガティブ気分誘導後，注意の範囲の操作後）を独立変数， $\Delta ANI$  を従属変数とした 2 要因分散分析を行った (Table 5-2; Figure 5-3)。その結果，交互作用が有意であったため ( $F(1, 40) = 8.74, p < .01, \eta_p^2 = .18$ )，単純主効果検定を行ったところ，実験群において注意の範囲の操作後は操作前よりも  $\Delta ANI$  が有意に高く ( $p < .01$ )，注意の範囲の操作後において実験群は統制群よりも  $\Delta ANI$  が有意に高かった ( $p < .01$ )。これらのことから，ネガティブ気分誘導後の注意の範囲の操作は妥当であったことが確認された。

#### ネガティブ気分下での注意の範囲による反すうと感情状態の差異

ネガティブ気分下での注意の範囲による反すうと感情状態の差異を検討するために，第 1 に，群（実験群，統制群）と注意の範囲の操作時期（ネガティブ気分誘導前，ネガティブ気分誘導後，注意の範囲の操作後）を独立変数，RIO を従属変数とした 2 要因分散分析を行った (Table 5-3; Figure 5-4)。その結果，交互作用が有意であったため ( $F(2, 80) = 10.51, p < .01, \eta_p^2 = .21$ )，単純主効果検定を行ったところ，実験群においてネガティブ気分誘導後と注意の範囲の操作後はネガティブ気分誘導前よりも RIO が有意に高かった ( $ps < .01$ )。また，統制群



Note.  $\Delta ANI = \text{Close条件の正反応率} - \text{Far条件の正反応率}$   
 (値が大きいほど注意の範囲が狭いことを表す).

Figure 5-2. 全実験対象者のネガティブ気分誘導後の

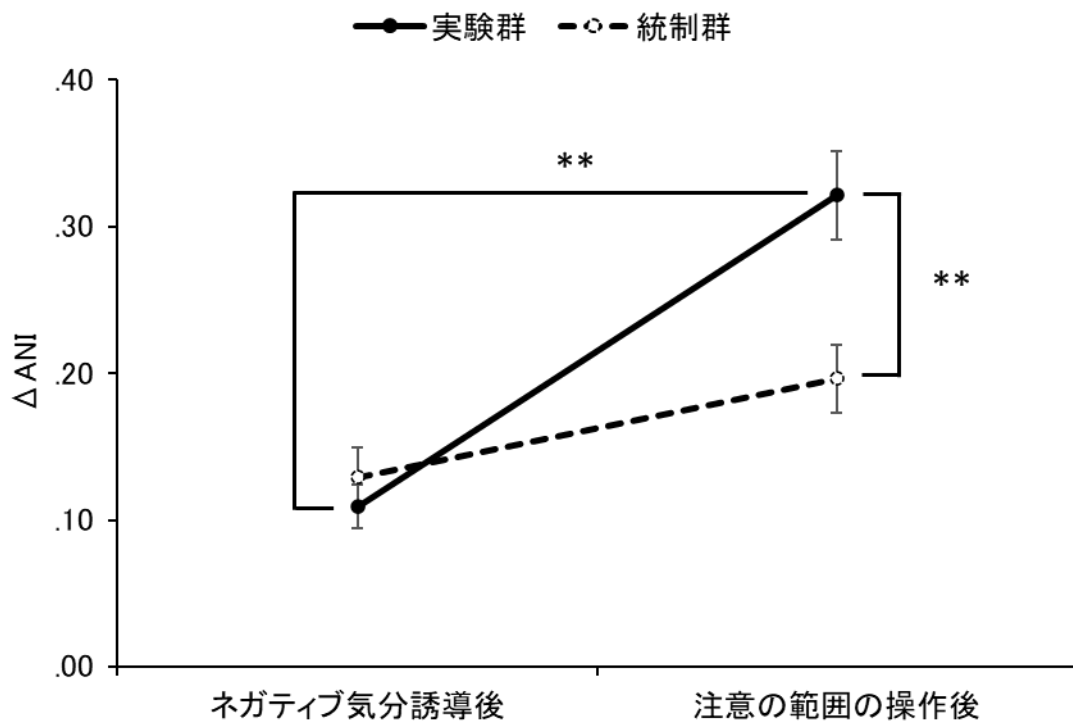
修正版 Attentional Breadth Task のヒストグラム

Table 5-2  
修正版Attentional Breadth Taskの記述統計量(ターゲットの正答率)

	実験群						統制群					
	Close条件		Far条件		ΔANI		Close条件		Far条件		ΔANI	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
ネガティブ気分誘導後	.61	.05	.50	.04	.11	.07	.61	.05	.48	.06	.13	.09
注意の範囲の操作後	.54	.11	.22	.05	.32	.14	.59	.06	.39	.08	.20	.11

Note. ΔANI = Close条件の正反応率 - Far条件の正反応率(値が大きいほど注意の範囲が狭いことを表す)





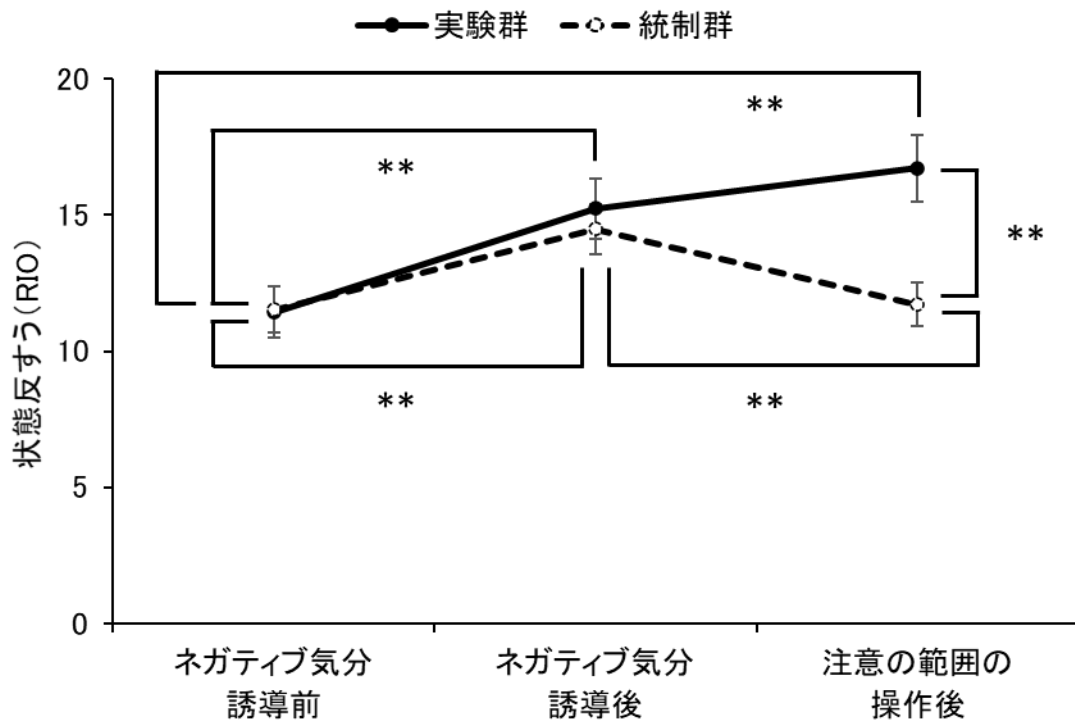
Note.  $\Delta ANI = \text{Close条件の正反応率} - \text{Far条件の正反応率}$   
 (値が大きいほど注意の範囲が狭いことを表す).  
 エラーバーは標準誤差を表す.  
 \*\* $p < .01$

Figure 5-3. 注意の範囲の操作チェック結果

Table 5-3  
 注意の範囲とその操作時期による状態反すうと感情状態の差異

	実験群						統制群					
	ネガティブ気分 誘導前		ネガティブ気分 誘導後		注意の範囲の 操作後		ネガティブ気分 誘導前		ネガティブ気分 誘導後		注意の範囲の 操作後	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
状態反すう(RIO)	11.43	4.26	15.24	5.05	16.71	5.56	11.52	3.94	14.48	4.25	11.71	3.72
感情状態(PANAS)												
ネガティブ感情	15.19	5.08	22.62	4.86	21.62	5.08	16.24	4.23	22.33	4.05	16.86	2.92
ポジティブ感情	25.05	4.04	23.05	3.73	20.90	3.79	24.67	4.46	22.38	3.88	23.48	3.76

Note. PANAS = 日本語版Positive and Negative Affect Schedule; RRS = 日本語版Ruminative Responses Scale; RIO = Ruminatation about an Interpersonal Offense Scale 日本語版



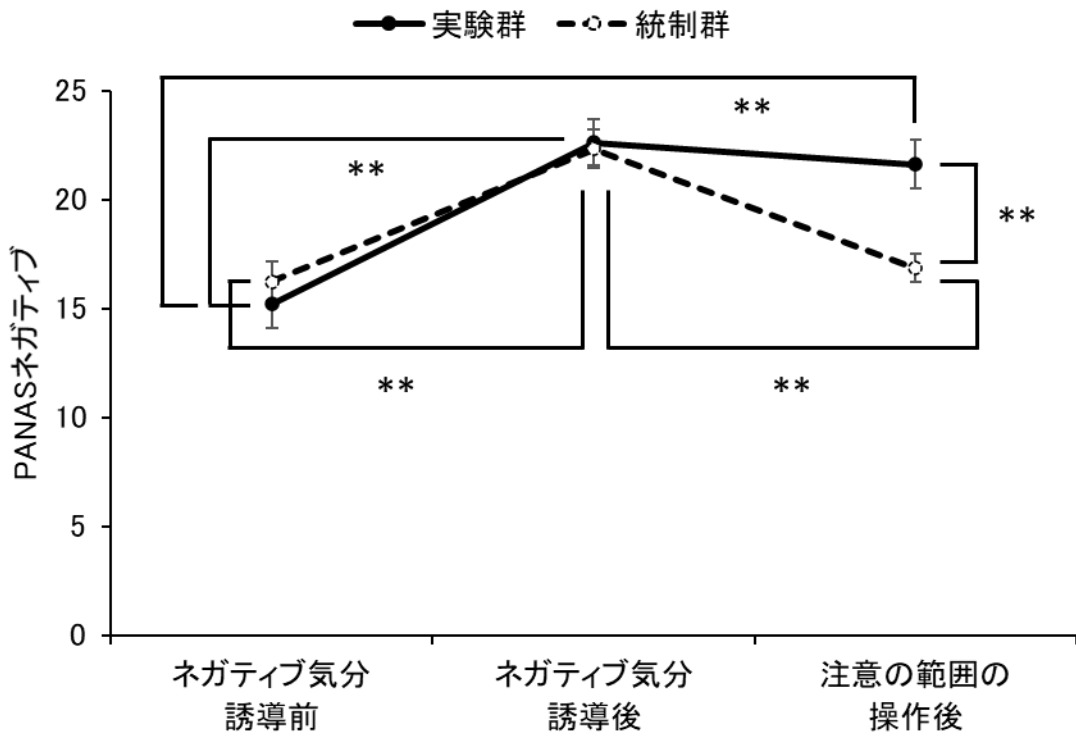
Note. RIO = Rumination about an Interpersonal Offense Scale日本語版  
 エラーバーは標準誤差を表す.  
 \*\* $p < .01$

Figure 5-4. 群と注意の範囲の操作による状態反すうの差異

においてネガティブ気分誘導後はネガティブ気分誘導前と注意の範囲の操作後よりも RIO が有意に高かった ( $ps < .01$ )。そして、注意の範囲の操作後において実験群は統制群よりも RIO が有意に高かった ( $p < .01$ )。

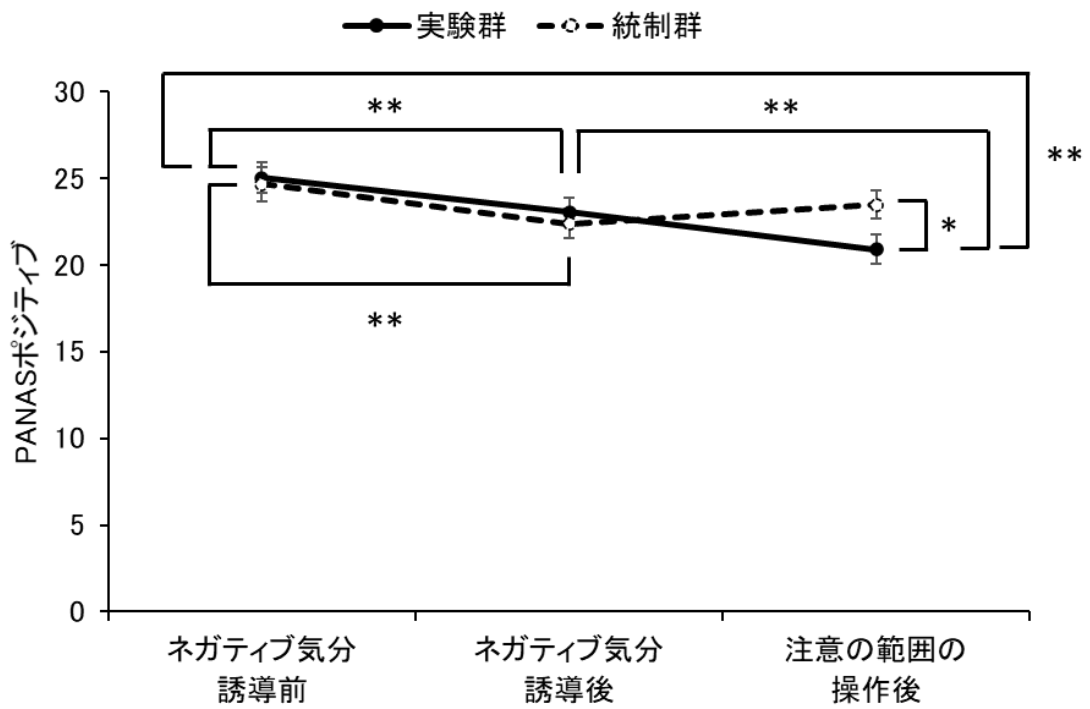
第 2 に、群と注意の範囲の操作時期を独立変数、PANAS のネガティブ感情を従属変数とした 2 要因分散分析を行った (Table 5-3; Figure 5-5)。その結果、交互作用が有意であったため ( $F(2, 80) = 16.16, p < .01, \eta_p^2 = .29$ )、単純主効果検定を行ったところ、実験群においてネガティブ気分誘導後と注意の範囲の操作後はネガティブ気分誘導前よりも PANAS のネガティブ感情が有意に高かった ( $ps < .01$ )。また、統制群においてネガティブ気分誘導後はネガティブ気分誘導前と注意の範囲の操作後よりも PANAS のネガティブ感情が有意に高かった ( $ps < .01$ )。そして、注意の範囲の操作後において実験群は統制群よりも PANAS のネガティブ感情が有意に高かった ( $p < .01$ )。

最後に、群と注意の範囲の操作時期を独立変数、PANAS のポジティブ感情を従属変数とした 2 要因分散分析を行った (Table 5-3; Figure 5-6)。その結果、交互作用が有意であったため (順に、 $F(2, 80) = 9.92, p < .01, \eta_p^2 = .20$ )、単純主効果検定を行ったところ、実験群において注意の範囲の操作後、ネガティブ気分誘導後、ネガティブ気分誘導前の順で PANAS のポジティブ感情が有意に低かった ( $ps < .01$ )。また、統制群においてネガティブ気分誘導後は誘導前よりも PANAS のポジティブ感情が有意に低かった ( $p < .01$ )。そして、注意の範囲の操作後において実験群は統制群よりも PANAS のポジティブ感情が有意に低かった ( $p = .03$ )。これらのことから、ネガティブ気分下で注意の範囲を狭める操作を行うと状態反すうとネガティブ感情は悪化する可能性が示され



Note. PANAS = 日本語版Positive and Negative Affect Schedule  
 エラーバーは標準誤差を表す。  
 \*\* $p < .01$

Figure 5-5. 群と注意の範囲の操作によるネガティブ感情の差異



Note. PANAS = 日本語版Positive and Negative Affect Schedule  
 エラーバーは標準誤差を表す.  
 \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

Figure 5-6. 群と注意の範囲の操作によるポジティブ感情の差異

た。

### 注意の範囲の変化量と状態反すうおよび感情状態の変化量の関連

実験操作による注意の範囲と状態反すうおよび感情状態の関連を検討するために、第1に、群ごとに注意の範囲の変化量と状態反すうの変化量で相関分析を行ったところ (Table 5-4; Figure 5-7), 実験群では有意な正の相関が見られ ( $r = .44, 95\%CI [.01, .73], p = .04,$ ), 統制群では有意な相関が見られなかった ( $r = -.02, 95\%CI [-.45, .42], p = .95$ )。第2に、群ごとに注意の範囲の変化量と PANAS のネガティブ感情の変化量で相関分析を行ったところ (Table 5-4; Figure 5-8), 両群で有意な相関は見られなかった (実験群:  $r = .07, 95\%CI [-.37, .49], p = .75$ ; 統制群:  $r = .16, 95\%CI [-.29, .55], p = .48$ )。第3に、群ごとに注意の範囲の変化量と PANAS のポジティブ感情の変化量で相関分析を行ったところ (Table 5-4; Figure 5-9), 両群で有意な相関は見られなかった (実験群:  $r = -.09, 95\%CI [-.50, .36], p = .69$ ; 統制群:  $r = -.31, 95\%CI [-.65, .14], p = .18$ )。これらのことから、修正版 Attentional Breadth Task は、反すうと注意の範囲の関連を検討するうえで妥当な課題であることが確認され、注意の範囲が狭まると状態反すうは悪化する可能性が示された。

### 第4節 考察

本研究の目的は、ネガティブ気分下の注意の範囲が反すうに及ぼす影響を検討することであった。本研究の結果から、実験群では、ネガティブ気分誘導後と注意の範囲の操作後はネガティブ気分誘導前よりも状態反すうが有意に高く、注意の範囲の操作後では、実験群は統制群よりも

Table 5-4  
 群ごとの注意の範囲の変化量と状態反すうおよび感情状態の変化量の関連

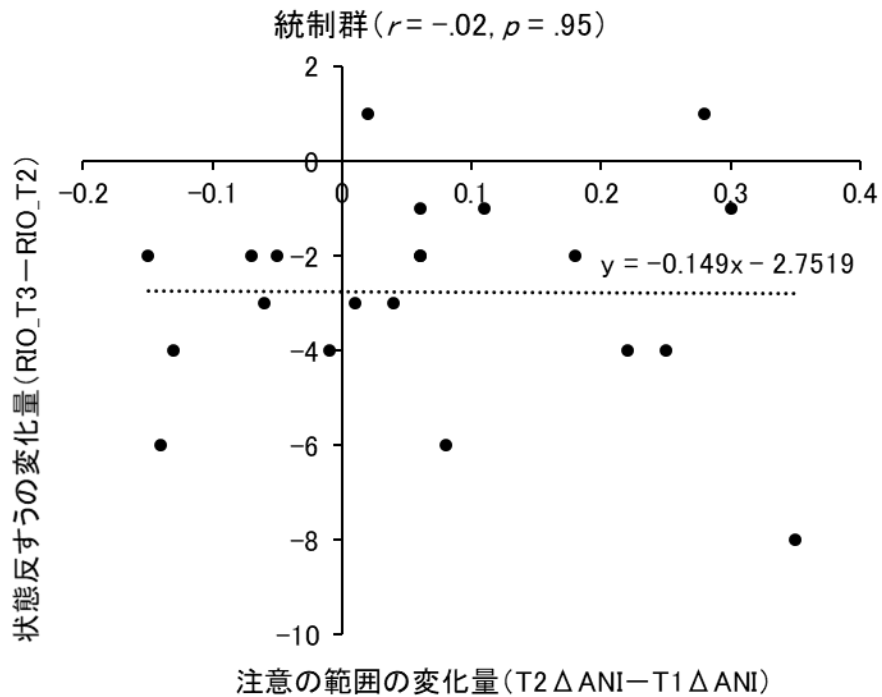
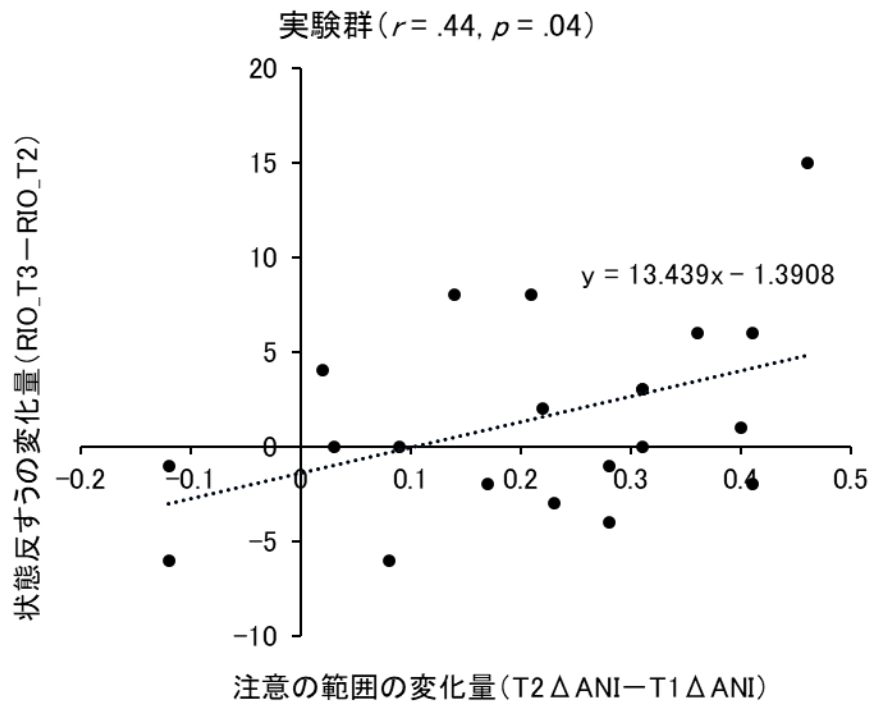
	実験群		統制群		相関分析			
	M	SD	M	SD	1	2	3	4
1 注意の範囲の変化量 ( $\Delta$ ANI_T2- $\Delta$ ANI_T1)	0.21	0.17	0.07	0.15	—	.44*	.07 n.s.	-.09 n.s.
2 状態反すうの変化量 (RIO_T3-RIO_T2)	1.48	5.12	-2.76	2.19	-.01 n.s.	—	.24 n.s.	-.05 n.s.
3 ネガティブ感情の変化量 (PANASネガ_T2-PANASネガ_T1)	-1.00	3.16	-5.48	2.79	.16 n.s.	-.01 n.s.	—	.32 n.s.
4 ポジティブ感情の変化量 (PANASポジ_T2-PANASポジ_T1)	-2.14	2.83	1.10	2.45	-.31 n.s.	-.14 n.s.	-.21 n.s.	—

Note.  $\Delta$ ANI = Close条件の正反応率-Far条件の正反応率 (値が大きいかほど注意の範囲が狭いことを表す); PANAS = 日本語版Positive and Negative Affect Schedule; RIO = Rumination about an Interpersonal Offense Scale 日本語版

相関分析のうち、表の上段は実験群、下段は統制群の相関係数をそれぞれ表す

\* $p < .05$ , n.s. not significant

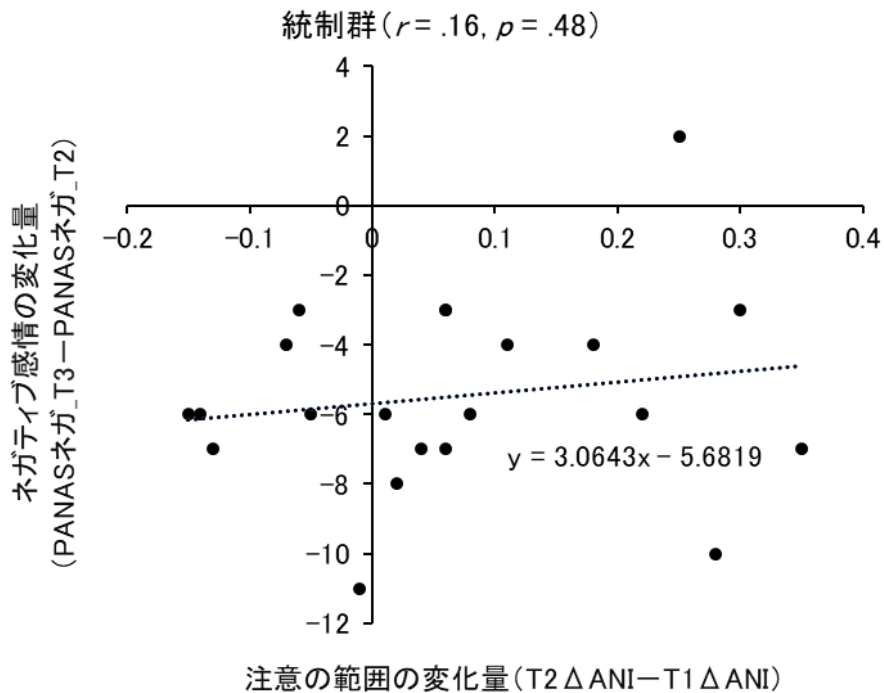
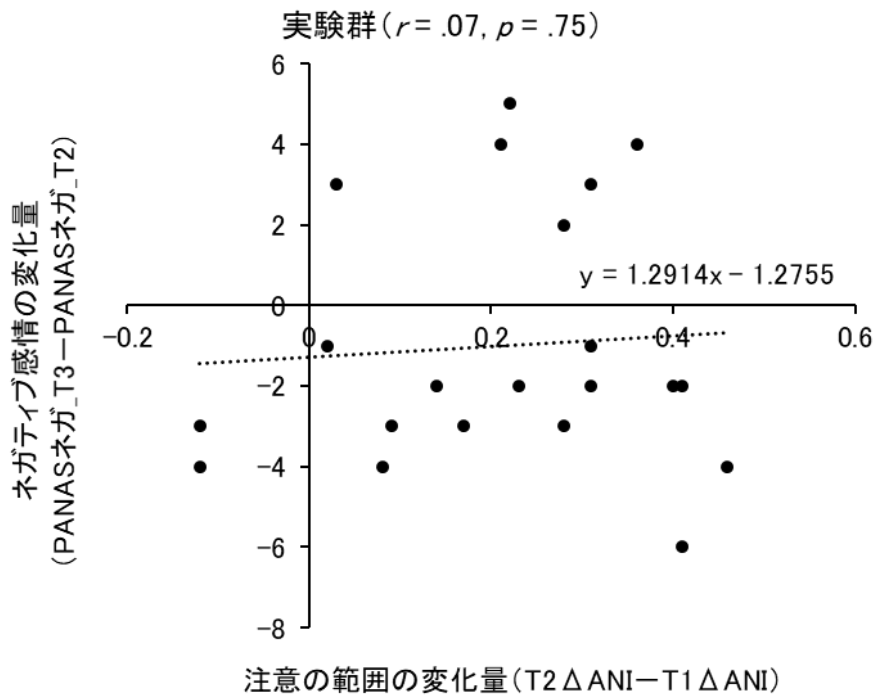




Note.  $\Delta$  ANI = Close条件の正反応率 - Far条件の正反応率  
(値が大きいほど注意の範囲が狭いことを表す)。

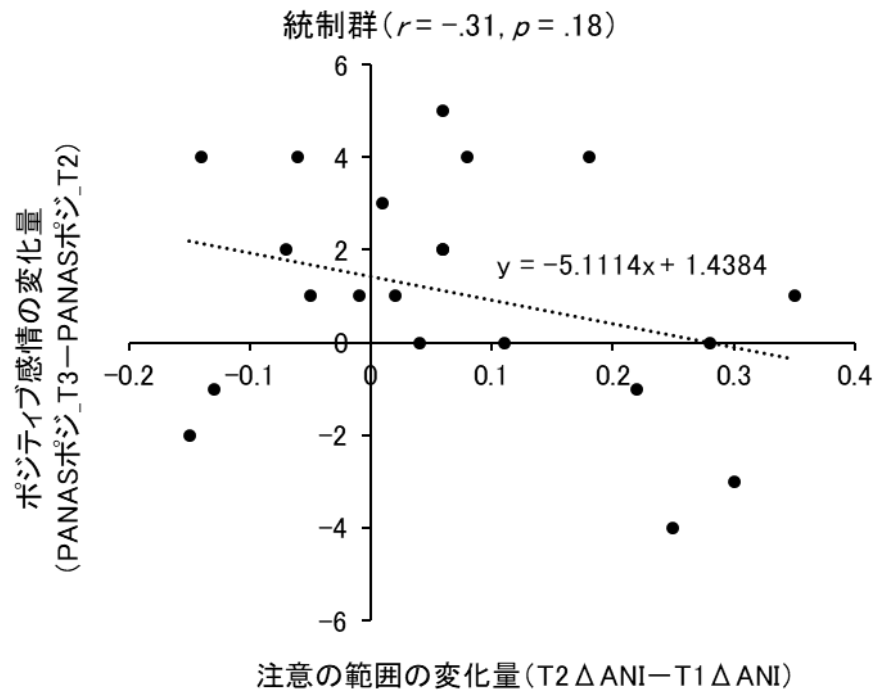
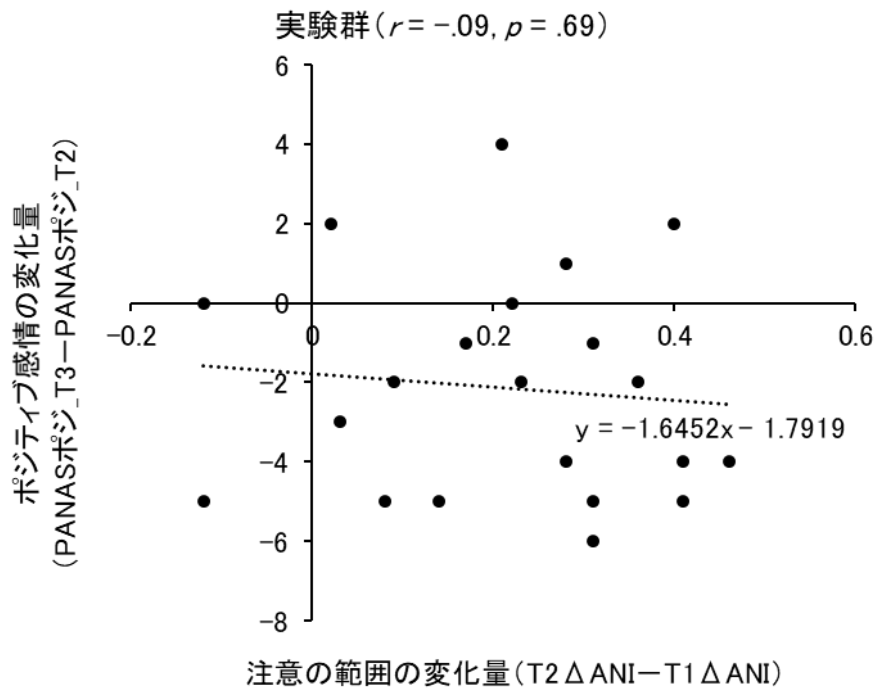
RIO = Rumination about an Interpersonal Offense Scale 日本語版

Figure 5-7. 注意の範囲の変化量と状態反すうの変化量の関連



Note.  $\Delta$  ANI = Close条件の正反応率 - Far条件の正反応率  
(値が大きいほど注意の範囲が狭いことを表す).  
PANAS = 日本語版Positive and Negative Affect Schedule

Figure 5-8. 注意の範囲の変化量とネガティブ感情の変化量の関連



Note.  $\Delta$  ANI = Close条件の正反応率 - Far条件の正反応率  
(値が大きいほど注意の範囲が狭いことを表す).  
PANAS = 日本語版Positive and Negative Affect Schedule

Figure 5-9. 注意の範囲の変化量とポジティブ感情の変化量の関連

状態反すうが有意に高いことが示された。また，実験群において注意の範囲の変化量は状態反すうの変化量と有意な正の相関が示された。これらの結果から，「ネガティブ気分誘導後に注意の範囲を狭める操作を行うと反すうは悪化する」という仮説は支持された。

第1に，ネガティブ気分誘導後に注意の範囲を狭める操作を行うと，注意の範囲の狭さを表す  $\Delta ANI$  は有意に高くなったことから，ネガティブ気分誘導後の注意の範囲の操作は妥当であったことが確認された。先行研究では，注意の範囲の拡大は嫌悪画像に対する ERP の N1 振幅を低減させる（Gable & Harmon-Jones, 2012）ことや，注意の範囲の縮小は自己制御に関する課題のパフォーマンスを悪化させる（Hanif et al., 2012）ことが報告されていたものの，これらの研究では注意の範囲の操作チェックが用いられていなかった。本研究では，ネガティブ気分誘導後に注意の範囲を操作しない統制群を設定したうえで上記の結果が示されたことから，本研究でのネガティブ気分誘導後の注意の範囲の操作は妥当であったといえる。

第2に，注意の範囲の操作後では実験群は統制群よりも状態反すうが有意に高いことと，実験群において注意の範囲の変化量は状態反すうの変化量と有意な正の相関が示された。また，実験群において注意の範囲の変化量は感情状態の変化量とは有意な相関は示されなかったことから，反すうと注意の範囲の関連に感情状態が交絡している可能性は除外することができる。これは，修正版 **Attentional Breadth Task** が注意の範囲と状態反すうの関連を検討するうえで妥当性が高い課題であることを示唆し，感情状態や抑うつを統制した場合でも反すうと注意の範囲に関連が見られるという知見とも一致する（Grol et al., 2015）。また，本研究では注意の範囲を操作しない統制群もあわせて設定したが，実験群

でのみ注意の範囲の変化量は状態反すうの変化量と有意な正の相関が示されたことから、ネガティブな話題を長く考えることで注意の範囲も連続的に狭まっていくことが推察される。これは、反すうが思考の持続性を特徴とすることや (Nolen-Hoeksema et al., 2008)、反すうによって注意の範囲が狭くなることで情報の取り込みが制限され、結果として反すうが持続するという注意の範囲モデルに基づく予測からも示唆される。

その一方で、Fang et al. (2018a) は、認知バイアス修正法の観点から Global-Local task を用いて注意の範囲の拡大が状態反すうの低減に及ぼす影響を検討したところ、注意の範囲と状態反すうの関連は示されておらず、本研究の結果とは一致しない。この要因として、Fang et al.

(2018a) では、対象とした注意の範囲の状態像が異なっていた可能性がある。注意の範囲という認知的情報処理には、「環境から直接知覚される情報の総量」という視覚的注意に基づく定義 (Fang et al., 2017) だけでなく、「ワーキングメモリ内で活性化する情報の総量」という広義の定義も提唱されている (Whitmer & Gotlib, 2013)。そのうえで、Fang et al. (2018a) では Global-Local task を用いて注意の範囲の訓練を行っているが、この課題は大局文字と局所文字の一方を判断させることから、Stroop 課題における色と意味のように判断が競合した状態で正しい入力情報を同定させる統制的処理を対象としている (Fujita, Trope, Liberman & Levin-Sagi, 2006; Hanif et al., 2012)。その一方で、本研究で用いた修正版 Attentional Breadth Task では、注視刺激からターゲットまでの距離をもって注意の範囲を検討しているため、視空間上の注意の範囲という自動的処理を対象としている。そのうえで、Attentional Breadth Task を用いた先行研究 (Grol et al., 2015) では、特性反すうのネガティブな下位因子である考え込み (brooding) が自己関

連刺激に対する注意の範囲の狭さに正の影響を与えることが報告されている。これらをふまえると、反すうは視空間上の注意を狭めるという自動的処理が、その注意の範囲外にある情報の取り込みを制限し、反すうを悪化させる可能性がある。本研究はネガティブ気分下で注意が狭くなると状態反すうが悪化することが示唆され、注意の範囲と反すうの関連について内的妥当性の高い知見を提供した点で意義があると考えられる。

## 第 6 章 総合考察

### 第 1 節 本研究結果のまとめ

本研究では、注意の範囲モデルに基づく反すうの持続過程について検討することを目的とした。第 3 章（研究 1）では、状態反すうを定量的に測定する **Rumination about an Interpersonal Offense Scale (RIO)** 日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を検討した。その結果、RIO 日本語版は原版と同様に 6 項目 1 因子構造であり、信頼性と妥当性を有することが示された。第 4 章（研究 2）では、思考内容の感情価と思考時間の観点から反すうを操作したうえで、反すうによる注意の範囲の差異を検討した。その結果、ネガティブな話題を長く考える操作を行うと注意の範囲が狭くなることが示され、仮説は支持された。第 5 章（研究 3）では、ネガティブ気分下の注意の範囲が反すうに及ぼす影響を検討した。その結果、注意の範囲を狭めた実験群は注意の範囲を操作しなかった統制群よりも注意の範囲の操作後の状態反すうが有意に高く、ネガティブ気分誘導後の注意の範囲の変化量と状態反すうの変化量の間には正の相関が示された。このことから、「ネガティブ気分誘導後に注意の範囲を狭める操作を行うと状態反すうは悪化する」という仮説は支持された。

これらの研究の結果をふまえると、**Figure 6-1** に示すことができる。研究 1 の結果から RIO 日本語版は状態反すうを測定するうえで有用な自記式尺度であること、研究 2 の結果から反すうは注意の範囲を狭めることと、研究 3 の結果からネガティブ感情を経験しているときに注意の範囲が狭くなると反すうが悪化することが示された。このことから、反すうと注意の範囲の狭小化は互いに影響しあうことで反すうが持続することが示唆される。

研究1: 状態反すうを定量的に  
測定する尺度(RIO日本語版)を作成

研究2: ネガティブな話題を長く  
考えると注意の範囲は狭くなる



研究3: ネガティブ気分を経験しているときに  
注意の範囲が狭くなると反すうは悪化する

Figure 6-1. 本研究の結果のまとめ



## 第 2 節 反すうと注意の範囲の関連性

### 第 1 項 反すうが注意の範囲に及ぼす影響

研究 2 の結果から、状態反すうは注意の範囲を狭めることが示された。その際、ネガティブな話題を長く考えるという思考内容の感情価と思考時間の 2 要因から状態反すうを操作することが重要であると考えられた。注意の範囲モデルでは、反すうによって注意の範囲が狭くなり、情報の取り込みが制限されると説明される。加えて、注意の範囲はセルフコントロールや感情制御に重要な役割を果たすことや (Hanif et al., 2012; Lutz et al., 2008)、反すうによって注意の範囲の中心にある情報の処理が促進される可能性が指摘されている (Fang et al., 2018b)。本研究の結果をふまえると、ネガティブな話題を長く考えることで、注意の範囲外からの情報の取り入れが制限され、注意の範囲内の情報の処理に固執してしまうことで注意の範囲が狭くなることが示唆される。

本研究では、反すうを思考内容の感情価 (ネガティブな思考内容) と思考時間 (長く考え続けること) の 2 要因から定義し、実験操作を行った。反すうの狭義の定義は研究者間で異なることが指摘されているが (Smith & Alloy, 2009)、反すうに関する研究の多くは Nolen-Hoeksema (1991) の「抑うつ症状や原因、意味、結果に繰り返し焦点づけられている反応様式」という定義を端に発している。Nolen-Hoeksema (1991) の反すうの定義と本研究での反すう操作の手続きは、この定義のうち「抑うつ症状や原因、意味、結果」はネガティブな思考内容に、「繰り返し焦点づけられている」ことは長く考え続けることにそれぞれ対応していると理解することができる。また、先行研究から、いったん反すう状態に入ってしまうと自己持続的 (self-perpetuating) にな

り、この思考状態を望まなくなった場合でも制御困難になってしまうことが指摘されている（Papageorgiou & Wells, 2003）。これらのことから、ネガティブな話題を長く考えることで、自己に関するネガティブな表象が活性化し、反すうの持続に関わる内的なトリガーが多くなるため、反すうが持続してしまうことが示唆される。

## 第 2 項 注意の範囲が反すうに及ぼす影響

研究 3 の結果から、ネガティブ気分下で注意の範囲が狭くなると反すうは悪化することが示された。注意の範囲モデルは、反すうの持続を注意の範囲という認知的情報処理の観点から説明するモデルであるが、注意の範囲が狭くなることで反すうが悪化することまでは明らかにされていなかった。注意の範囲モデルでは、反すうが注意の範囲を狭めることで情報の取り込みが制限され、特定の話題に限定された思考が繰り返し生じることで反すうが持続すると説明される。注意の範囲モデルを支持する先行研究は、主に横断研究デザインで反すうとワーキングメモリの関連を検討しているため（Whitmer & Gotlib, 2013）、このモデルを直接的に検討した研究は少ないという問題点が存在する。そこで、注意の範囲のモデルの妥当性を検証するためにも、まず研究 2 として反すうが注意の範囲を狭めることを検討し、研究 3 ではその逆の因果関係を想定して仮説を支持する結果が示された。

反すうが注意に関連する認知的情報処理に影響を及ぼすだけでなく、その逆の因果関係も成立することは、既存のモデルや先行研究の結果からも推察される。反すうと注意機能に関するモデルでは、ネガティブ刺激に対する気分一致効果バイアスや認知コントロールの低下が反すうを持続させることで抑うつが悪化する可能性が指摘されている（Koster et

al., 2011; Levens et al., 2009)。たとえば、嫌悪的な出来事に直面した際に、ネガティブな出来事から注意を切り替えることが困難になると、その出来事を手掛かりとして反すうをしてしまい、抑うつが悪化すると説明される (Koster et al., 2011)。加えて、注意機能の低下が反すうを悪化させる可能性を考慮することで、注意訓練が抑うつや反すうなどに対する治療効果の有効性の検討にも応用することができる。たとえば、うつ病に対する弁証法的行動療法に注意持続訓練とワーキングメモリを増強させる認知コントロール訓練を加えると、抑うつと反すうの改善が有意に大きかったことが報告されている (Siegle, Ghinassi, & Thase, 2007)。これらのことから、ネガティブ気分下で注意の範囲が狭くなると反すうは悪化すると考えられる。

### 第3項 反すうと注意の範囲の相互影響性

研究2と研究3の結果から、反すうと注意の範囲の狭小化は互いに影響しあうことで反すうが持続することが示唆された。そして、こうした反すうと注意の範囲の相互影響性には、反すうの構成要素という微視的視点と、反すうとネガティブな認知的情報処理との関連という巨視的視点から反すうの持続を理解することができると考えられる (Figure 6-2)。

まず、研究2における反すうの操作チェックの結果から、ネガティブな話題を長く考えることで状態反すうとネガティブ感情が悪化することが示された。このことから、ネガティブな思考内容と思考時間の相互作用が反すうの程度を規定すると考えられる。そして、ネガティブな話題を長く考えることで、自己に関するネガティブな表象が活性化し、反すうがさらに持続してしまうことが示唆される。これは、反すうそのもの

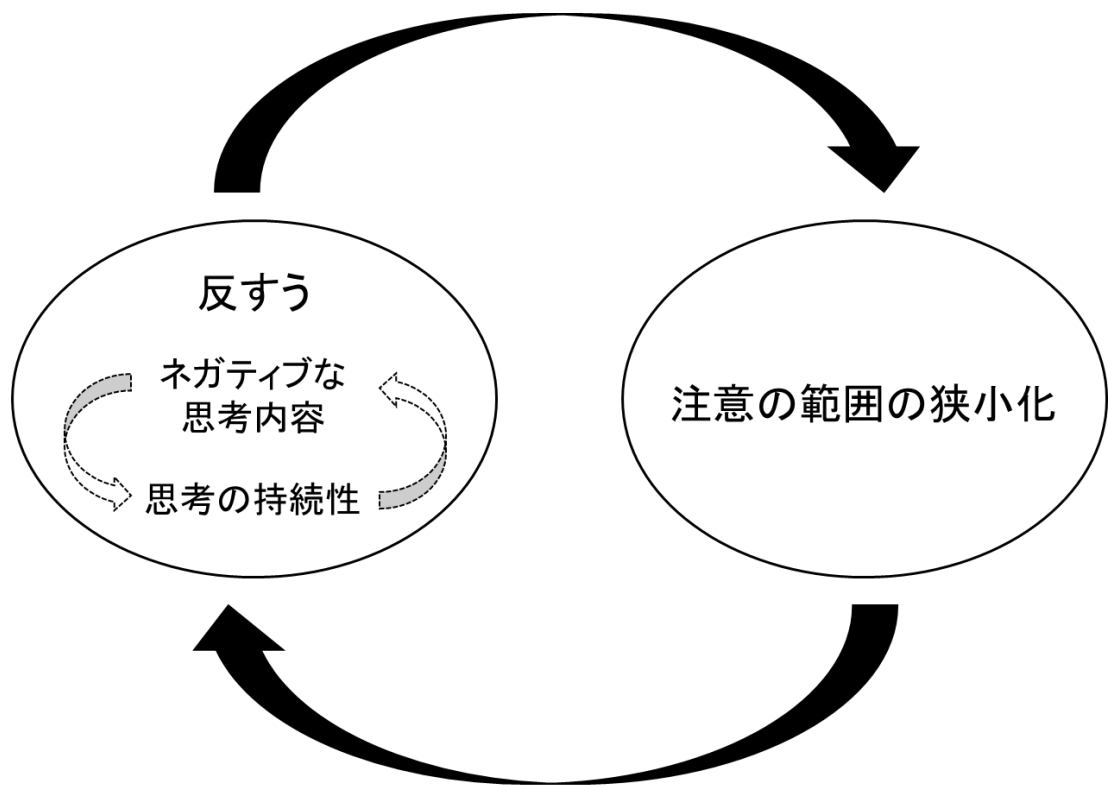


Figure 6-2. 本研究から示唆される反すうの持続過程の概念的枠組み

の制御困難性を表す点で，反すうの微視的な持続過程ととらえることができる。

また，研究2と研究3の結果から，反すうが注意の範囲を狭めることで，反すうの制御に必要な情報の取り込みが制限され，さらに反すうが悪化することが示唆された。これは，抑うつ的処理活性仮説では抑うつとネガティブな認知情報処理の相互に影響しあう過程を反すうと位置づけることや (Teasdale, 1985)，反すうはネガティブな自己注目を強めることで，ネガティブな感情と認知の悪循環が形成されるという指摘 (Ciesla & Roberts, 2007) からも推察される。このように，反すうと注意の範囲の狭小化のフィードバックループが成立することが示唆される点で，反すうの巨視的な持続過程ととらえることができる。

反すうと注意の範囲の関連性は，機能的磁気共鳴画像法を用いた認知神経学的知見からも支持することができると考えられる。これまでの研究から，反すうに関する認知神経基盤として扁桃体，内側前頭前野，後部帯状野が報告されており (Berman, Peltier, Nee, Kross, Deldin, & Jonides, 2011; Cooney, Joormann, Eugène, Dennis, & Gotlib, 2010; Disner, Beevers, Haigh, & Beck, 2011; Nejad, Fossati, & Lemogne, 2013)，これらの関連は，うつ病患者，寛解した抑うつ群，非臨床群を対象とした場合でも報告されており (Watkins & Roberts, 2020)，このうち内側前頭前野は注意機能に関連することが指摘されている (Cooney et al., 2010)。さらに，反すうの認知神経基盤としてデフォルトモードネットワークが指摘されている (Koster et al., 2011)。デフォルトモードネットワークとは，前部・後部帯状野，内側前頭前野，内側・側部下頭頂小葉で刺激や課題に伴わない安静状態の自発性脳活動であり (Raichle, MacLeod, Snyder, Powers, Gusnard, & Shulman, 2001)，注意の制御に関連する脳領

域と関連があることが指摘されている (Koster et al., 2011)。これらのことから、反すうと注意の範囲の認知神経基盤として内側前頭前野が関連する可能性が考えられる。

### 第3節 反すうと注意の範囲に関連する処理段階

研究2と研究3の結果から、反すうと注意の範囲の関連は、ネガティブ刺激に対する注意の偏りよりも初期の段階で処理される可能性がある。研究2と研究3では、Attentional Breadth Task (Bosmans et al., 2009) での実験刺激を表情刺激から図形刺激に変更したうえで、68ms というごく短い刺激提示時間で視空間上の注意の範囲の測定や操作を行った。その一方で、先行研究では、抑うつの注意バイアスは刺激提示を1,000ms以上に設定した場合に生じやすいことが示されている

(Mathews & MacLeod, 2005)。この要因として、抑うつの注意バイアスは注意の方位の段階では生起しにくく、感情情報を方略的かつ意識的に処理するという精緻化の段階で生起しやすいことが指摘されている

(Peckham, McHugh, & Otto, 2010)。

また、注意の範囲という認知的情報処理は、注意の初期段階の感覚処理を表すERPのN1成分やP1成分と関連があることが指摘されている

(Hanif et al., 2012; Hillyard & Anllo-Vento, 1998)。ERPは時間分解能にすぐれており、感覚入力から反応出力までの情報処理過程を時間に沿って検討することができる(守谷ら, 2011)。また、ERPのN1成分やP1成分は視覚刺激を提示した約100ms後に検出される陰性・陽性反応を表す。たとえば、視覚刺激が注意焦点の中に出現した時に、注意焦点の外に出現した時よりもP1の振幅が増大することが報告されている

(Handy, Soltani, & Mangun, 2001; Heinze et al., 1994)。本研究ではERP

といった生理指標を測定していないものの、修正版 **Attentional Breadth Task** の刺激提示時間をふまえると、反すうによって 68ms 前後で入力情報に対する注意の範囲を狭める処理がなされ、100ms 前後で自発的な脳の電気活動である ERP が検出された後に、1,000ms 以降に前頭前野などで高次の認知的情報処理が行われる可能性が考えられる。また、本研究で示唆された反すうと注意の範囲の相互影響性の観点から、これらの情報処理過程は一方向で処理がなされるだけでなく、初期の感覚段階で注意の範囲が狭くなるという処理がなされることで反すうが持続する可能性も考えられる。

反すうと注意の範囲の関連は初期の感覚段階で処理されるという可能性は、先行研究での指摘からも推察される。先行研究では、注意の範囲の広さと刺激処理の強度は負の相関関係（すなわちトレードオフの関係）にあることが指摘されている（守谷ら，2011）。ここでの刺激処理の強度には、刺激処理の精緻化や速度が含まれる。したがって、注意の範囲が広がると広範囲に情報の取り込みが行われるが、局所的な刺激処理は遅くなる。一方で、注意の範囲が狭くなると狭い範囲でしか情報の取り込みが行われませんが、局所的な刺激処理は速くなることが推察される。刺激処理の速度が速くなることは、より初期の情報処理過程が活性化すると考えられることから、反すうと注意の範囲の関連は初期の感覚段階で処理がなされることが示唆される。

#### 第 4 章 注意の範囲モデルに基づく反すうの先行研究の説明

本研究は、注意の範囲モデルに基づき反すうの持続過程を検討したが、このモデルを用いることで反すうに関する従来の知見も説明することができると考えられる。まず、感情ネットワークモデルでは、反すう

によってネガティブな気分一致効果バイアスが生じることが仮定される。その一方で、不安と比べて、抑うつや反すうの気分一致効果バイアスは知見が一貫していないことも指摘されている。この場合、反すうによって初期の感覚段階で注意の範囲が狭くなる。そのうえで、ネガティブ刺激に対する選択的処理が促進されるという気分一致効果バイアスが生じると説明することができる。また、反すうの気分一致効果バイアスに関する知見が一貫していないのは、注意の範囲という認知的情報処理を考慮していなかったためと考えられる。

また、認知資源の枯渇モデルでは、反すうによって一定量の認知資源が消費されることで、実行機能を必要とする認知的処理が困難になることが仮定される。この場合、反すうによって初期の感覚段階で注意の範囲が狭くなることで、利用可能な認知資源も小さくなり、思考のコントロールに必要な情報の取り込みが制限される。これにより、反すうをすることで実行機能を必要とする認知的処理が困難になると説明することができる。また、反すうによって注意の範囲が狭くなり、その注意の範囲内の刺激処理の強度が高くなることで、課題に関連した情報の保持が容易になる (Altamirano et al., 2010) ことや、注意を補足するような外的情報からの干渉を受けにくくなる (Altamirano et al., 2010; Zetsche et al., 2012) ことが推察される。Altamirano et al. (2010) や Zetsche et al. (2012) の知見は、認知資源の枯渇モデルでは説明がつかないものであることから、注意の範囲モデルはそのほかのモデルよりも反すうに関する知見を包括的に説明できると考えられる。

## 第5節 本研究による臨床応用可能性

### 第1項 効果的な気そらしに関する基礎的知見



本研究の知見をふまえると、注意の範囲という認知的情報処理に焦点を当てることで、第1に、効果的な気そらしに関する基礎的知見の提供につながることを示唆される。反応スタイル理論では、抑うつを経験したときの反すう反応は抑うつを持続・悪化させるが、気そらし反応は抑うつを持続や悪化を阻止することができるという説明される（Nolen-Hoeksema, 1991）。しかしながら、気そらしの有効性に関する知見は一貫しておらず（Nolen-Hoeksema et al., 2008）、その要因として、注意をそらすことを意図した気そらしはストレス状況に対する具体的対処を阻害してしまう可能性が指摘されている（及川, 2003）。一方で、注意の範囲モデルや本研究の結果をふまえると、反すうによって注意の範囲が狭くなることで情報の取り込みが制限されると想定される。そのため、効果的な気そらしはストレス事態から注意をそらすのではなく、ストレス事態を視野に入れながら注意の範囲を広げることで、反すうの制御や問題解決に必要とされる情報の取り込みが促進され、抑うつの改善につながる可能性がある。この場合、ストレス事態全体から注意をそらすのか、それともストレス事態を注意の範囲に含みながらも別の情報の取り入れをするのかによって、気そらしの有効性は変化することが想定される。こうしたことから、注意の範囲は気そらしの有効性を規定する可能性がある。

## 第2項 反すうに対する新たな認知バイアス修正法に関する基礎的知見

第2に、反すうに対する新たな認知バイアス修正法に関する基礎的知見の提供につながることを示唆される。認知バイアス修正法は、反すうなどの臨床症状とネガティブな認知的情報処理に関する因果関係や新たな介入法の検討を目的とする。その一方で、反すうに対する認知バイア

ス修正法の有効性はあまり示されていない (Fang et al., 2018a; Koster et al., 2017)。反すうに対する認知バイアス修正法は、感情ネットワークモデルや認知資源の枯渇モデルに依拠した認知訓練による効果を検討している。本研究の結果をふまえると、注意の範囲を広げることを意図した認知訓練を導入することで、反すうの軽減につながる可能性がある。これは、本研究では注意の範囲を広げる操作を行っていないものの、ネガティブ気分下で注意の範囲を狭めることが反すうを悪化させる可能性が示されたことから示唆される。

また、注意の範囲モデルに基づく反すうに対する認知バイアス修正法は、反すうの自動的処理に焦点を当てた認知的介入になると考えられる。抑うつ の 2 過程モデル (Beevers, 2005) では、統制的処理と自動的処理によって抑うつ の 認知的脆弱性が異なり、両者の相互作用が感情の制御にとって重要な役割を果たすとされる。認知バイアス修正法では、意識的に認知訓練を行うことで認知バイアスを修正し、臨床症状の改善を目指すことから、統制的処理に焦点を当てた介入といえる。反すうと注意の範囲の関連は初期の感覚段階で処理される可能性をふまえると、注意の範囲といった自動的処理に焦点を当て、反すうと注意の範囲に関する基礎的知見を蓄積させることで、反すうに対する効果的な認知バイアス修正法につながる可能性がある。

## **第 6 節 本研究の限界点と今後の課題**

### **第 1 項 状態反すうを自記式尺度で測定することによるバイアスに関する課題**

本研究では、注意の範囲という認知的情報処理の観点から反すうの持続過程について検討し、人間科学や臨床心理学（特に認知行動療法）に

において有用な知見を提供すると考えられる。その一方で、方法論上の問題など複数の限界点や今後検討すべき課題が存在する。

第1に、状態反すうを自記式尺度で測定することによるバイアスの可能性がある。本研究では、反すうと注意の範囲の因果関係を検討するうえで、状態反すうを測定する自記式尺度（RIO日本語版）を開発し、信頼性と妥当性を有することを示した。自記式尺度による構成概念の測定は、精神的疲労や時間的・経済的なコストを抑え、結果の一般化をしやすいという利点がある。しかしながら、自記式尺度で状態反すうを測定する場合、ある時点における自身の状態反すうの程度を客観的に把握できていることが前提となる。また、反すうは自記式尺度だけでなく、さまざまな認知神経指標（例：機能的脳活動や脳波）や生理指標（例：コルチゾールや心拍）でも関連が示されている（Watkins & Roberts, 2020）。そのため、今後はRIO日本語版と認知神経指標や生理指標との関連を検討し、RIO日本語版の妥当性を確認する必要がある。

## 第2項 修正版 Attentional Breadth Task の信頼性と妥当性に関する課題

第2に、本研究で注意の範囲の測定と操作を行うために用いた修正版 Attentional Breadth Task の信頼性と妥当性の問題が考えられる。この課題は、注意の範囲に関する複数の先行研究（Bosmans et al., 2018; Dewitte & Koster, 2014; Fang et al., 2018a; Grol et al., 2015; Grol & Raedt, 2014; Van de Walle et al., 2017）で用いられており、視空間上の注意の範囲を客観的に測定することができるため、本研究でも用いることとした。その一方で、Attentional Breadth Task では刺激の提示時間が68ms というごく短い時間に設定されているため、精神的疲労や課題へ

の馴れなどの個人内の変動が課題成績に誤差を生じさせる可能性がある。また、本研究で使用した刺激提示用のパソコンとディスプレイの性能水準では、68msの刺激提示の制御に誤差が生じる可能性も否定できない。そのため、今後は注意の範囲の測定と操作をする際の **Attentional Breadth Task** の信頼性と妥当性を検討する必要がある。

### **第3項 反すうと注意の範囲の相互影響性が抑うつに及ぼす影響に関する課題**

第3に、本研究では反すうと注意の範囲の相互影響性が抑うつに及ぼす影響を検討していない。注意の範囲モデルでは、反すうが注意の範囲を狭めることで抑うつが悪化すると説明される。そのうえで、本研究では、反すうと注意の範囲に双方向の因果関係が成立することで反すうが持続し、抑うつが悪化することが示唆された。その一方で、本研究では抑うつを従属変数として扱っていないため、反すうと注意の範囲の相互影響によって抑うつが悪化することまでは明らかにされていない。そのため、今後は反すうと注意の範囲の相互影響性が抑うつを悪化させることを検討する必要がある。

### **第4項 注意の範囲の拡大による反すうの低減効果に関する課題**

第4に、本研究では注意の範囲を拡大させることで反すうが低減することまでは検討していない。研究3の結果から、ネガティブ気分下で注意の範囲を狭める操作を行うと状態反すうは悪化することが示された。その一方で、研究3では注意の範囲を狭める群と統制群を設定しているが、注意の範囲を広げる群は設定していない。研究3の結果や認知バイアス修正法 (Koster et al., 2017) に基づいた場合、ネガティブ気分下で

注意の範囲を広げる訓練を行うことで状態反すうは軽減する可能性が考えられる。また、臨床的介入と実験的研究はどちらも対象者に変化を生じさせることを目的としている（杉浦，2009）。そのため、今後は注意の範囲の拡大による反すうの低減効果を検討する必要がある。

## 第5項 反すうや注意の制御に関わるトップダウンの変数に関する課題

第5に、本研究では反すうや注意の制御に関わるトップダウンの変数を扱っていない。自己調整実行機能モデル（Wells & Matthews, 1994）では、メタシステム、認知スタイル、下位レベルの情報処理という3つの認知レベルを仮定している。そのうえで、注意が持続的に自己に焦点づけられ反すうや心配によって促進される情報処理と、脅威刺激のモニタリングに固執してしまうことで思考の柔軟性が失われることを想定している。本研究では、反すうや注意の範囲を実験的に操作したうえで、両者の相互影響性について内的妥当性の高い知見を示すことを目的とした。その一方で、本研究の結果からは、トップダウンの注意制御に関わるメタ認知的信念などが注意の範囲に影響する可能性を排除することができない。そのため、今後はこうした変数も扱ったうえで反すうと注意の範囲の関連を検討する必要がある。

## 第7節 本研究による人間科学への寄与

人間科学とは、社会における人間の総合的な理解とそれによる社会や生活の質の向上を目指す学問であると考えられる。そのうえで、本研究で扱った反すうは、自己と他者を含む環境との関わりの中で、ネガティブな感情と認知的情報処理の悪循環に陥った心理学的現象であると理解することができる。また、反すうは抑うつやうつ病の維持・悪化要因でもある。

る。現代においてうつ病は，日本を含む世界で最も深刻な精神疾患の1つであり，大きな社会問題となっていることをふまえると，反すうに関する心理学的理解を深めることは人間科学の貢献に寄与すると考えられる。

反すうが抑うつを維持・悪化させることを説明するモデルはこれまでも提唱されてきたが，いずれのモデルからも説明が困難な知見が報告されている。すぐれたモデルとは，多くの既存の知見を説明し，多くの新規の知見を予測することができるものと考えられる。そのため，反すうの持続を説明する注意の範囲モデルに基づいた研究の必要性が指摘された。そのうえで，本研究の知見は，方法論上の問題を含む限界点が存在するものの，これまで検討されてこなかった反すうと注意の範囲の相互影響性によって反すうが持続することを示唆することから，人間科学に一定の意義を提供するものと考えられる。

## 引用文献

- Aldao, A., Nolen-Hoeksema, S., & Schweizer, S. (2010). Emotion-regulation strategies across psychopathology: A meta-analytic review. *Clinical Psychology Review, 30*, 217–237.
- Altamirano, L. J., Miyake, A., & Whitmer, A. J. (2010). When mental inflexibility facilitates executive control: Beneficial side effects of ruminative tendencies on goal maintenance. *Psychological Science, 21*, 1377–1382.
- American Psychiatric Association. (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders (5th ed.)*. Washington, DC: American Psychiatric Association.
- (アメリカ精神医学会 高橋 三郎・大野 裕 (監訳) (2014). DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)
- Amir, N., Weber, G., Beard, C., Bomyea, J., & Taylor, C. T. (2008). The effect of a single-session attention modification program on response to a public-speaking challenge in socially anxious individuals. *Journal of Abnormal Psychology, 117*, 860–868.
- Beevers, C. G. (2005). Cognitive vulnerability to depression: A dual process model. *Clinical Psychology Review, 25*, 975–1002.
- Berman, M. G., Peltier, S., Nee, D. E., Kross, E., Deldin, P. J., & Jonides, J. (2011). Depression, rumination and the default network. *Social Cognitive and Affective Neuroscience, 6*, 548–555.
- Bosmans, G., Braet, C., Koster, E., & Raedt, R. D. (2009). Attachment security and attentional breadth toward the attachment figure in middle

- childhood. *Journal of Clinical Child & Adolescent Psychology*, 38, 872–882.
- Bosmans, G., Goldblum, E., Braet, C., Van de Walle, M., Heylen, J., Bijttebier, P., ... & De Raedt, R. (2018). Children's attentional breadth around their mother: Comparing stimulus-driven vs. cognitively controlled processes. *Social Development*, 27, 95–108.
- Bower, G. H. (1981). Mood and memory. *American Psychologist*, 36, 129–148.
- Buodo, G., Patron, E., Messerotti Benvenuti, S., & Palomba, D. (2018). Single-session attention bias modification training in victims of work-related accidents. *Frontiers in Psychology*, 9, 1619.
- Butler, E. A., Lee, T. L., & Gross, J. J. (2007). Emotion regulation and culture: Are the social consequences of emotion suppression culture-specific? *Emotion*, 7, 30–48.
- Carver, C. S., & Scheier, M. F. (1990). Origins and functions of positive and negative affect: A control-process view. *Psychological Review*, 97, 19–35.
- Cicchetti, D. V. (1994). Guidelines, criteria, and rules of thumb for evaluating normed and standardized assessment instruments in psychology. *Psychological Assessment*, 6, 284–290.
- Ciesla, J. A., & Roberts, J. E. (2002). Self-directed thought and response to treatment for depression: A preliminary investigation. *Journal of Cognitive Psychotherapy*, 16, 435–453.
- Ciesla, J. A., & Roberts, J. E. (2007). Rumination, negative cognition, and their interactive effects on depressed mood. *Emotion*, 7, 555–565.



- Cohen, J. (1988). *Statistical power analysis for the behavioral sciences* (2nd ed.) (pp. 75–107). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Cooney, R. E., Joormann, J., Eugène, F., Dennis, E. L., & Gotlib, I. H. (2010). Neural correlates of rumination in depression. *Cognitive, Affective, & Behavioral Neuroscience, 10*, 470–478.
- Cuijpers, P., Karyotaki, E., Weitz, E., Andersson, G., Hollon, S. D., & van Straten, A. (2014). The effects of psychotherapies for major depression in adults on remission, recovery and improvement: A meta-analysis. *Journal of Affective Disorders, 159*, 118–126.
- De Lissnyder, E., Koster, E. H., Goubert, L., Onraedt, T., Vanderhasselt, M. A., & De Raedt, R. (2012). Cognitive control moderates the association between stress and rumination. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry, 43*, 519–525.
- DeVellis, R. F. (2016). *Scale development: Theory and applications* (4th ed.) (pp. 39–82). Chapel Hill, NC: SAGE Publications.
- Dewitte, M., & Koster, E. H. (2014). Attentional breadth and proximity seeking in romantic attachment relationships. *British Journal of Social Psychology, 53*, 74–92.
- Disner, S. G., Beevers, C. G., Haigh, E. A., & Beck, A. T. (2011). Neural mechanisms of the cognitive model of depression. *Nature Reviews Neuroscience, 12*, 467–477.
- Donaldson, C., Lam, D., & Mathews, A. (2007). Rumination and attention in major depression. *Behaviour Research and Therapy, 45*, 2664–2678.
- Driessen, E., & Hollon, S. D. (2010). Cognitive behavioral therapy for mood disorders: Efficacy, moderators and mediators. *Psychiatric Clinics, 33*,

537–555.

- Ehring, T., Fuchs, N., & Kläsener, I. (2009). The effects of experimentally induced rumination versus distraction on analogue posttraumatic stress symptoms. *Behavior Therapy, 40*, 403–413.
- Ellis, H. C., & Ashbrook, P. W. (1988). *Affect, cognition, and social behavior*. Toronto: Hogrefe.
- Fang, L., Hoorelbeke, K., Bruyneel, L., Notebaert, L., MacLeod, C., De Raedt, R., & Koster, E. H. (2018a). Can training change attentional breadth? Failure to find transfer effects. *Psychological Research, 82*, 520–534.
- Fang, L., Sanchez-Lopes, A., & Koster, E. H. (2017). Testing the attentional scope model of rumination: An eye-tracking study using the moving window paradigm. *Biological Psychology, 123*, 278–285.
- Fang, L., Sanchez-Lopes, A., & Koster, E. H. (2018b). Attentional scope, rumination, and processing of emotional information: An eye-tracking study. *Emotion, 19*, 1259–1267.
- Faul, F., Erdfelder, E., Lang, A. G., & Buchner, A. (2007). G\* Power 3: A flexible statistical power analysis program for the social, behavioral, and biomedical sciences. *Behavior Research Methods, 39*, 175–191.
- Franklin, C. L., Strong, D. R., & Greene, R. L. (2002). A taxometric analysis of the MMPI-2 depression scales. *Journal of Personality Assessment, 79*, 110–121.
- Fredrickson, B. L. (2001). The role of positive emotions in positive psychology: The broaden-and-build theory of positive emotions. *American Psychologist, 56*, 218–226.

- Fredrickson, B. L., & Branigan, C. (2005). Positive emotions broaden the scope of attention and thought-action repertoires. *Cognition & Emotion*, *19*, 313–332.
- Fujita, K., Trope, Y., Liberman, N., & Levin-Sagi, M. (2006). Construal levels and self-control. *Journal of Personality and Social Psychology*, *90*, 351–367.
- Gable, P. A., & Harmon-Jones, E. (2012). Reducing attentional capture of emotion by broadening attention: Increased global attention reduces early electrophysiological responses to negative stimuli. *Biological Psychology*, *90*, 150–153.
- Garland, E. L., Fredrickson, B., Kring, A. M., Johnson, D. P., Meyer, P. S., & Penn, D. L. (2010). Upward spirals of positive emotions counter downward spirals of negativity: Insights from the broaden-and-build theory and affective neuroscience on the treatment of emotion dysfunctions and deficits in psychopathology. *Clinical Psychology Review*, *30*, 849–864.
- Ghaemi, S. N. (2007). *Mood disorders (Practical Guides in Psychiatry) (2nd ed.)*. Philadelphia, PA: Lippincott Williams & Wilkins.
- (ガミー, N. 松崎 朝樹 (監訳) (2013). 気分障害ハンドブック メディカル・サイエンス・インターナショナル)
- Gotlib, I. H., & Joormann, J. (2010). Cognition and depression: Current status and future directions. *Annual Review of Clinical Psychology*, *6*, 285–312.
- Grol, M., Hertel, P. T., Koster, E. H. W., & De Raedt, R. (2015). The effects of rumination induction on attentional breadth for self-related

- information. *Clinical Psychological Science*, 3, 607–618.
- Grol, M., & Raedt, R. D. (2014). Effects of positive mood on attentional breadth for emotional stimuli. *Frontiers in Psychology*, 5, 1277.
- Handy, T. C., Soltani, M., & Mangun, G. R. (2001). Perceptual load and visuocortical processing: Event-related potentials reveal sensory-level selection. *Psychological Science*, 12, 213–218.
- Hanif, A., Ferrey, A. E., Frischen, A., Pozzobon, K., Eastwood, J. D., Smilek, D., & Fenske, M. J. (2012). Manipulations of attention enhance self-regulation. *Acta Psychologica*, 139, 104–110.
- Hankin, B. L., Fraley, R. C., Lahey, B. B., & Waldman, I. D. (2005). Is depression best viewed as a continuum or discrete category? A taxometric analysis of childhood and adolescent depression in a population-based sample. *Journal of Abnormal Psychology*, 114, 96–110.
- Hasegawa, A. (2013). Translation and initial validation of the Japanese version of the ruminative responses scale. *Psychological Reports*, 112, 716–726.
- Heinze, H. J., Mangun, G. R., Burchert, W., Hinrichs, H., Scholz, M., Münte, T. F., ... & Gazzaniga, M. S. (1994). Combined spatial and temporal imaging of brain activity during visual selective attention in humans. *Nature*, 372, 543–546.
- Hillyard, S. A., & Anllo-Vento, L. (1998). Event-related brain potentials in the study of visual selective attention. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 95, 781–787.
- Hollon, S. D., DeRubeis, R. J., Shelton, R. C., Amsterdam, J. D., Salomon, R. M., O'Reardon, J. P., ... & Gallop, R. (2005). Prevention of relapse

- following cognitive therapy vs medications in moderate to severe depression. *Archives of General Psychiatry*, 62, 417–422.
- Hollon, S. D., Stewart, M. O., & Strunk, D. (2006). Enduring effects for cognitive behavior therapy in the treatment of depression and anxiety. *Annual Review of Psychology*, 57, 285–315.
- Hooper, D., Coughlan, J., & Mullen, M. R. (2008). Structural equation modelling: Guidelines for determining model fit. *Electronic Journal of Business Research Methods*, 6, 53–60.
- 稲田 尚子 (2015). 尺度翻訳に関する基本指針 行動療法研究, 41, 117–125.
- 伊藤 大輔・兼子 唯・巢山 晴菜・金谷 順弘・田上 明日香・小関 俊祐  
…鈴木 伸一 (2012). 心理士による集団認知行動療法がうつ病患者のうつ症状の改善に及ぼす効果：対照比較研究 行動療法研究, 38, 169–179.
- Jallais, C., & Gilet, A. L. (2010). Inducing changes in arousal and valence: Comparison of two mood induction procedures. *Behavior Research Methods*, 42, 318–325.
- Jones, N. P., Siegle, G. J., & Thase, M. E. (2008). Effects of rumination and initial severity on remission to cognitive therapy for depression. *Cognitive Therapy and Research*, 32, 591–604.
- Joormann, J. (2010). Cognitive inhibition and emotion regulation in depression. *Current Directions in Psychological Science*, 19, 161–166.
- Just, N., & Alloy, L. B. (1997). The Response styles theory of depression: Tests and an extension of the theory. *Journal of Abnormal Psychology*, 106, 221–229.

- Koster, E. H., De Lissnyder, E., & De Raedt, R. (2013). Rumination is characterized by valence-specific impairments in switching of attention. *Acta Psychologica, 144*, 563–570.
- Koster, E. H., De Lissnyder, E., Derakshan, N., & De Raedt, R. (2011). Understanding depressive rumination from a cognitive science perspective: The impaired disengagement hypothesis. *Clinical Psychology Review, 31*, 138–145.
- Koster, E. H., Hoorelbeke, K., Onraedt, T., Owens, M., & Derakshan, N. (2017). Cognitive control interventions for depression: A systematic review of findings from training studies. *Clinical Psychology Review, 53*, 79–92.
- Lavie, N. & Tsai, Y. (1994). Perceptual load as a major determinant of the locus of selection in visual attention. *Perception & Psychophysics, 56*, 183–197.
- Levens, S. M., Muhtadie, L., & Gotlib, I. H. (2009). Rumination and impaired resource allocation in depression. *Journal of Abnormal Psychology, 118*, 757–766.
- Luck, S. J., Woodman, G. F., & Vogel, E. K. (2000). Event-related potential studies of attention. *Trends in Cognitive Sciences, 4*, 432–440.
- Lutz, A., Slagter, H. A., Dunne, J. D., & Davidson, R. J. (2008). Attention regulation and monitoring in meditation. *Trends in Cognitive Sciences, 12*, 163–169.
- Lyubomirsky, S., Layous, K., Chancellor, J., & Nelson, S. K. (2015). Thinking about rumination: The scholarly contributions and intellectual legacy of Susan Nolen-Hoeksema. *Annual Review of Clinical*

*Psychology, 11*, 1–22.

- Ma, L., Kruijt, A. W., Nöjd, S., Zetterlund, E., Andersson, G., & Carlbring, P. (2019). Attentional bias modification in virtual reality – A VR-based dot-probe task with 2D and 3D stimuli. *Frontiers in Psychology, 10*, 2526.
- Marchetti, I., Mor, N., Chiorri, C., & Koster, E. H. (2018). The Brief State Rumination Inventory (BSRI): Validation and psychometric evaluation. *Cognitive Therapy and Research, 42*, 447–460.
- Martin, L. L., & Tesser, A. (1989). Toward a motivational and structural theory of ruminative thought. In J. Uleman & J. Bargh (Eds). *Unintended thought* (pp. 306–326). New York, NY: Guilford Press.
- Martin, L.L., & Tesser, A. (1996). Some ruminative thoughts. In R.S. Wyer Jr. (Ed.), *Ruminative thoughts* (pp. 1–47). Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Mathews, A., & MacLeod, C. (2005). Cognitive vulnerability to emotional disorders. *Annual Review of Clinical Psychology, 1*, 167–195.
- Matsumoto, D., Yoo, S. H., & Nakagawa, S. (2008). Culture, emotion regulation, and adjustment. *Journal of Personality and Social Psychology, 94*, 925–937.
- Miyamoto, Y., & Ryff, C. D. (2011). Cultural differences in the dialectical and non-dialectical emotional styles and their implications for health. *Cognition & Emotion, 25*, 22–39.
- Moberly, N. J., & Watkins, E. R. (2008). Ruminative self-focus, negative life events, and negative affect. *Behaviour Research and Therapy, 46*, 1034–1039.
- Mogg, K., & Bradley, B. P. (2005). Attentional bias in generalized anxiety

disorder versus depressive disorder. *Cognitive Therapy and Research*, 29, 29–45.

守谷 大樹・河西 哲子・入戸野 宏 (2011). 感情状態が感覚入力段階における注意焦点の範囲に及ぼす効果 感情心理学研究, 19, 1–9.

Nejad, A. B., Fossati, P., & Lemogne, C. (2013). Self-referential processing, rumination, and cortical midline structures in major depression. *Frontiers in Human Neuroscience*, 7, 666.

Nepon, T., Flett, G. L., Hewitt, P. L., & Molnar, D. S. (2011). Perfectionism, negative social feedback, and interpersonal rumination in depression and social anxiety. *Canadian Journal of Behavioural Science*, 43, 297–308.

Nolen-Hoeksema, S. (1991). Responses to depression and their effects on the duration of depressive episodes. *Journal of Abnormal Psychology*, 100, 569–582.

Nolen-Hoeksema, S. (2000). The role of rumination in depressive disorders and mixed anxiety/depressive symptoms. *Journal of Abnormal Psychology*, 109, 504–511.

Nolen-Hoeksema, S., & Morrow, J. (1993). Effects of rumination and distraction on naturally occurring depressed mood. *Cognition & Emotion*, 7, 561–570.

Nolen-Hoeksema, S., Stice, E., Wade, E., & Bohon, C. (2007). Reciprocal relations between rumination and bulimic, substance abuse, and depressive symptoms in female adolescents. *Journal of Abnormal Psychology*, 116, 198–207.

Nolen-Hoeksema, S., Wisco, B. E., & Lyubomirsky, S. (2008). Rethinking



Rumination. *Perspectives on Psychological Science*, 3, 400–424.

及川 恵 (2003). 気晴らしの情動調節プロセス——効果的な活用に向けて—— 教育心理学研究, 51, 443–456.

Okumura, Y., & Higuchi, T. (2011). Cost of depression among adults in Japan. *Primary Care Companion for CNS Disorders*, 13, 1–9.

Olatunji, B. O., Naragon-Gainey, K., & Wolitzky-Taylor, K. B. (2013). Specificity of rumination in anxiety and depression: A multimodal meta-analysis. *Clinical Psychology: Science and Practice*, 20, 225–257.

Papageorgiou, C., & Wells, A. (2003). An empirical test of a clinical metacognitive model of rumination and depression. *Cognitive Therapy and Research*, 27, 261–273.

Peckham, A. D., McHugh, R. K., & Otto, M. W. (2010). A meta-analysis of the magnitude of biased attention in depression. *Depression and Anxiety*, 27, 1135–1142.

Philippot, P., & Brutoux, F. (2008). Induced rumination dampens executive processes in dysphoric young adults. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, 39, 219–227.

Prisciandaro, J. J., & Roberts, J. E. (2005). A taxometric investigation of unipolar depression in the national comorbidity survey. *Journal of Abnormal Psychology*, 114, 718–728.

Raes, F., Hermans, D., Williams, J. M. G., Bijttebier, P., & Eelen, P. (2008). A “Triple W”-model of rumination on sadness: Why am I feeling sad, what’s the meaning of my sadness, and wish I could stop thinking about my sadness (but I can’t!). *Cognitive Therapy and Research*, 32, 526–541.

- Raichle, M. E., MacLeod, A. M., Snyder, A. Z., Powers, W. J., Gusnard, D. A., & Shulman, G. L. (2001). A default mode of brain function. *Proceedings of the National Academy of Sciences, 98*, 676–682.
- Ravindran, A. V., Anisman, H., Merali, Z., Charbonneau, Y., Telner, J., Bialik, R. J., ... & Griffiths, J. (1999). Treatment of primary dysthymia with group cognitive therapy and pharmacotherapy: Clinical symptoms and functional impairments. *American Journal of Psychiatry, 156*, 1608–1617.
- Roberts, H., Watkins, E. R., & Wills, A. J. (2017). Does rumination cause “inhibitory” deficits? *Psychopathology Review, 4*, 341–376.
- Rowe, G., Hirsh, J. B., & Anderson, A. K. (2007). Positive affect increases the breadth of attentional selection. *Proceedings of the National Academy of Sciences, 104*, 383–388.
- Ruscio, J., & Ruscio, A. M. (2000). Informing the continuity controversy: A taxometric analysis of depression. *Journal of Abnormal Psychology, 109*, 473–487.
- Ruscio, A. M., & Ruscio, J. (2002). The latent structure of analogue depression: Should the Beck Depression Inventory be used to classify groups? *Psychological Assessment, 14*, 135–145.
- Rush, A. J., Trivedi, M. H., Wisniewski, S. R., Nierenberg, A. A., Stewart, J. W., Warden, D., ... & McGrath, P. J. (2006). Acute and longer-term outcomes in depressed outpatients requiring one or several treatment steps: A STAR\* D report. *American Journal of Psychiatry, 163*, 1905–1917.
- 坂本 真士 (1998). 自己注目と抑うつ——抑うつ of 発症・維持を説明する

3 段階モデルの提起—— 心理学評論, 41, 283-302.

佐藤 秀樹・国里 愛彦・小関 俊祐・鈴木 伸一 (2019). Ruminatation about an Interpersonal Offense Scale (RIO) 日本語版の作成と信頼性・妥当性の検討 認知療法研究, 12, 111-119.

佐藤 秀樹・伊藤 理紗・鈴木 伸一 (2017). 考え込み方略の有無と刺激の感情価による検索誘導性忘却の差異の検討 認知療法研究, 10, 45-53.

佐藤 徳・安田 朝子 (2001). 日本語版 PANAS の作成 性格心理学研究, 9, 138-139.

Schmaling, K. B., Dimidjian, S., Katon, W., & Sullivan, M. (2002). Response styles among patients with minor depression and dysthymia in primary care. *Journal of Abnormal Psychology, 111*, 350-356.

Schmukle, S. C., Elgoff, B. & Burns, L. R. (2002). The relationship between positive and negative affect in the Positive and Negative Affect Schedule. *Journal of Research in Personality, 36*, 463-475.

島 悟・鹿野 達夫・北村 俊則・浅井 昌弘 (1985). 新しい抑うつ性自己評価尺度について 精神医学, 27, 717-723.

清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.

Siegle, G. J., Ghinassi, F., & Thase, M. E. (2007). Neurobehavioral therapies in the 21st century: Summary of an emerging field and an extended example of cognitive control training for depression. *Cognitive Therapy and Research, 31*, 235-262.

Slade, T., & Andrews, G. (2005). Latent structure of depression in a

- community sample: A taxometric analysis. *Psychological Medicine*, 35, 489–497.
- Smart, L. M., Peters, J. R., & Baer, R. A. (2016). Development and validation of a measure of self-critical rumination. *Assessment*, 23, 321–332.
- Smith, J. M., & Alloy, L. B. (2009). A roadmap to rumination: A review of the definition, assessment, and conceptualization of this multifaceted construct. *Clinical Psychology Review*, 29, 116–128.
- Spasojević, J., & Alloy, L. B. (2001). Rumination as a common mechanism relating depressive risk factors to depression. *Emotion*, 1, 25–37.
- 杉浦 義典 (2009). アナログ研究の方法 新曜社
- Suway, J. G., & Fox, N. A. (2012). Cognitive bias modification. In J. A. Burack, J. T. Enns, & N. A. Fox (Eds.), *Cognitive science, development, and psychopathology: Typical and atypical developmental trajectories of attention* (pp. 47–69). Oxford: Oxford University Press.
- 高野 慶輔・丹野 義彦 (2008a). 反芻と抑うつとの相互増強的関連 日本心理学会第 73 回大会発表論文集, 398.
- 高野 慶輔・丹野 義彦 (2008b). Rumination-Reflection Questionnaire 日本語版作成の試み パーソナリティ研究, 16, 259–261.
- Takano, K., & Tanno, Y. (2009). Self-rumination, self-reflection, and depression: Self-rumination counteracts the adaptive effect of self-reflection. *Behaviour Research and Therapy*, 47, 260–264.
- Takano, K., & Tanno, Y. (2011). Diurnal variation in rumination. *Emotion*, 11, 1046–1058.
- 立森 久照・長沼 洋一・小山 智典・小山 明日香・川上 憲人 (2007).

こころの健康に関する地域疫学調査の成果の活用に関する研究——  
こころの健康についての疫学調査に関する研究—— 平成 18 年度  
総括・分担研究報告書

- Teasdale, J. D. (1985). Psychological treatments for depression: How do they work? *Behaviour Research and Therapy*, *23*, 157–165.
- Terwee, C. B., Mokkink, L. B., Knol, D. L., Ostelo, R. W., Bouter, L. M., & de Vet, H. C. (2012). Rating the methodological quality in systematic reviews of studies on measurement properties: A scoring system for the COSMIN checklist. *Quality of Life Research*, *21*, 651–657.
- Van de Walle, M., Bijttebier, P., De Raedt, R., & Bosmans, G. (2017). Repetitive thinking about the mother during distress moderates the link between children's attentional breadth around the mother and depressive symptoms in middle childhood. *Behaviour Research and Therapy*, *90*, 137–146.
- Vanlessen, N., De Raedt, R., Koster, E. H., & Pourtois, G. (2016). Happy heart, smiling eyes: a systematic review of positive mood effects on broadening of visuospatial attention. *Neuroscience & Biobehavioral Reviews*, *68*, 816–837.
- Vittengl, J. R., Clark, L. A., Dunn, T. W., & Jarrett, R. B. (2007). Reducing relapse and recurrence in unipolar depression: A comparative meta-analysis of cognitive-behavioral therapy's effects. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, *75*, 475–488.
- Vogel, E., McCollough, A. & Machizawa, M. (2005). Neural measures reveal individual differences in controlling access to working memory. *Nature*, *438*, 500–503.

- Wade, N. G., Vogel, D. L., Liao, K. Y.-H., & Goldman, D. B. (2008). Measuring state-specific rumination: Development of the Rumination About an Interpersonal Offense Scale. *Journal of Counseling Psychology, 55*, 419–426.
- Watkins, E., & Brown, R. G. (2002). Rumination and executive function in depression: An experimental study. *Journal of Neurology, Neurosurgery & Psychiatry, 72*, 400–402.
- Watkins, E. R., & Nolen-Hoeksema, S. (2014). A habit-goal framework of depressive rumination. *Journal of Abnormal Psychology, 123*, 24–34.
- Watkins, E. R., & Roberts, H. (2020). Reflecting on rumination: Consequences, causes, mechanisms and treatment of rumination. *Behaviour Research and Therapy, 127*, 103573.
- Wells, A & Matthews, G. (1994). *Attention and emotion: A clinical perspective*. Hove: Lawrence Erlbaum Associates.
- Whitmer, A. J., & Banich, M. T. (2007). Inhibition versus switching deficits in different forms of rumination. *Psychological Science, 18*, 546–553.
- Whitmer, A. J., & Gotlib, I. H. (2013). An attentional scope model of rumination. *Psychological Bulletin, 139*, 1036–1061.
- World Health Organization (2017). Depression and other common mental disorders: Global health estimates. Retrieved from <https://apps.who.int/iris/handle/10665/254610> (March 3, 2020)
- Wild, D., Grove, A., Martin, M., Eremenco, S., McElroy, S., Verjee-Lorenz, A., & Erikson, P. (2005). Principles of good practice for the translation and cultural adaptation process for patient-reported outcomes (PRO) measures: Report of the ISPOR Task Force for Translation and Cultural

Adaptation. *Value in Health*, 8, 94–104.

Yang, R., Cui, L., Li, F., Xiao, J., Zhang, Q., & Oei, T. P. (2017). Effects of cognitive bias modification training via smartphones. *Frontiers in Psychology*, 8, 1370.

吉津 潤・関口 理久子・雨宮 俊彦（2013）．感情調節尺度（Emotion Regulation Questionnaire）日本語版の作成 感情心理学研究，20，56–62.

Zawadzki, M. J. (2015). Rumination is independently associated with poor psychological health: Comparing emotion regulation strategies. *Psychology & Health*, 30, 1146–1163.

Zetsche, U., D'Avanzato, C., & Joormann, J. (2012). Depression and rumination: Relation to components of inhibition. *Cognition & Emotion*, 26, 758–767.

## 付 録

1. Rumination about an Interpersonal Offense Scale (RIO) の翻訳許可証明書
2. 研究 2 の事前のサンプルサイズ設計結果
3. 研究 3 の事前のサンプルサイズ設計結果
4. フェイスシートと健康アンケート
5. Rumination about an Interpersonal Offense Scale (RIO) 日本語版 (佐藤ら, 2019; 研究 1 で作成)
6. Rumination-Reflection Questionnaire 日本語版 (RRQ; 高野・丹野, 2008)
7. Emotion Regulation Questionnaire 日本語版 (ERQ; 吉津ら, 2013)
8. 日本語版 Center for Epidemiologic Studies Depression (CES-D; 島ら, 1985)
9. 日本語版 Positive and Negative Affect Schedule (PANAS; 佐藤・安田, 2001)
10. 修正版 Attentional Breadth Task 教示文書 (研究 2 と研究 3 で使用)

### 脚注

日本語版 Ruminative Responses Scale (RRS; Hasegawa, 2013) は著作権の関係で記載を省略した。



付録 1 : Rumination about an Interpersonal Offense Scale (RIO) の翻訳  
許可証明書

2020/3/12

Waseda メール - the Rumination about an Interpersonal Offense Scale (RIO)



SATO, Hideki [REDACTED]

---

**the Rumination about an Interpersonal Offense Scale (RIO)**

---

Wade, Nathaniel G [PSYCH] [REDACTED]

2018年4月24日 0:10

To: 佐藤 秀樹 [REDACTED]

Hello, Hideki.

No apologies needed for your English. Thank you for writing to me. I am happy to give you permission to translate the RIO into Japanese. I would value having the scale more accessible to non-English speakers.

I would be interested in your findings, if you end up doing research on the Japanese version (and perhaps sharing that version with me as well).


Here is the scale as we typically use it in English.

Best,

Nathaniel

[元のメッセージ非表示]

---

 **Rumination about an Interpersonal Offense (RIO) Scale.pdf**  
56K

付録2

研究2の事前のサンプルサイズ設計結果

---

F tests - ANOVA: Fixed effects, special, main effects and interactions

---

**Analysis:**

A priori: Compute required sample size

**Input:**

Effect size f	0.40
$\alpha$ err prob	0.05
Power (1- $\beta$ err prob)	0.8
Numerator df	1
Number of groups	4

**Output:**

Noncentrality parameter $\lambda$	8.30
Critical F	4.05
Denominator df	47
Total sample size	51
Actual power	0.81

---

付録3

研究3の事前のサンプルサイズ設計結果

---

F tests - ANOVA: Repeated measures, within-between interaction

---

**Analysis:**

A priori: Compute required sample size

**Input:**

Effect size f	0.20
$\alpha$ err prob	0.05
Power (1- $\beta$ err prob)	0.8
Number of groups	2
Number of measurements	3
Corr among rep measures	0.5
Nonsphericity correction $\epsilon$	1

**Output:**

Noncentrality parameter $\lambda$	10.50
Critical F	3.11
Numerator df	2
Denominator df	80
Total sample size	42
Actual power	0.82

---

付録4：フェイスシートと健康アンケート

あなたの年齢と性別を記入してください。

---

---

年齢：（            ）歳

性別：    男性        ・        女性        （当てはまる方に○をつけてください）

以下の内容は、あなたが実験に参加可能かどうかの判断材料とします。  
できるだけありのままをお答えください。  
それぞれの質問に対して、いずれか1つでも該当する場合には『はい』に○をつけてください。

---

---

- 1    現在、何か病気やけがをしている。
  
- 2    現在、何か薬を飲んでいる。
  
- 3    現在、極度の睡眠不足または疲労を感じている。
  
- 4    現在、心理療法やカウンセリングを受けている。あるいは過去に心理療法やカウンセリングを受け、特定の診断名を与えられたことがある。
  
- 5    現在、あるいは実験直前に顕著な心理的苦痛（たとえば、自殺念慮、パニック発作、重度の抑うつ症状）、あるいはトラウマティックな体験を経験している。

はい        ・        いいえ

（1～5の質問に対して、1つでも当てはまる場合には『はい』に○をつけてください）

付録 5 : Rumination about an Interpersonal Offense Scale (RIO) 日本語  
版 (佐藤ら, 2019; 研究 1 で作成)

以下の項目は, 対人関係で生じるネガティブな気持ちの反応を表しています。  
今現在, 以下の文章がどの程度「当てはまる」か「当てはまらない」かを教えてください。

	全く 当て はま らな い	当 て は ま ら な い	ど ち ら と も い え な い	当 て は ま る	非 常 に 良 く 当 て は ま る
1. 今現在, 自分がいかに不当に扱われたかを考えずには いられない	1	2	3	4	5
2. 今現在, 対人関係の嫌な出来事を思い出してしまうため, 私は自分の人生を思いきり楽しむことができない	1	2	3	4	5
3. 今現在, 自分が受けた不当な扱いを考えないようにする ことは難しい	1	2	3	4	5
4. 今現在, なぜ気分が落ち込むのか, その理由を分かろうと 努めている	1	2	3	4	5
5. 今現在, 私の気持ちを落ち込ませるあの時の出来事が, 私の頭から離れることはない	1	2	3	4	5
6. 今現在, 私は気がつけば, 頭の中であの時の事を何度も 繰り返し思い出している	1	2	3	4	5

付録 6 : Rumination-Reflection Questionnaire 日本語版 (RRQ ; 高野・丹野, 2008)

以下の項目を読んで、それが自分の性質に当てはまる程度を考えてください。  
そして、最もよく当てはまるものを1つだけ選んで、選んだ番号を○で囲んでください。  
あまり考え込まずに思うとおりに回答してください。

	全く当てはまらない	当てはまらない	どちらともいえない	当てはまる	良くあてはまる
1. 自分のある側面について考えるのをやめたいと思っても、そこに注意が向くことが多い	1	2	3	4	5
2. 最近自分が行ったことやしたことについて、頭の中でいつも思い返しているように思う	1	2	3	4	5
3. 時々、自分自身について考えるのをなかなかやめることができない	1	2	3	4	5
4. 口論や意見の不一致があると、その後長い間私は起こったことを考え続ける	1	2	3	4	5
5. 本当に長い間、自分に起こったことを繰り返し考えたり、つくづくと考えたりしがちだ	1	2	3	4	5
6. 終わったことやしてしまったことを思い返すために時間を使うことはない	1	2	3	4	5
7. 過去にあった場面で、自分がどう振る舞ったかを頭の中でよく思い返している	1	2	3	4	5
8. 自分がしたことについて、自らもう一度評価していることに気が付くことがよくある	1	2	3	4	5
9. あまり長い間、自分自身のことを繰り返し考えたり、じっくり考えたりすることは決してない	1	2	3	4	5
10. 不愉快な考えを頭の中から外へ出すことはたやすい	1	2	3	4	5

次のページに続きます

付録 6 : Rumination-Reflection Questionnaire 日本語版 (RRQ ; 高野・丹野, 2008) (続き)

	全く当てはまらない	当てはまらない	どちらともいえない	当てはまる	良くあてはまる
11. もはや関心を持つべきではない人生の出来事について熟考することがよくある	1	2	3	4	5
12. 私は、恥ずかしい、あるいはがっかりした瞬間を思い返すのに、非常に多くの時間を費やしている	1	2	3	4	5
13. 哲学的、抽象的な考えは、それほど私の興味を引くものではない	1	2	3	4	5
14. 私はそれほど物事を深く考えるタイプの人ではない	1	2	3	4	5
15. 「内的な」自己を探るのがとても好きだ	1	2	3	4	5
16. 物事に対する自分の態度や気持ちに、強い興味がある	1	2	3	4	5
17. 内省的、自制的な考え方は本当に好きではない	1	2	3	4	5
18. なぜそうするのかを分析するのがとても好きだ	1	2	3	4	5
19. 私は、「深い」、内省的なタイプの人だとよく人に言われる	1	2	3	4	5
20. 自己分析はあまり好きではない	1	2	3	4	5
21. もともと自己をとて探求したいと思っている	1	2	3	4	5
22. ものごとの本質や意味について深く考えることがとても好きだ	1	2	3	4	5
23. 自分の人生を哲学的に見ることがとても好きだとしばしば思う	1	2	3	4	5
24. 自分自身についてじっくり考えることは、楽しいとは思わない	1	2	3	4	5

付録 7 : Emotion Regulation Questionnaire 日本語版 (ERQ ; 吉津ら, 2013)

以下の10個の文章は、日頃の自分自身の感情の調節について記述した文章です。  
各質問項目について、あなた自身にどのくらいあてはまるか、  
当てはまる程度を表す数字に○印をつけてお答えください。

肯定的な感情とは、喜びや楽しさなど好ましい感情のことです。  
否定的な感情とは、悲しさや怒りなどの好ましくない感情のことです。

	全 く あ て は ま ら な い	ほ と ん ど あ て は ま ら な い	あ ま り あ て は ま ら な い	ど ち ら で も な い	や や あ て は ま る	か な り あ て は ま る	非 常 に あ て は ま る
1. 私は、自分が置かれている状況についての考え方を 変えることで、感情をコントロールする	1	2	3	4	5	6	7
2. 私は、否定的な感情をあまり感じたくない時は、 考えていることを変える	1	2	3	4	5	6	7
3. 私は、自分の感情を表に出さないことで、感情を コントロールする	1	2	3	4	5	6	7
4. 私は、もっと肯定的な感情を感じたいときは、 考えていることを変える	1	2	3	4	5	6	7
5. 私は、否定的な感情をあまり感じたくないときは、 その状況についての考え方を変える	1	2	3	4	5	6	7
6. 肯定的な感情を感じたときは、感情を表に出さな いように注意する	1	2	3	4	5	6	7
7. ストレスを感じる状況では、考え方を 変えて落ち着いていられるようにする	1	2	3	4	5	6	7
8. 私は自分の感情を表には出さない	1	2	3	4	5	6	7
9. 私は、もっと肯定的な感情を感じたいときは、 その状況についての考え方を 変える	1	2	3	4	5	6	7
10. 否定的な感情を感じたときは、その感情を決して 表に出さないようにする	1	2	3	4	5	6	7



付録 8 : 日本語版 Center for Epidemiologic Studies Depression (CES-D ; 島ら , 1985)

この1週間のあなたのからだや心の状態についてお聞きます。  
 各々の文章を読み、最もよくあてはまるものに○をつけてください。

	ま れ に く な し	い く ら か く 少 し	時 に く ま あ ま あ	ほ と ん ど く い つ も
1. 普段では何でもないことがわずらわしかった	0	1	2	3
2. 食べたくなかった・食欲がなかった	0	1	2	3
3. たとえ友人や家族が助けてくれたとしても、 憂うつな気分は晴れないと感じた	0	1	2	3
4. 自分は他の人と同じくらいに価値があると感じた	0	1	2	3
5. 物事に集中できなかった	0	1	2	3
6. 気分が落ち込んでいると感じた	0	1	2	3
7. やること全てに骨が折れると感じた	0	1	2	3
8. 将来に希望があると感じた	0	1	2	3
9. これまでの人生は失敗だったと感じた	0	1	2	3
10. 何かにびくびくすることがあった	0	1	2	3
11. 落ちつかず眠れなかった	0	1	2	3
12. 幸せな気分だった	0	1	2	3
13. 普段より口数が少なかった	0	1	2	3
14. 一人ぼっちだと感じた	0	1	2	3
15. 人々がよそよそしいと感じた	0	1	2	3
16. 人生を楽しんだ	0	1	2	3
17. 涙ぐむことがあった	0	1	2	3
18. 悲しい気分だった	0	1	2	3
19. まわりの人が自分を嫌っていると感じた	0	1	2	3
20. 物事に手がつかないと感じた	0	1	2	3

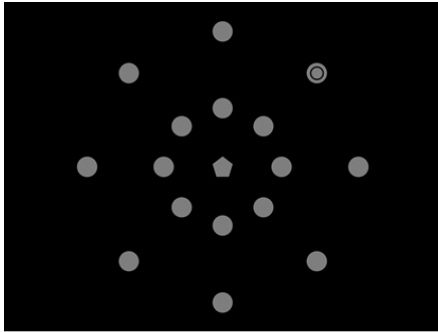
付録 9 : 日本語版 Positive and Negative Affect Schedule (PANAS ; 佐藤・安田, 2001)

現在のあなたの気分にごくあてはまるかを、  
選択肢の中から最も適当なものに○をつけてください。

	全く 当ては まらな い	当 ては まら ない	ど ち ら か と は ま ら な い	ど ち ら か と い え ば	当 て は ま る	非 常 に よ く あ て は ま る
1. びくびくした	1	2	3	4	5	6
2. 活気のある	1	2	3	4	5	6
3. おびえた	1	2	3	4	5	6
4. 誇らしい	1	2	3	4	5	6
5. うろたえた	1	2	3	4	5	6
6. 心配した	1	2	3	4	5	6
7. 強気な	1	2	3	4	5	6
8. 気合いの入った	1	2	3	4	5	6
9. びりびりした	1	2	3	4	5	6
10. きっぱりとした	1	2	3	4	5	6
11. 苦悩した	1	2	3	4	5	6
12. わくわくした	1	2	3	4	5	6
13. 機敏な	1	2	3	4	5	6
14. 熱狂した	1	2	3	4	5	6
15. 恥じた	1	2	3	4	5	6
16. いらだった	1	2	3	4	5	6

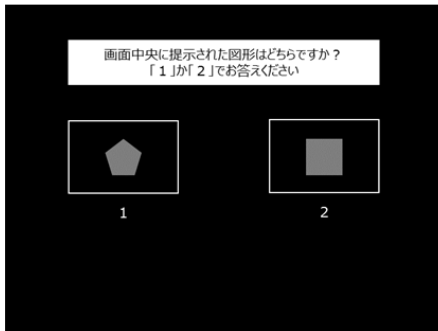
付録 10：修正版 Attentional Breadth Task 教示文書（研究 2 と研究 3 で使用）

■ 本実験は、以下のスライドの流れで進みます。



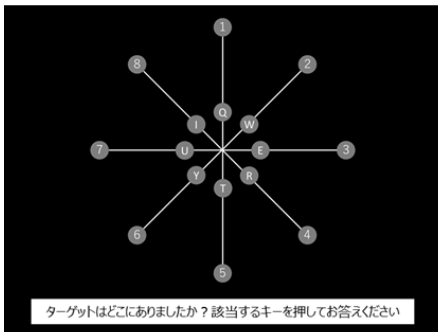
画面 1

- 画面の中央に正四角形か正五角形と、その周囲に 16個の丸が提示されます
- 参加者様は、画面中央の図形と、印のある丸（ターゲット）の場所を覚えて下さい
- 注視点（「+」のマーク）を500ms提示した後、ごく短い時間しか画面 1 は提示されませんので、画面を注意して見て下さい



画面 2

前の画面の中央で表示された図形を判断してください



画面 3

画面 1 で提示されたターゲットの位置を判断してください

## 謝 辞

博士論文の作成にあたり、多くの方々からご指導とご助言ならびにお力添えをいただきましたことを、この場を借りてお礼を申し上げます。

主査である鈴木伸一先生には、修士課程から現在に至るまで厳しくも温かいご指導を賜りました。科学者一実践家として何事にも真摯に妥協することなく取り組まれる姿勢や、研究室運営に関わる多くのことを学ばせていただきました。博士課程の途中で研究テーマを変更することになった際も、先生の姿を見て学ばせていただいたことでその決断をすることができ、結果として博士論文をまとめることができました。鈴木先生からいただいたお言葉の1つひとつが、私の研究や臨床の礎になっていると思います。

副査をお引き受けいただきました嶋田洋徳先生と田山淳先生には、博士論文のご指導を賜りました。嶋田先生には修士論文でもご指導いただき、博士論文で用いた実験課題や操作の妥当性や本知見による臨床応用可能性の考え方に至るまで、多くのことを学ばせていただきました。田山先生には、当初はあまり面識がなかったにもかかわらず、根拠の薄い部分を的確にご指摘いただき、その中でどう研究を進めるべきかななどを丁寧にご指導いただきました。

福島県立医科大学の前田正治先生や瀬藤乃理子先生には、いつも温かい励ましのお言葉をいただきました。また、放射線医学県民健康管理センターの先生方、竹林唯先生、竹林由武先生、青木俊太郎先生、小林智之先生にも、東日本大震災の影響が今なお続いている福島での研究・臨床活動やCOVID-19のメンタルヘルス支援について、考え実行する機会を提供していただきました。この恵まれた環境でなければ、働きながら

博士論文をまとめることはできなかったと思います。

野田隆政先生（国立精神・神経医療研究センター）や満岡義敬先生（日本大通 満岡クリニック）には、特に臨床場面でのご指導を賜りました。野田先生からは、日々の臨床に還元できる研究を行うことの重要さとその心構えなどを学ばせていただきました。満岡先生からは、豊富な臨床経験に基づくケースの見立てや支援の進め方などを学ばせていただきました。

岡島義先生（東京家政大学）、小関俊祐先生（桜美林大学）、伊藤大輔先生（兵庫教育大学）、国里愛彦先生（専修大学）、佐々木美保先生（金沢医科大学）、五十嵐友里先生（東京家政大学）には、研究室の合宿や学会等でご指導を賜りました。先生方の研究や臨床の着眼点や懸案に対する対応案などをあらゆる場面でお聞きすることができたことは、私にとって大変貴重な経験となりました。特に国里先生には、鈴木先生が特別研究期間中のゼミやその他の多くの機会でご指導をいただき、辛い時期の大きな励みとなりました。また、田中知恵先生（明治学院大学）には、学部のゼミでご指導を賜り、大学院に進学後も学会などでお目にかかった際に優しくお声掛けいただきました。先生方の研究や臨床に対する姿勢が私自身のモデルになっております。

医療心理学／職場メンタルヘルス学研究室の皆様には、研究や臨床のみならず、日々の生活に至るまでさまざまなご支援をいただきました。小川祐子先生（国立がん研究センター中央病院）や伊藤理紗先生（東京大学）には、博士課程の先輩として研究や臨床活動のみならず、研究室運営や後輩指導のことでも常に多くのサポートをいただきました。小野はるかさんや畑琴音さんには、後輩でありながらも多くの助言やサポートをいただきました。

本論文の執筆にあたり，実験にご協力いただいた皆様にもお礼申し上げます。反すうや気分の実験操作や認知課題に取り組んでいただくことはさまざまな負荷があったかと存じますが，ご協力いただいたおかげで研究を遂行することができました。

この謝辞を書くなかで，改めて多くの方々からのご指導やご支援によって博士論文を完成させることができたと感じております。皆様の支えがなければ，研究・臨床活動を続けることはできませんでした。改めて心よりお礼申し上げます。

最後に，この年齢まで学生であることを認めてくれた家族と，私の修了と就職をいつも気にかけてくれて，この報告をすることができなかつた亡き祖母に感謝いたします。

2020年7月

佐藤 秀樹